

JICA中部
2025年度 教師海外研修 報告書



ネパール

7/28(月)~8/9(土)

13日間(現地11日間)





写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った場面』解説

伊藤袖季「ママとパパの幸せ」

二人でいるときはいつもお互いを気にかけていて会話を大切にしていた。40年近くを共に過ごし、楽しいことも苦しいことも一緒に乗り越えてきた。幸せとは何かを二人に教えてもらった。

澤田晃一「スクールが来るよ」

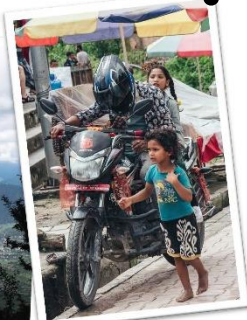
村の子どもたちと歩いていた時、反対側の山に雲から白い帯が伸びていくのが見えた。子どもが「スクールが来るよ」と教えてくれ、10分後に本当に豪雨に遭った。ずぶぬれになりながら岩陰で一緒に雨宿りをした体験は、ネパールの雄大な自然や子どもたちとの距離が一気に縮まった瞬間として強く記憶に残っている。

橋本幹子「私を握る小さな手」

児童労働の現実を知った後、町で出会ったストリートチルドレンが私の手を握った。我が子と同じ小さな手。子どもを取り巻く厳しい現実や将来を思うと、胸が締め付けられ涙がこぼれそうになった。

杉下絵里華「折り紙でつながる日本とネパール」

初めての現地授業は不安が多かったが、習字や豆つかみ等に挑戦する子どもたちの姿に喜びを感じ、言葉を越えて思いが伝わることを実感した。



松本双葉「日本への信頼に応えたい」

日本語学校では、日本で働く未来について目を輝かせて話してくれる若者達が出た。家族を連れて日本に住むのが夢というこの人達が、日本でどんな思いをするのだろうか。その期待に応えられるような日本をつくりたい。

垣内望花「みんなの笑顔が集まった瞬間」

初めての現地授業は不安が多かったが、習字や豆つかみ等に挑戦する子どもたちの姿に喜びを感じ、言葉を越えて思いが伝わることを実感した。



丹羽真琴「この笑顔、一生守りたい!」

ネパールで出会った子どもたちの笑顔はキラキラしていた。自分たちが関わったことでこんなにも笑顔になってくれたことが嬉しかった。子どもたちの笑顔が溢れる世界になったらいいな。

野田琴乃「不安なことは『ありません』」

日本語学校で勉強をする学生たち。我々と同世代の方が、肩を合わせて机に向かい、一生懸命学習していた。日本へ行くことが本当に楽しみで、不安なことは全くないとキラキラした表情で語っていたのが印象深い。

真野直亮「夢を思う人強い!!」

家族のいる祖国を離れ、日本のレストランや介護の施設で働くことを目標に学ぶ日本語学校の生徒達が、仕事をしながら各々が熱い思いを持って学ぶ姿に胸を打たれた。

2025年度 教師海外研修報告書

目次

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』（表紙裏、裏表紙裏）

I. 教師海外研修の概要	1
1 ● 目的・ミッション	
2 ● 訪問国と訪問先	
5 ● 研修の受講者	
6 ● 研修全体のスケジュール	
II. 出発前後の国内研修・説明会	7
7 ● 事前研修	
10 ● 出発前説明会	
11 ● 事後研修①	
III. 現地研修の様子と受講者の学び	14
14-27 ● 訪問先別に受講者2人ずつの報告	
IV. 帰国後の報告	28
28-36 ● 現地研修報告書（各自の目的とその達成度、3つの学びの柱の観点から）	
37-38 ● 開発教育指導者研修（実践編）第3回、開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2026	
V. 実践報告書	39
39 ● 実践報告書の内容一覧	
40 ● 伊藤 柚季：みんなで はなそう まちのこと みはまクリーンプロジェクト	
47 ● 垣内 望花：あっったかい 世界・日本・学校・クラスへ～共に生きる～	
55 ● 澤田 晃一：ネパールの高校生は何の夢を見るのか	
64 ● 杉下 絵里華：ネパールからのメッセージ！ぼくらの未来会議	
72 ● 丹羽 真琴：創ろう！みんなの世界・みんなの幸せ♡	
79 ● 野田 琴乃：違いを知り、同じ願いへ	
87 ● 橋本 幹子：ネパールへ冒険！お宝ゲット大作戦！～つながる・考える・伝え合う～	
95 ● 松本 双葉：咲かそう！わたし・あなた・みんなの笑顔	
102 ● 真野 直亮：Personal is Political～共生社会に向けた私たちの選択～	
VI. 研修全体のふりかえり・評価	110
110 1. 研修の満足度について	
110 2. 開発教育・国際理解教育の実践について	
111 3. 学習者のより良い変化について	
112 4. 研修内容への評価	
115 5. 教師海外研修と開発教育指導者研修（実践編）の両方を受講することの効果	

I. 教師海外研修の概要

● 目的・ミッション

(1) 目的

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の2点を本研修の目的とした。

- ① 開発教育・国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、開発途上国訪問や事前・事後の研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の現場、さらには開発教育・国際理解教育の意義について理解を深めること
- ② 研修受講者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと、また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育・国際理解教育の普及に寄与すること

(2) 受講者が設定した「わたしたちのミッション」

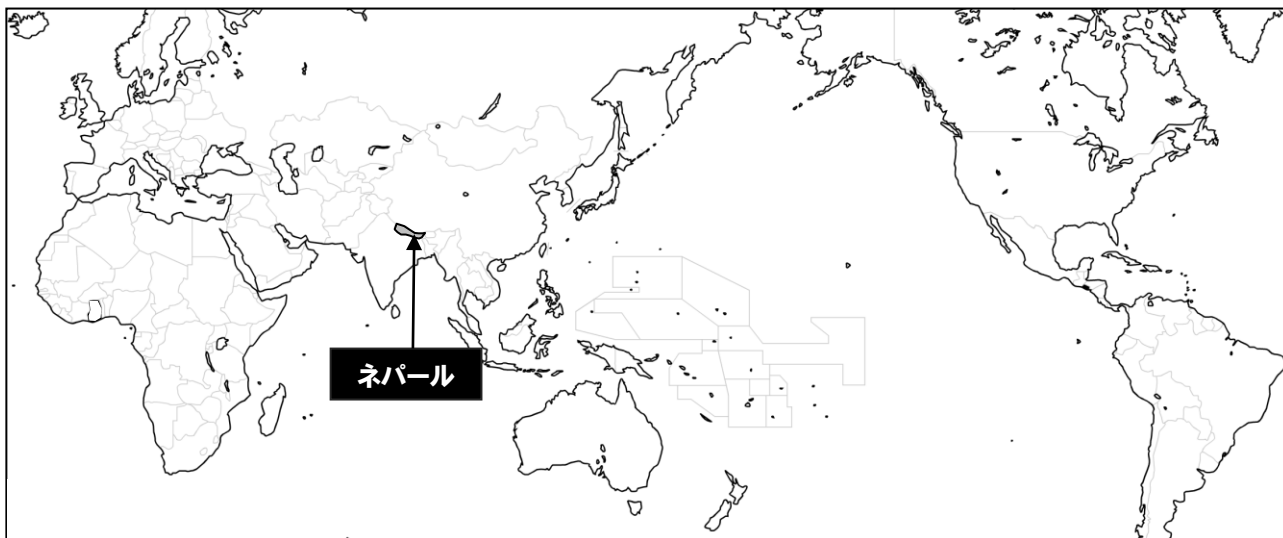
本研修の上記の目的を踏まえ、海外研修の全体のミッションを、受講者同士で次のとおり設定した。

- | | |
|-------|---|
| <現地> | <ol style="list-style-type: none"> 1. ネパールを五感で味わう 2. ネパールと日本の違いを楽しむ 3. 「日本・ネパール」「私たち・世界」とのつながりを感じる 4. ねらいをもって教材を集める 5. ネパールで友達を3人以上つくる |
| <教育> | <ol style="list-style-type: none"> 6. ネパールで味わい楽しんだことを、ネパールの子にも日本の子にも伝える 7. 子どもが自分事として考える授業を受けることで、子どもたちの視野を広げる 8. 職場の人たちにおもしろそうと思わせる 9. 同僚・地域・保護者の方に、「私もやりたい!」と思ってもらう |
| <私たち> | <ol style="list-style-type: none"> 10. 自分は日本代表として日本大使になる! 11. 自分が行ったあとも「つながり」続ける 12. この仲間とのつながりを続け、学びを広げる。続けていく 13. 素敵な未来を一緒に作っていく人を増やす |

● 訪問国と訪問先

(1) 訪問国

訪問国はネパールである。



(2) 現地研修における訪問先

訪問先は、JICA 中部と NIED・国際理解教育センター（運営委託先）が、①～③の点を踏まえて行程案を検討し、JICA ネパール事務所と調整の上で決定した。

- ① 現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定する。
- ② ネパールの概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA 事業を踏まえる。
- ③ 「教材化にあたっての子どもたちの学びの柱」を下表のとおりとする。

教材化にあたっての子どもたちの学びの柱

学びの柱	内容・視点
1. ネパールに肯定的に出会う	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。 ◇ 多角的に肯定的にネパールと出会い、人の顔が見え、身近に感じられるようになる。
2. 日本とネパールとのつながりや同一性を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること（同一性）を理解する。 ◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とネパールとのつながりに気づき、つながりを築く。
3. 共通の課題について共に考え・共に越える	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 相手を知ることによって自国（自分）をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。 ◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入口を提供する。

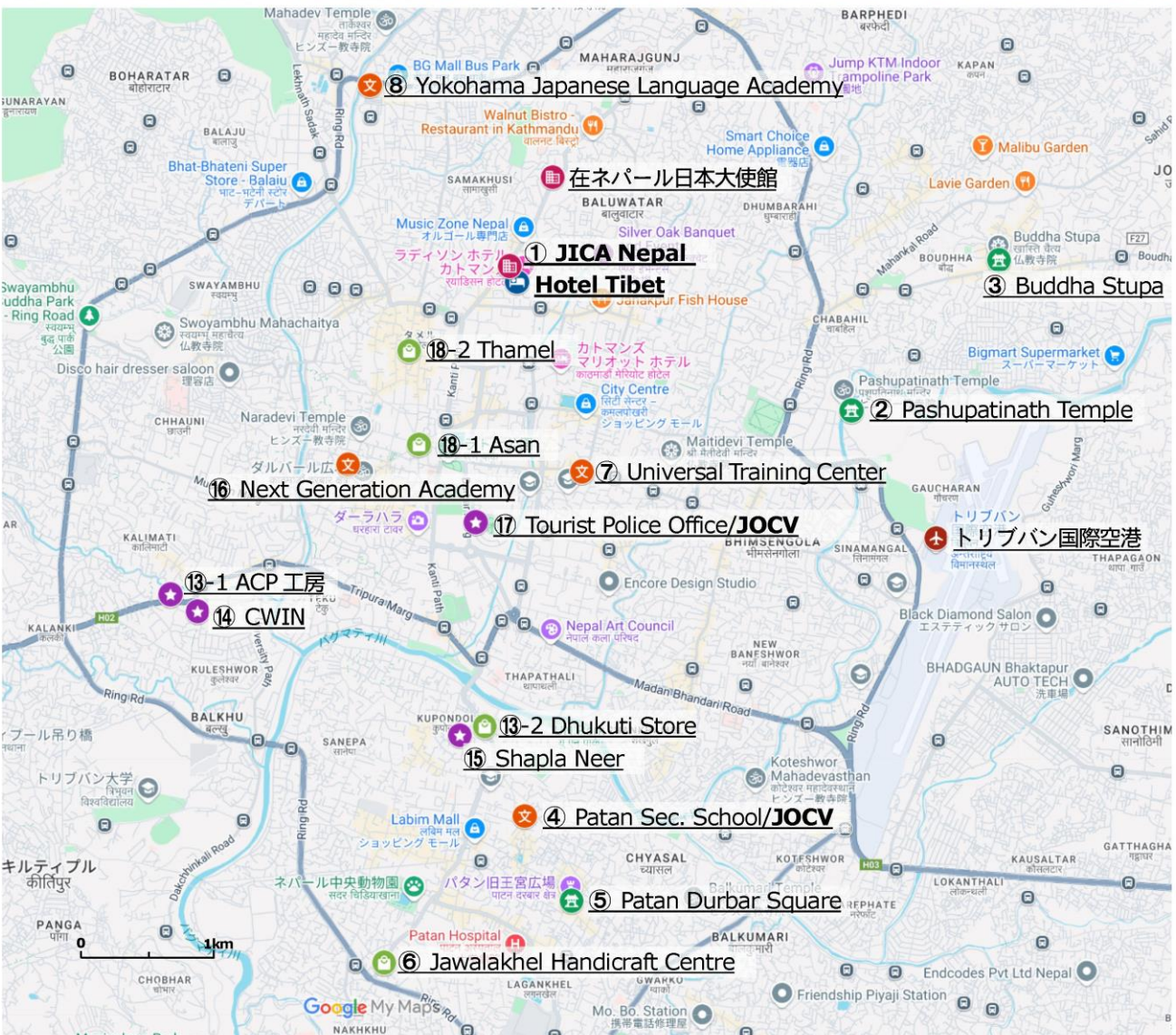
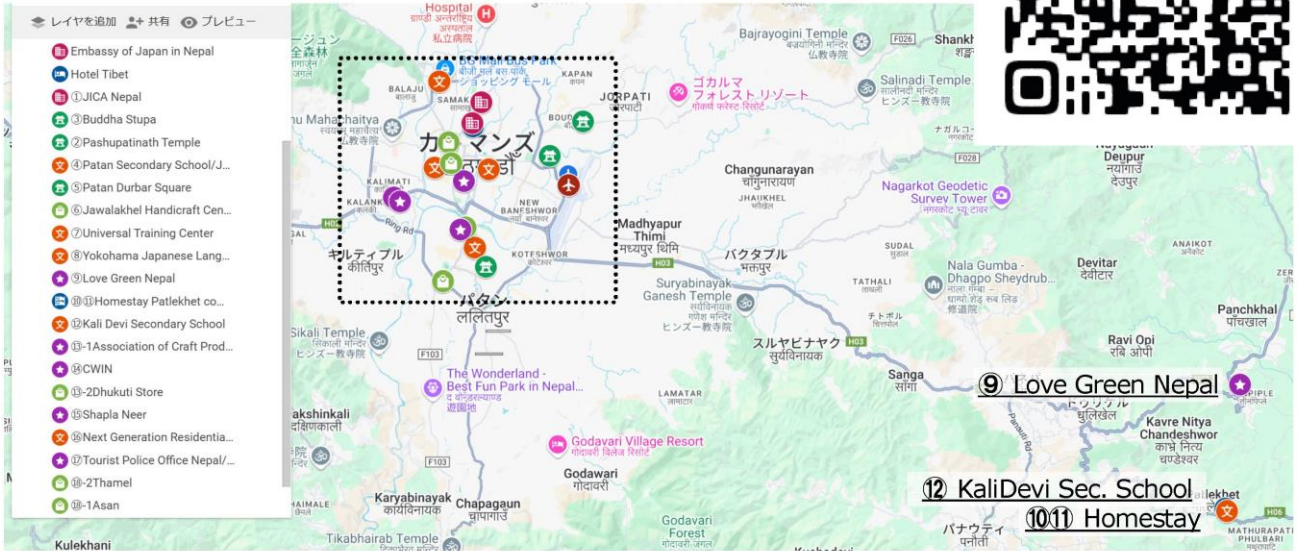
現地研修の訪問スケジュール

期日	訪問先・内容	宿泊
7/28 (月)	09:15 中部国際空港発－(KE744/2h05m)→11:20 仁川空港着(乗継2h15m)－ 13:35仁川空港発－(KE695/6h30m)→16:50カトマンズ(トリブバン空港)着→ホテル泊	ホテル チベット
29 (火)	① JICAネパール事務所ブリーフィング(所長挨拶、自己紹介、JICA協力内容、教育・安全・健康) ② パシュパティナート寺院(ネパール最大のヒンドゥー教寺院の見学) ③ ボダナート寺院(チベット仏教の中心地の見学)	〃
30 (水)	④ 【協力隊】JICA海外協力隊(体育)活動/パタン高等学校(活動紹介、6年生の体育視察等) ⑤ パタン・ダルバール広場(古都の宮殿・寺院や職人工房の見学) ⑥ ジャワラケール手工芸センター(カーペット工房ショールーム見学)	〃
31 (木)	⑦ Universal Training Center(日本語学校授業見学、学生との意見交換) ★ ショッピングモール City Centre(昼食を兼ねて) ⑧ Yokohama Japanese Language Academy(職業訓練授業見学・説明、学生との意見交換)	〃
8/1 (金)	⑨ 【草の根】ラブグリーンネパール事業地(現地NGO循環型農業による生計向上現場、農家訪問) ⑩-1 ホームステイ組合による歓迎会(葉の皿作り) ⑪ ホームステイ ~8/3(日)朝9:30頃まで	ホーム ステイ
2 (土)	⑪ ホームステイ(終日) ⑩-2 ホームステイ組合による歓迎会(夕方/カルチャープログラム:歌や踊り)	〃
3 (日)	⑫ Kalidevi Secondary School(幼稚部~10年生の農村の学校/挨拶、模擬授業) ★ 中間ふりかえりミーティング	ホテル チベット
4 (月)	⑬-1 ACP(Association for Craft Producers)工房(工房見学、エコバッグ作り、活動紹介) ⑬-2 ACP直営店Dhukuti(商品見学、購入)	〃
5 (火)	⑭ CWIN(Child Workers in Nepal)事務所(現地NGO活動紹介、意見交換) ⑮ シャプラニール事務所(災害・児童労働・フェアトレード/日本NGO駐在員紹介、活動紹介等)	〃
6 (水)	⑯ 【草の根】Next Generation Residential Academy(防災クラブ活動を実践する学校/ 英語ミディアム共学ボーディングスクール/挨拶、防災クラブ活動見学、模擬授業、教員との意見交換)	〃
7 (木)	⑰ 【協力隊】JICA海外協力隊(交通安全)活動/JICA事務所(活動紹介)→交通整理視察 ⑱ アサン地区/タメル地区(古くからの市場/土産店やレストラン、散策・食事・教材購入等) ⑲ JICA事務所関係者との懇親会	〃
8 (金)	★ 最終ふりかえりミーティング ★ JICAネパール事務所 帰国前報告会(所長挨拶、各自報告5分/人、アンケート等) 19:20カトマンズ(トリブバン空港)発－(KE696/6h30m)－	〃 レイト C.O.
9 (土)	05:05仁川空港着－(乗継5h30m)－10:35発－(KE741/1h55m)→12:30中部国際空港着!	－

注:【草の根】…草の根技術協力事業

現地研修の訪問先

Google My Map



● 研修の受講者

(1) 受講者

9名の研修受講者の属性及び同行者を含む名簿は以下のとおりである。
また、JICA 中部及び NIED が一名ずつ同行した。

年代：20代4名、30代4名、40代1名
地域：愛知県6名、岐阜県1名、静岡県2名
校種：小学校4名、中学校3名、特別支援学校1名、教育委員会1名

教師海外研修受講者及び同行者名簿

No.	名前	所属先 教科・学年	県
1	いとうゆずき 伊藤柚季	美浜町立河和小学校 全教科、6年担任	愛知
2	かきうちみか 垣内望花	小牧市立味岡中学校 保健体育、1年担任	愛知
3	さわだこういち 澤田晃一	愛知県立ひいらぎ特別支援学校 社会（中3、高1,2）、高校1年担任	愛知
4	すぎしたえりか 杉下絵里華	関市立桜ヶ丘小学校 社会（6年）、6年担任	岐阜
5	にわまこと 丹羽真琴	春日井市立高座小学校 全教科、6年担任	愛知
6	のだことの 野田琴乃	津島市立藤浪中学校 養護教諭	愛知
7	はしもとみきこ 橋本幹子	愛知県教育委員会 社会体験型教員研修員 (刈谷市立亀城小学校)	愛知
8	まつもとふたば 松本双葉	菊川市立六郷小学校 全教科、5年担任	静岡
9	まのなおあき 真野直亮	沼津市立長井崎小中一貫学校 数学（中1）、中学1年担任	静岡
D1	てついのぶひと 鉄井宣人	NIED・国際理解教育センター ファシリテーター	岐阜
D2	ごとうあき 後藤千明	JICA中部 市民参加協力課 コーディネーター	愛知

(2) 応募資格等

【応募資格】 次の要件をすべて満たす方

- ① 愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（児童・生徒に開発教育・国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員）で、所属する学校の校長の推薦があること。
- ② JICA が実施している教師海外研修、JICA 海外協力隊、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。

【参加条件】 次の条件を満たす方

- ① 教師海外研修の趣旨を十分理解し、同研修の実施および JICA が実施する開発教育支援事業に協力できること。
- ② 2025 年度中に授業やクラブ活動で、教師海外研修の経験を活かした開発教育・国際理解教育を実践できること。
- ③ 国内で実施される研修・説明会および現地研修の全行程に参加可能であること。
- ④ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑤ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 現地研修に関する報告書を提出すること、2) 所属校における授業実践内容についての実践報告書を提出すること、3) 実践報告フォーラムで実践内容を発表すること、4) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで学校名、氏名とともに一般公開されることに同意すること。
- ⑥ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、Eメールでの連絡が可能な方。

● 研修全体のスケジュール

教師海外研修の各研修等は、以下のような年間を通した日程で行った。

回	日時	内容（予定）
事前研修※1	7月5日（土）13：00～17：00 7月6日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●本研修の概要、派遣国・訪問先の説明 ●海外渡航手続き、健康・安全管理等の留意事項の説明 ●研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
出発前説明会	7月27日（日）13：00～17：00	<ul style="list-style-type: none"> ●JICA 安全講習、現地情報・準備事項の最終確認
ネパール 現地研修	7月28日（月）～8月9日（土） （本邦発着13日間／現地11日間）	<ul style="list-style-type: none"> ●開発途上国の現場体験、教材の素材収集 ●気づきの共有、受講者同士の学び合い
事後研修①	9月6日（土）13：00～17：00 9月7日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●現地研修の気づきや素材の教材化 ●上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
<p>9月～1月：各自、学校の授業などで実践！ 11月15日（土）、1月17日（土）：教師海外研修報告の準備、実践のフォローアップ等</p>		
事後研修②※2	2月21日（土）10：00～17：30	<ul style="list-style-type: none"> ●実践の内容、成果と課題の共有 ●フォーラムでの報告の準備
実践報告 フォーラム※2	2月22日（日）10：00～17：00	<ul style="list-style-type: none"> ●海外研修報告、各実践の報告（ポスターセッション） ●有志チームによる開発教育体験ワークショップ ●実践者つながり交流会

※1：上記「事前研修」実施前に全国合同オンライン事前研修を視聴した。

※2：事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と共同で行った。

II. 出発前後の国内研修・説明会

● 事前研修 7月5日(土)13:00~17:00、6日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容を理解し、自分たちの言葉でミッションを立てる。
- ◇ ネパールの概要および訪問先の情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材の収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

<プログラム>

■ 1日目：7月5日（土）

時刻	内容	講師・資料
13:00 (5分)	1. 開会 (1) あいさつ (2) スタッフ、同行者の紹介	JICA 上町所長、石沢 専任参事、奥田専門嘱託 資料 0
13:10 (35分)	2. 共通基盤づくり (1) アイスブレイキング・自己紹介～お互いのことを知り合おう～ (2) 海外で学んでくる私たちが担うミッション	NIED 伊沢
13:45 (60分)	3. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有 (1) ネパールの概要 (2) ネパールと日本のつながり探し (3) 現地行程（案）・訪問での活動予定→聞きながら自分の関心事をメモ (4) 訪問先資料集の分担読み解きと共有	NIED 鉄井、川合 資料 2,3,4,7
14:45 (15分)	4. 海外研修を生かした教材化の視点の確認 (1) 「事前ー現地ー事後」研修パッケージのねらいの説明 (2) 学習者の学びの3本柱とねらい (3) 教材（アクティビティ）づくりの3要素の説明	NIED 鉄井 資料 5 資料 13[P.10-17]
15:00	休憩（10分）	
15:10 (30分)	5. 海外体験を授業につなげるための計画①/個人作業 (1) ミッションと事前研修のねらいの再確認 (2) 「現地で何を見て、聞いて、調べてきたいのか？」洗い出し（付せん紙） (3) 教材テーマ(学びの柱のねらい)と訪問先資料集の確認、付せん紙追加 (4) 教材テーマ別に付せん紙の分類、教材収集シートへの貼り付け	NIED 鉄井、田口、 久世、伊沢、川合 資料 6,7,8 資料 13[P.5]
15:40 (70分)	6. 海外体験を授業につなげるための計画②/チーム作業 (1) 教材チーム&担当する教材テーマ決め (2) 担当する教材テーマの教材収集シート9人分を分類・整理 (3) これだけは集める！重点項目と教材収集のねらいの設定 (4) 全体で発表・共有→提案・リクエスト (5) 担当する教材テーマの教材収集シートのとりまとめ	NIED 鉄井、田口、 久世、伊沢、川合 資料 8
16:50 (10分)	7. 事務連絡 (1) 海外旅行保険説明 (2) ホームステイ説明 (3) その他、質疑応答	JICA 奥田専門嘱託 NIED 川合 資料 9

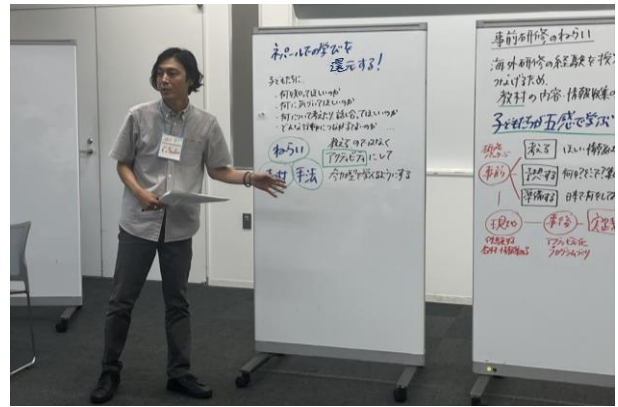
■ 2日目：7月6日（日）

時刻	内容	講師等
10：00 (10分)	9. 朝のアイスブレーキング	NIED 鉄井
10：10 (110分)	10. 海外体験を授業につなげるための計画③／チーム作業 (1) アクティビティの内容となる「素材＝教材」収集のポイント確認 (2) 教材収集の工夫の検討、重点項目の収集方法の設定 (3) 日本にいる間にできること＆事前準備の内容の整理など (4) 担当する教材テーマの教材収集シートのとりまとめ・完成 (5) 完成版の発表・共有（提案の採否、全員にお願いしたいこと）	NIED 鉄井、田口、 久世、伊沢、川合 資料 13[P.43,14-15/ P.21,33,43/P.24-25]
11：50	お昼休憩（60分）＋予備 10分	
13：00 (40分)	11. 学校での模擬授業・子ども達との交流の検討 (1) 模擬授業・交流の機会や環境の確認と交流チーム分け (2) 模擬授業や子ども達との交流のアイデア出し	NIED 鉄井、久世
13：40 (30分)	12. 現地での1日の流れの確認とチームでの役割の検討 (1) 1日の流れと役割の説明 (2) ネパールチームでの役割の分担決め (3) 各係での打合せ	NIED 鉄井、久世 資料 10
14：10 (40分)	13. 参加の準備や注意事項 (1) 出発～帰国までのフライトなどの情報 (2) ネパール現地研修中の安全、健康、ルールの大原則 (3) 持ち物・準備事項、その他留意事項 (4) 質疑応答	NIED 川合 JICA 奥田専門囑託 資料 11,12
14：50 (10分)	14. 最終調整、事務連絡 (1) 出発前説明会、結団式の案内 (2) その他連絡事項	NIED 川合 JICA 奥田専門囑託 資料 14

<配付資料>

- 資料 0：受講者・同行者名簿
- 資料 1：事前研修レジュメ
- 資料 2：ネパールの基礎・生活情報集
- 資料 3：ネパール現地日程案
- 資料 4：訪問先と活動予定（自分の興味・関心メモ）
- 資料 5：学習者の学びの柱・ねらい
- 資料 6：教材テーマの関連する訪問先など
- 資料 7：ネパール訪問先資料集
- 資料 8：教材テーマ別教材収集シート
- 資料 9：海外旅行保険「無事カエルパック」資料 ほか
- 資料 10：チーム内の係の説明＋研修の1日の流れ
- 資料 11：海外研修における安全、健康、ルールの大原則
- 資料 12：持ち物・準備に関する資料集
- 資料 13：JICA 中部 教師海外研修ガイドブック
- 資料 14：2024 年度教師海外研修報告書

<事前研修の様子>



<情報収集シートまとめ例:柱3>

■ 教材収集シート

★チーム Sun3(サンサーン)
ぼんちゃん、みか、えりか

柱3...共通の課題について共に考え・共に越える

●「学習者の学びの柱」3：共通の課題について共に考え・共に越える

- ねらい ⑨ ネパールには誇りがあると同時に、解決や改善が必要な問題があることに気付く。
 ⑩ 各課題の現状を知り、問題が解決されないことの影響と、問題の原因を考える。
 ⑪ 特に、貧困の悪循環について知り、そこから脱するために有効なものがあるようになる。
 ⑫ JICAの活動それぞれの目的と取り組みを知り、お互いから学びあい協力し合えることに気付く。
 ⑬ 日本の課題についてもふりかえり、世界や日本の課題解決のために自分にできることを考える。

● 重点的に収集する項目とその収集内容/方法・工夫

重点項目	ねらい	収集内容/方法・工夫
教育現場の課題	⑨	<ul style="list-style-type: none"> □ インタビュー：進学率（農村、都市部の比較） □ インタビュー：写真 塾 □ 写真・動画：学校設備（教室、教科書、学習用具、校舎、校庭、教員） □ インタビュー：現場で困っていること □ 動画：何を大事にして教育しているか □ インタビュー：親の意識、子どもに将来どうなってほしい？
交通	⑩⑫	<ul style="list-style-type: none"> □ インタビュー：事故の件数などのデータ □ インタビュー：自動車学校 □ インタビュー：交通安全教室（学校・JICAの取り組み） □ インタビュー：交通に関する支援、交通意識 □ 動画・写真：設備（道路、信号、横断歩道、音）
貧困・格差 よっての 働き口・支援	⑩⑪⑬	<ul style="list-style-type: none"> □ インタビュー・動画：児童労働の実態（背景、仕事内容、生活、どんな気持ちで働いているか） □ インタビュー・動画：支援内容、思い（CWIN、シャプラニール、ACP工場）
防災	⑬	<ul style="list-style-type: none"> □ 体験・動画・写真：日本でもできる防災教育（命を守る訓練、学校での対策、大地震の時の対応） □ インタビュー：地域での取り組み □ 写真・インタビュー：各家庭の備え（防災バッグ、家具固定） □ インタビュー：防災意識、子どもの防災意識（経験、地震起きたらどうする？、大切にすればいいこと） □ 写真・動画：学校・家の耐震面

● みんなで協力すること

- 各家庭で地震への備えの写真 □ 地震の経験を聞く □ 地震が起きたらネパールの子どもはどうするかを聞く
- 日本とネパールの地域・学校での取り組みの写真（訓練、津波マーク、内容、配属校舎）
- 将来の夢を子どもに聞く、親にはどんな大人になってほしいか聞く
- 道路で危ない目にあったことがあるか、事故の経験を聞く
- 教育現場で写真（教室、教員、授業の様子など）

●（参考）このテーマに関する収集したい内容一覧

カテゴリ	収集内容
防災	<ul style="list-style-type: none"> □ 地震への対策は？ □ 地域防災力 □ 災害への備え □ 環境生活の大変さ □ 防災 □ 防災はどのように取り組んでいるのか
教育現場の課題	<ul style="list-style-type: none"> □ 人権を守るための取り組み □ 自分たちが人々の課題解決のために行動できることは？ □ ネパールの子ども日本をどう思う？（日本の子は？） □ 居場所づくり □ 人を育てる重要性 □ 教育格差 □ 教育現場 □ 教育現場での課題や取り組み
交通の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> □ 交通 □ インフラ
貧困・格差 よっての 働き口・支援	<ul style="list-style-type: none"> □ お金の使い道 □ 資金援助だけではなく支援って？ □ 投資状況 □ 賃金と生活の関係 □ フェアトレードの意義 □ 守りたい産業（伝統工芸等） □ 支援活動 □ フェアトレード商品の生産工場ではどのように人々の生活が支えられているか □ 児童労働 □ 大人も子どもも労働について □ 子どもたちの生活 □ 子ども労働と教育の実況 □ 低所得貧困について考えたい □ 貧困 □ 抱えている問題 □ 都市部と農村部の違い □ 結婚・出産等の女性問題 □ 経済格差 □ 男女格差
支援に対して	<ul style="list-style-type: none"> □ 35年前に動き出した人の思い □ 協力隊の生の声（動機、思い） □ 支援者の思い、意識していること
現状→課題→ 支援	<ul style="list-style-type: none"> □ 日本比較 SDGs 項目 □ 現状（生活） □ 日本と似た問題は？ □ 現地課題解決手法 □ 悩み
その他	<ul style="list-style-type: none"> □ 職業別収入 □ なぜ派遣が必要か？どんな所？ □ 農家の減少の対策と取り組み □ 農業について農業従事者 □ 食べ物に関する考えを知りたい □ 食べ物への考え方（フードロス等） □ 商業

● 日本でやっておこう！（柱3チームがやっておくこと）

- 自動車学校、免許をとる仕組みは？ □ 事故データがあるか □ ヘルメット着用の義務
- 進学率はどんなのか？
- インタビュー準備

● メモ

● 出発前説明会 7月27日(日)13:00~17:00

<ねらい>

- ◇ 海外研修の最新情報について共有し、出し物・お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、出発する。

<プログラム>

時刻	内容	講師等
13:00 (5分)	1. はじめに ・主催者あいさつ、本日のねらいの確認	JICA 奥田専門嘱託 NIED 川合
13:05 (55分)	2. 最新情報と確認事項 ・マナビノオトの見方、使い方 ・その他各種留意事項 ・質疑応答	説明：NIED 川合
14:00 (20分)	3. 教材収集の確認 ・教材収集シートでの情報収集内容の確認・共有	進行：NIED 鉄井
14:20	休憩 (10分)	
14:30 (30分)	4. 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ ・仲間として ・個人として	進行：NIED 鉄井
15:00 (50分)	5. チーム活動の準備・調整 ・役割チーム (土産、会計、カメラ) ・学校での交流授業チーム	進行：NIED 鉄井
15:50	準備 (10分)	
16:00 (60分)	6. 結団式 ・主催者からエール→参加者からの抱負 ・飲食、歓談	進行：JICA 奥田専門嘱託、 挨拶：JICA 上町所長

18:20 名鉄名古屋駅発→18:46 中部国際空港駅着

中部国際空港至近ホテルへチェックイン

翌朝 6:45 ホテルロビー集合 チェックアウト

7:00 中部国際空港 3階国際線Aカウンター (一番奥) 前集合

<開催の様子>



● 事後研修①※ 9月6日(土)13:00~17:00、7日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ① 現地研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。
- ② 教師海外研修で学んだことをもとにした個人の実践アクティビティ・プログラムを作成し、評価指標の活用や相互提案などを通してより実践的な内容に深める。
- ③ 実践報告フォーラムでのワークショップ提供の準備を行う。

<プログラム>

■ 1日目：9月6日（土）

時刻	内容	講師等
13:00	1. あいさつと研修のねらい・スケジュールの確認	JICA 奥田専門嘱託 NIED 鉄井
13:05 (10分)	2. アイスブレイキング (1) 60秒自己紹介「帰国後のわたしの変化」	NIED 鉄井
13:15 (15分)	3. ネパール現地研修のふりかえり (1) 教師海外研修報告書「学びの3つの柱」の共有	NIED 鉄井
13:30 (30分)	4. 収集した現地素材の共有と活用法のアイデア出し (1) 教師海外研修ガイドブックの確認 (2) 現地素材を使ったアクティビティのアイデア出し→共有	NIED 鉄井
14:00 (45分)	5. 収集した現地素材を活かしたアクティビティづくり (1) アクティビティづくりの分担・調整（教材チーム） (2) アクティビティづくり（アクティビティシート作成）→共有	NIED 鉄井 NIED 提案：久世、伊沢 巡回：田口、川合
14:45	休憩（15分）時間調整	
15:00 (45分)	6. 個人の授業実践プログラム作り①「ねらいの設定」 (1) プログラム様式への対象、実践時間、テーマの記入 (2) 子ども達と一緒に考えたいテーマの連想図 (3) 「知る・気づく／考える・行動する」対比表 (4) プログラムのねらいの文章化（プログラムシートへ記入）	NIED 鉄井 久世、伊沢
15:45 (35分)	7. 個人の授業実践プログラム作り②「プログラム素案の作成」 (1) プログラム全体の展開（四行詩、起承転結等）の作成 (2) アクティビティの当てはめ・プログラムの流れの作成 (3) 主アクティビティにおける発問、現地素材の記述	NIED 鉄井 久世、伊沢
16:20 (5分)	8. 個人の授業実践プログラム案の自己点検評価 (1) 6つの指標を使った点検評価	NIED 鉄井
16:25 (45分)	9. 個人の授業実践プログラム案の小グループ相談会 (1) 3人グループで各実践プログラム案の発表、相談 (2) 提案を受けての再検討→プログラムシートから模造紙へ	NIED 鉄井 久世、伊沢
17:00	1日目終了	

※「事後研修②」については、2025年度開発教育指導者研修（実践編）第4回と合同実施のため、同研修の報告書をご参照ください。

■ 2日目：9月7日（日）

時刻	内容	講師等
10：00 (60分)	1. 個人の授業実践プログラム作り③「まとめ」続き (1) 1日目の続き（模造紙）をまとめあげる	NIED 鉄井 久世、伊沢
11：00 (30分)	2. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会① (1) 発表者：プレゼンテーション（6分）×2人 (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案（4分）×2人	NIED 鉄井、田口
11：30	休憩（60分）	
12：30 (30分)	3. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会② (1) 発表者：プレゼンテーション（6分）×2-3人 (2) 聞き手：よかった/よりよくするための提案（4分）×2-3人	NIED 鉄井、田口
13：00 (40分)	4. 個人の授業実践プログラムの改善検討 (1) よかった点/提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 鉄井 久世、伊沢、田口、川合
13：40 (30分)	5. 授業実践に向けての私宣言！&エール (1) 受講者全員の実践プログラム案のギャラリー方式による確認 (2) 車座で今後の授業実践に向けた抱負とエールを交換	NIED 鉄井
14：10 (25分)	6. 実践報告フォーラム 2026 教師海外研修報告の検討 (1) 20分間の発表内容と役割分担	NIED 鉄井
14：35 (20分)	8. 実践報告フォーラム 2026 有志ワークショップの検討 (1) ワークショップ提供する有志メンバーの選定 (2) 提供プログラムの決定と今後の予定・役割等の検討	NIED 鉄井
14：55 (5分)	9. 事務連絡・調整 (1) 中間会合、実践報告書様式、ネパールBOX	NIED 川合 JICA 奥田専門囑託

<配付資料>

- 資料1：事後研修レジュメ（本資料）
- 資料2：教師海外研修報告書「学びの3つの柱」
- 資料3：アクティビティシート（リスト）
- 資料4：アクティビティシート（詳細）
- 資料5：授業実践プログラムの6つの評価指標
- 資料6：実践プログラム作成様式（A3版）
- 資料7：実践プログラム作成例
- 資料8：実践報告書の記入解説および様式
- 教師海外研修ガイドブック
- 各自のマナビノオトおよび振り返りシート
- 教師海外研修の写真・動画・資料集（データ共有）
- ネパールBOX

Ⅲ. 現地研修の様子と受講者の学び

[7/29 (火)]

① JICA ネパール事務所ブリーフィング



伊藤柚季： JICA ネパール事務所では、ネパールの基本情報や国としての課題、教育の状況、JICA の支援など幅広く説明をもらった。ネパールには都市部と農村部での貧困格差や社会の脆弱性、国内産業の発展の難しさや出稼ぎによる若年層の減少などの課題があり、JICA としては主に「経済成長・貧困削減のための支援」、「防災・気候変動に対する支援」、「ガバナンスの支援」を行っていることを学んだ。特に国際基準を満たす道路や 160km のシンズリ道路など日本の技術を生かした支援によって、交通や物流が活性化しネパールの人々の生活に良い影響を与えたという話が印象的だった。しかし、持続可能な支援をするためには、支援する側の視点だけでなく、相手を知り、相手のニーズに合わせた支援をすることが大切であることがわかった。また、飯塚次長からは「日本がネパールに協力・支援をする必要性はあるのか」という問いかけがあり、本当に必要な支援とは何かと深く考えるきっかけとなった。



野田琴乃： JICA ネパール事務所の職員から、ネパールの概要や JICA の協力内容、教育・安全・健康管理について説明を受けた。ネパールの課題を SDGs の視点から見ると、貧困やジェンダーの課題など、日本と共通する特徴が見られた。これらの背景にはカースト制度や宗教の影響がある。また、ネパールは後開発途上国からの卒業を目前としているが、出稼ぎ労働による送金が GDP の約 25% を占めており、国内産業が発展しにくい。その背景には、隣国インドや中国との地理的・経済的関係も影響しており、ネパールだけの問題とは言い切れない。日本もかつて多くの支援を受けて発展してきた歴史があり、ネパールの課題もネパールだけで解決すべきものではなく、JICA が行っている支援は非常に意義のある取り組みだと感じた。最後に、飯塚次長から「日本がネパールに支援する必要性はあるのか？」という問いをいただいた。この問いに何度も立ち返ることで、学びを深めることができ、非常に充実した研修となった。

[7/29 (火)]

② パシュパティナート寺院、③ ボダナート寺院



垣内望花： パシュパティナート寺院で通訳のラクスマンさんが説明してくれた話によると、富を築いても最終的には死が待っており、人々は日常で死を忘れがちである。また、日常は常に変化し、幸せの定義も変わる。鬱になったり、うまくいかなかったりする人でも、死を意識することで救われる心があるという話を聞いた。この話を聞き、人はいつか死ぬこと、そして死んだら何も残らないと考えれば、今の自分の悩みは些細なものに思えるという、新たな視点に触れた。同時に、何となく共感できる部分もあった。しかし、私はどうしても火葬中の写真は撮ることができず、複雑な気持ちで儀式を見守った。ボダナート寺院は、パワーを感じられる場所だった。そこには、たくさんのタルチョ（五色の祈禱旗）が伸びており、風に揺れるたびに、お経を唱えるのと同じ効果があるという。旗の色は、黄色は地、緑は水、赤は火、白は風、青は空を表している。その鮮やかな色彩を目にしながらかくと、清々しい気持ちになった。川口慧海という日本人僧



侶が関わっていることを知り、日本とのつながりを感じることができた。



橋本幹子：パシュパティナート寺院とボダナート寺院を訪れた。隣接するように存在するヒンドゥー教と仏教の聖地を見比べることで、宗教のあり方や、人々が命や日常をどう受け止めているかを学ぶ機会となった。パシュパティナート寺院では、聖なる川沿いで薪を使った火葬が日常的に行われており、観光客もその場を見学している。そこでは、「ここで死を迎えることが幸せ」とされ、また「遺体を見ることで死ぬときはみんな同じであり、日常のいやなことを忘れられるからうれしいことだ」という価値観が語られた。死を隠すのではなく、自然な営みの一部として受け止めているように思え、死生観の違いに驚かされた。同時に、聖なる川沿いにゴミが散乱していたり、物乞いの姿があったりと、宗教儀礼と社会的課題が共存する現実も目にした。一方、ボダナート寺院はチベット仏教の中心地であり、大きな仏塔の周囲にはマニ車が並び、民族や国境を超えた人々が祈りを捧げている。掃除が行き届き、マリーゴールドの花で彩られた空間や熱心にお祈りする姿など、信仰を大切に守り続ける人々の姿が印象的であった。対照的な二つの寺院を訪れたことで、宗教が生活や価値観、生と死のどちらにも深く関わり、文化を形づくったり、人々を支えたりしていることを学んだ。

[7/30 (水)]

④ JICA 海外協力隊 (体育) 活動 / パタン高等学校



澤田晃一：仲本インカエンジェリナ隊員の体育授業を見学、体験した。子ども達はいきいきと体を動かし、楽しそうに取り組んでいた。仲本隊員が赴任した当初、運動場は雑草や石、ゴミが散乱する荒れた状態であったと聞いた。草むしりはカーストの低い人々の仕事とされており、教員に依頼することは難しかったという。また、パタン高等学校にはユニセフ等からの支援で器具はそろっていたが、倉庫に眠ったままで活用されていなかった。仲本隊員は器具庫を整備し、物品の管理を徹底する姿を示すことで環境を改善していた。支援は単なる物資提供だけではなく、文化的背景を理解した上で持続可能な仕組みを築くことが大切である学んだ。技術や情報は進歩しても、根本にある「相手の目線に立つ」という姿勢は変わらず協力の土台になっていくと実感した。



松本双葉：学校に着くと、子ども達が次々と集まり、「日本のアニメ知ってるよ!」「私の名前は〇〇です!」と日本のことを話してくれたり、日本語を披露してくれたりした。また、「ネパールのごはんは何かが好き?」「ネパールのいいところはどこ?」と、こちらに質問してくれる場面も多くあり、子ども達の歩み寄ろうとする力の大きさを実感した。そして、私たちがこれほど自然に受け入れてもらえたのは、この学校で日頃から尽力されている仲本さんの存在があるからこそだと感じた。海外協力隊として、これまで行われていなかった体育の授業を異国の地で一から立ち上げることは並大抵のことではない。体育の環境整備から始め、体育の魅力を広め、さらに現地のニーズに合わせて試行錯誤し続けている仲本さんの行動力と根気強さは本当にすごいと思った。その取り組みがあってこそ、子どもたちは体を動かす楽しさを知り、生き生きと学ぶことができているのだと感じた。

[7/30 (水)]

⑤ パタン・ダルバール広場



杉下絵里華：「芸術と建築の町」として知られるパタン・ダルバール広場。足を踏み入れた瞬間、「わあ…!」と声が出てしまった。ここは本当に世界遺産なのだと、一步踏み出すごとに実感する。大きな震災を乗り越えたとは思えないほど町には活気が溢れていた。あちこちからカンカンと金属を打つ音が響き、職人たちが黙々と作業を続けている。その音が不思議と景色や空気と調和し



て心地良かった。歴史ある建物や装飾はどこを切り取っても絵になる美しさで、ついカメラを構えたいくなる。ここで出会ったネパール人に話を聞くと、建築に関わる仕事をしていて、きっとこの地で働くことは彼らの憧れでもあるのだろう。気さくに話しかけてくれて、笑顔で色々教えてくれたことが嬉しかった。観光地なのに、きちんと人々の暮らしが息づいているのもまた良い。ここで見た景色や空気感をずっと忘れたくないなと思った。



真野直亮：ネパールの伝統的な建物が立ち並ぶパタン・ダルバール広場。2015年のネパール地震で崩れた建物もあったが、その後のJICAの支援もあり、現在は多くの観光客が訪れていた。近くの小道には、おしゃれなカフェやスイーツ店が集まっていた。マッラ王朝の最盛期に当たる16～18世紀にかけて作られた建物と観光客や若者向けと思われるおしゃれなお店のどちらも楽しむことができる。また、当日は大きな人だかりができていたので行ってみると、若い男女のグループがダンスをしながら動画撮影をしていた。リズムカルな音楽に合わせて踊る姿を多くの人が囲むように見ていたのが印象的で、過去と現在の文化の発信地になっているように感じた。入場料を払い、旧王宮の内部に入ると、その景色に心を奪われた。騒がしかった雰囲気が一変し、静かで荘厳さが感じられる空間が広がっていた。レンガの中にはめ込まれた木彫りの窓が美しく、ネパールの伝統文化が今もなお大切にされている場所となっている。

[7/30 (水)]

⑥ ジャワラケール手工芸センター



真野直亮：ネパールにとって「カーペット」は重要な輸出品目であり、日本に向けての輸出も多く行われている。今回訪問した「ジャワラケール手工芸センター」では、1階でカーペットを作る行程を見学させてもらった。1959年のチベット動乱で故国を去った難民の方は、パタンにも多くいる。14歳から40年間、この場所で働いている女性もいた。難民の方が異国の地でも仕事を得る機会がある良さを感じると同時に、難民問題が短い期間では解決されないものであるのだと痛感させられ、改めて調べてみたいと思った。



手際よく糸を通してカーペットを作る速さは、カメラのスロー動画ではないとどのように手を動かして、糸を通しているのかわからない程であった。そんなに早く作業をしても、一日に進むのはカーペット5センチ分程度ということに驚いた。話を聞いた女性の作っているカーペットは1か月で完成すると知り、多くの時間をかけて、1つの作品が出来上がることを初めて学んだ。完成したカーペットの販売をしていた2階にいくと、経糸の数によって値段は変わるものの5000ルピー程度のもも販売されており、この女性たちの労働に対する対価は本当にこの程度なのだろうかと考えさせられた。



杉下絵里華：ジャワラケール手工業センターを訪れると、そこには静かな熱気があった。ここは、チベットから亡命してネパールに移り住んだ難民の人々が営む場所。全てが手作業で、小さなラグ1つでも完成までに50時間かかるものもあるそうだ。長年この仕事を続けてきた女性たちの手には迷いがなく、美しい模様を正確に織り上げていく。見学をしながら「ラムロチャ（素敵ですね）」と声をかけると、「ダンネバード（ありがとう）」と笑顔が返ってきた。その温かさに、心がほっこりした。上の階では作られた絨毯を購入することができ、訪れた人たちが真剣な表情で絨毯を選んでいて、お気に入りを見つけた瞬間のみんなのほくほく顔は、見ていて嬉しくなる。作っている人の姿や、その背景を知ったからこそ、「この一枚を家に迎えたい」という気持ちが強くなるのだろう。絨毯は、ネパールの重要な産業の一つ。長年積み上げてきた女性たちの技が、国の産業をも支えている。ここで見た職人技と人のぬくもりは、特別な思い出になった。

[7/31 (木)]

⑦ Universal Training Center



丹羽真琴：日本語学校に着き、教室いっぱいの子供たちを見て、こんなにも日本で働きたい人がいることにまず驚いた。授業では、漢字の勉強をしていた。漢字の読み方・意味だけではなく、「改札口って何?」「電車の時刻って?」「日本では、時間になったら電車は出発してしまいます。」というように日本での生活を視野に入れた問いかけや説明をしていた。授業参観後、学生さんと交流できる時間があつたので、「あなたの夢は何ですか?」と質問してみた。「日本のレストランで働いて料理について学びたい。そして、戻ってきたらネパールでレストランを開きたい。」「日本で介護の仕事をして、高齢者の力になりたい。そして、戻ってきたらネパールで介護施設を開きたい。」という言葉聞き、私は胸が熱くなった。ネパール国内で経済成長を後押しするような産業が育っていないことは課題ではあるが、このような若者の強い思いで日本の産業や社会が支えられていることは幸せなことだと思った。



伊藤柚季：ビルの階段を上っていくと狭い部屋に30人以上の学生が肩を並べて日本語の勉強をしていた。教室には机がなく、収納机が付いているミーティングチェアに座って授業を受けていた。N5クラス(日本語入門レベル)の授業では、ネパール人の先生がネパール語を使って日本語の文法の説明をしていた。学生は先生の説明を真剣な眼差しで聴き、発問に大きな声で答え、一生懸命板書を取っていた。

授業見学後は日本への就労が決まっている学生2人と交流したが、2人とも「早く日本に行って働きたい」と目を輝かせていた。特に料理が趣味のシタラムさんは家族と離れて日本へ行き、料理を学んだあとにネパールで自分の店を開きたいと話していたのが印象的だった。日本に対して前向きな印象をもち熱心に日本語を勉強している学生たちが、日本へ行って夢を叶える姿を想像すると心が温かくなった。同時に、彼らが日本で困難に直面した時に手を差し伸べられる存在でありたいと強く思った。

[7/31 (木)]

★ショッピングモール Bhat Bhateni Super Market



野田琴乃：買い物と昼食を目的に、ショッピングモール「Bhat Bhateni Super Market」を訪れた。ネパールで暮らす人々向けの店が多く、1階には食料品や日用品、2階にはおもちゃや文房具、3階には衣服、4階には家電、5階には家具など、生活に必要なものが一通りそろっている印象だった。食料品売り場には見慣れないフルーツや食べ物並び、独特な香りが漂っていた。NIVEA や肌研など、日本でも見かけるスキンケア用品も多く、輸入品にもかかわらず日本と大きく価格が変わらないものもあつた。しかし、ネパールの平均収入を考えると、かなり高価に感じられた。おもちゃ売り場にはりかちゃん人形やLEGO、家電売り場にはNational、SONY、SAMSUNGなど、日本や世界の有名メーカーの商品が見られた。ネパールではガス料金が高いため、IHが主流のようである。衣料品売り場では、色鮮やかなサリーやクルタ・スルワール、ダウラ・スルワール並び、夢中で試着して、それぞれお気に入りの一着を購入していた。



垣内望花：ショッピングモールは、階ごとに販売されている商品が異なっていた。家具の階、電化製品の階、衣類の階、そして食品の階があつた。私たちは、多くの時間を衣類の階で過ごし、買い物を楽しんだ。トイレは外にあり、水を汲んで自分で流す方式だった。電化製品は日本製や韓国製が多く見られた。その中でも日本製は割と価格が高いものが多かったように感じた。また、特に印象的だったのは、IHクッキングヒーターの多さだった。JICA ネパール事務所のティミルシナさんに話を聞いたところ、ネパールはインドからガ

スを輸入しておりガス代が高いため、2015年のネパール地震以降は電気がより普及したとのこと。一般家庭のお風呂などはガスではなく電気を使用し、ソーラーパネルを設置して電気を供給している家庭もある。また、電気を使わない家庭も多く、蚊帳を使用することも多い。派手なデザインの蚊帳が多く売られていたが、それが普遍的なデザインだという。万引き防止のため、大きな荷物は店の前のロッカーに預けるよう、店員が呼びかけていた。ロッカーに入れた後は、鍵を持って買い物をする。日本とは違う買い物のスタイルだった。

[7/31 (木)]

⑧ Yokohama Japanese Language Academy



橋本幹子：授業の様子を見学するとともに、日本文化の紹介をした。Yokohama Japanese Language Academy (YOJALA) は長年にわたり活動する中で、日本から厚い信頼を得ており、「日本からはYOJALAの学生しか受け入れない」と言われるほどである。その背景には、代表が語っていた「私たちは、信頼してくれる日本の方々のために働いている」という強い思いがあることを知った。単に日本語を教えるだけでなく、学生一人ひとりの将来を背負い、日本との信頼関係を守り抜こうとする姿勢に深く心を打たれた。授業は「日本へ行ったら必ず聞かれる質問」を想定するなど極めて実践的で、学びの一つひとつが夢の実現に直結していた。学生たちは「日本でレストランを開きたい」「介護の仕事をしたい」と具体的に語り、試験に合格した喜びを誇らしげに伝えてくれた。その一方で、日本語が難しく途中で断念してしまう人や日本に行ってもうまくなじめず働けなくなってしまう現実を知り、通いつける学生の努力と覚悟の重さも感じた。最後には学生手作りのコーヒーやケーキでもてなされ、さらに木彫りのフォトスタンドまで贈られるなど、心のこもった交流に胸が温かくなった。日本とネパールを結ぶ信頼の意味を実感した訪問となった。



澤田晃一：カトマンズに拠点を置く日本語教育機関Yokohama Japanese Language Academyを訪問し、授業見学と学生との交流を行った。学生たちは日本に関心を持ち、けん玉や浴衣の着付け体験を楽しんでいた。さらに、日本で就きたい職業や将来のキャリアプランを具体的に描いていることに驚いた。日本人講師による授業では日本語の習得に加え、挨拶や姿勢など生活習慣を重視した指導が行われ、日本での生活を具体的に想定した教育であった。交流を通じて、学生たちは期待と同時に不安も抱えていることが分かった。日本で出会うネパールの人々は、このような学びを経て来日しているのだと知り、親近感が湧いた。同時に、文化や生活の違いを理解し合い、助け合える社会環境づくりの重要性を考えさせられた。

[8/1 (金)]

⑨ ラブグリーンネパール事業地



松本双葉：まず、Love Green Nepalの取り組みについてスタッフのBimalさんから説明を受けた。Love Green Nepalは、農民の生活改善や食生活の向上を目指し、8人のボランティアから始まった団体である。もともと盆地にはほとんど木がなかったが、これまでに100万本もの木を植えてきたという。Bimalさんは、いつまでも外部からの支援に頼るのではなく、自律的に取り組みを続けていくことの大切さも語っていた。その後、実際に農園を見学し、農家の方々から直接話を聞く機会をいただいた。最も印象に残ったのは、農家の人々が有機栽培に誇りをもっていただことだった。家畜と農業を組み合わせ、作物を牛が食べ、その糞を肥料として再び作物を育てるというサイクルができており、その仕組みによって人工肥料の購入を抑えることができていた。現場で取り組む人々自身が活動に自信をもち、さらにそれを広めたいという思いを抱いているのがとても素敵だなと感じた。





杉下絵里華： ラブグリーンネパールを訪れ、草の根技術協力事業の現場に立ち会った。ここでは、農業の活性化を通して、人を育てる支援が行われている。単に作物を育てるだけでなく、地域の人と協力しながら安心・安全な農業を根付かせていく仕組みだ。特に印象的だったのは、地域の中からリーダーを育て、その人が次世代へと知識や技術を伝えていく仕組みである。これにより、支援が一方向的に終わることなく自立的に続いていく。また、ホームステイ先の村では、実際に土に触れ、村人たちと一緒にラブグリーンネパールから提供された苗を植える体験をした。笑顔で苗を渡す姿や、声をかけ合いながら村人が一丸となって植林をしていく光景は忘れられない。「募金箱の向こう側の世界」を目の当たりにする瞬間だった。支援がお金という形から、人の暮らしや未来へと変わっていく感動を肌で感じる事ができた。支援の在り方とは何か。与えるだけでなく、共に育て、共に未来を作ること。その答えの一端をこの地で学んだ気がする。

[8/1 (金)、2 (土)]

⑩ ホームステイ組合による歓迎会 (葉の皿作り／カルチャープログラム)



真野直亮： あっという間の2泊3日のホームステイにおいて、一番印象に残っているのがこの歓迎会だ。1日目には葉の皿作りを行った。葉っぱを組み合わせさせて小皿と大皿を作成したが、これがなかなか難しい。料理が盛り付けやすいように深い形にすること、縫い物のように枝を使って葉っぱ同士を組み合わせることを意識するものの時間ばかりが過ぎてしまった。そんな自分にも丁寧にも何度も教えてくれるお母さん方の姿に心温まる思いであった。陶器のお皿など日本では手軽に安価に手に入る時代になったが、地域にあるもので環境にも優しい葉の皿の魅力についても学ぶことができた。



2日目の夜には歓迎の踊りや歌を披露してくれた。ネパールの民族衣装を着て、一緒に踊る時間はぐっと心の距離が縮まった瞬間であった。また、多様な民族が共に暮らすこの地域でそれぞれの民族の踊りを尊重し合う姿や共に同じ曲を歌い、踊る姿がとても印象的であった。音楽を通して、お互いに通じ合ったこの時間は一生の宝物である。



丹羽真琴： 葉の皿作り：ホームステイ先に着くと、みんなが笑顔であたたかく歓迎してくれた。額にはティカを、手には手作りの花束をプレゼントしてくれた。席に着くと、葉で作られた皿にポップコーンと漬物、ミルクティを振る舞ってくれた。美しい伝統衣装に身を包むママたちに囲まれ、村長さんから歓迎のスピーチを聞き、これから始まる時間に、胸が高鳴った。歓迎会が終わると、先ほどもてなしてくれた器の「葉の皿作り」に挑戦した。葉を折り、重ね、竹ひごのようなもので縫い合わせていく。葉が硬く、縫い合わせるのに苦戦している私に、ママはアドバイスをくれたり、手伝ってくれたりした。無事完成。とっても嬉しかった。こうやって一緒に何かすることで、村の人と一歩近づけた気がした。

カルチャープログラム：会が始まる前に、ママにネパールの伝統衣装「サリー」を着せてもらった。歓迎会では、民族舞踊や歌を見せてもらった。民族、年齢、男の人・女の人によってそれぞれの歌や踊りがあるようだった。どれも本当に素敵だった。みんながそれぞれを受け止め合っているようなあたたかさも感じた。また、日本の私たちから「ふるさと」の合唱と「ソーラン節」の踊りを披露した。みんなが「ソーラン！ソーラン！」「どっこいしょ！どっこいしょ！」と掛け声してくれた。私もみんなも、笑顔が溢れた時間だった。みんなと一つになれた感じがして、心から楽しいと思った。「民族や言語、生きてきた文化が違っても音楽は人と人の心をつなぐことができるんだ」と強く思った時間だった。

[8/1 (金)~3 (日)]

⑪ ホームステイ (2泊3日)



伊藤柚季： ホームステイの中で「幸せ」や「無償の愛」について考える瞬間が何度もあった。初めて会ったときママは私を抱きしめて歓迎してくれた。少し緊張していた私はママの温かさに心がほぐれた。ママは簡単なネパール語と英語で私たちにご飯の作り方や牛の世話の仕方を教えてくれた。パパが仕事から帰ってくるとみんなでご飯を食べながらたくさん話をした。手で食べるコツを教えてもらって挑戦したときに「上手！」と褒めてくれたり、「ミト チャ！ (美味しい)」と言ったときに笑顔で喜んでくれたり、「プギョ！（十分です）」と言うまで何度もご飯のおかわりを入れてくれたり、パパとママの愛をたくさん感じた時間だった。パパに好きな時間を聞いたとき、家の窓からママと一緒にヒマラヤや星空を眺めるときと答えてくれた。ママはパパや遠く離れた娘と話すときとても幸せそうな顔をしていた。彼らにとっての幸せを教えてもらったと同時に自分が忙しい世界で生きていることに気付かされた。自分の生き方を見つめ直すきっかけとなった3日間だった。



垣内望花： 私がお世話になった家は、お母さんのソルソティさんと、お父さんのシバさんと、孫のビベックさんの3人家族だった。お父さんは普段、畑仕事をしており、あまり姿を見かけることはなかった。お母さんは朝から晩まで家事に忙しくしていた。男性は外で働き、女性は家で家事をするという文化や風潮が、まだ根強く残っていると感じた。手で食事をする文化も体験した。人差し指、中指、薬指をお皿のように使い、食べ物を乗せ、親指で押し出すように口に運ぶ。そうすることで、熱いものでも火傷をしないという。スプーンやフォークでは味わえない、面白い感覚だった。カレーやお米を食べる時は右手、パンなどは左手を使っても良いというルールだった。ネパール米と日本米を食べ比べてみたところ、家族は日本米の方が甘いと言っていた。ネパール米はカレーに合うように作られており、都市部で食べたネパール米よりも、ホームステイ先で食べたお米の方がもちもちしていた。家庭で食べるダルバートは本当に絶品だった。食事は基本的に植物性で、豆料理やじゃがいもが中心で、たまに鶏肉が出た。ネパールでは基本的に2食で、朝食を10時頃に、15時頃にスナックタイム、夕食を19時頃に食べるという食生活だった。お母さんと話をした際に、「お金を稼ぐために、どんどん外に出て行ってほしい。海外にも行ってほしい。そうすることで家族にもお金が増えるから嬉しい。」と話してくれた。私は、孫や子どもたちには地元においてほしいのではないかと考えていたのでとても驚いた。幸せのかたちは家庭ごとに異なり、金銭面の安心が大切にされているという価値観に触れ、この地域で暮らす人々の現実を改めて実感した。



澤田晃一： ホームステイ先の軒先には、細長く切り出された肉がいくつもぶら下がり、スパイスをまぶされて、とうもろこしの芯を燃やした煙で燻されていた。それを眺めているとホストファザーから「食べてみる？」と声をかけられ、「食べたい！」と大きく頷いた。夜にはその燻された肉 (スクティというらしい) がカレーと共に振る舞われ、サクサクした食感と肉の旨味が凝縮された深い味わいに感動した。ホストファザーは強面でどちらかというと笑顔は少なかったが、「ミトチャ (おいしい)」と伝えると笑顔になるのがいつも嬉しかった。ホストファザーは村でレストランを営み、そこは家族や村人が集う場所となっており、私たちも自然と多くの時間をそこで過ごした。特別なイベントではなく日々の営みに迎え入れられ、この村の当たり前の暮らしに身を置いたことで、世界中のどこかにも同じようにある日常が尊く愛おしいものだと感じた。そして、この「当たり前」を知るからこそ、異文化理解や多文化共生への第一歩になるのではないかと考えた。





杉下絵里華： ホームステイ先で過ごした日々は、地域とのつながりや人の温かさを全身で感じる瞬間だった。道ですれ違うたびに「ナマステ」と手を合わせると、満面の笑みで「ナマステ」が返って来る。その瞬間の幸せといったら言葉にならない。気付けば近所の人たちが自然と集まり、笑い声があちこちから聞こえてくる。ここは人と人の距離がとても近く、深いつながりを実感した。



朝は家族とハイキングに出かけ、食事はご飯の温かさを肌で感じながら手で食べる。畑で収穫した野菜をその場でかじり、お昼には甘いチャイを飲みながらゆったりとお話タイム。「ラム口～！（良いね）」「ミトチャ～！（美味しい）」たった二言だけで大盛り上がりするおじいちゃんとのやり取り。何気ない日常がこんなにも心を満たしてくれるのだと初めて知った。日本では朝早くから夜遅くまで仕事に明け暮れる自分。何のために働いているのだろうか？自分は何を望んでいるのだろうか？本当の幸せって何だろう？そんなことを考えさせられた3日間だった。



丹羽真琴： ホームステイを通して、ネパールは私にとって「帰ってきたい大切な場所」になった。滞在中、美しい緑に囲まれて生活し、ママとは香り豊かな料理を作り、パパとは学校や村のことを語り合った。二人は初日から「あなたたちに会えて幸せだよ」と笑顔で迎えてくれ、私たちのつたない言葉にも耳を傾けてくれた。パパは学校で働きながら農業もしていた。忙しくないのかなと思ったけれど、農業は村のみんなとつながる大切なもので、楽しんでやっている様子だった。パパにとっての幸せは、家族との時間や地域の仲間との時間。「困ったときはみんなで助け合う。その心がこの村にはある」と語るパパの言葉から、地域の温かさを感じた。どこへ行っても、出会った人々は子どもも大人も友達のように温かく接してくれた。人とのつながりや地域の温もりを肌で感じ、この場所を、ネパールを大好きになった。「帰りたくない」とつぶやいた私に、パパは「あなたにも大切な家族が待っているよ」と優しく声をかけてくれた。その言葉に触れ、私も家族や周囲を大切にできる人になりたいと思った。



野田琴乃： 早朝、おじいさんと孫と一緒に散歩した。霧がかかり、空気は幻想的で、道なき道をぐんぐん歩きながら、通りすぎる村の人々に笑顔で「ナマステ」と挨拶を交わした。ただただ平和な時間だった。普段は小学生と高校生の兄弟と過ごすことが多かったが、二人とも本当に優しく純粋だった。私たちの前でも時折、母親にくっついて笑いながらコミュニケーションを取る姿が見られ、人の温かさにあふれたこの環境で育つと、こんなにもすくすく成長するのかと実感させられた。村全体が家族のようで、優しさと愛情を受けて育った彼らだからこそ、私たちにも心を込めて接してくれ、短い2泊3日の間に友情が芽生え、別れを惜しんだ。私たちの未来の幸せを願ってくれたように、私も彼らの幸せを願っている。ネパールが私にとって大切な国となったのは、そこに暮らす一人ひとりの温かな表情や優しさが思い浮かび、心に深く刻まれているからかもしれない。



松本双葉： ホームステイは、ネパールを五感で最も感じられる場所だった。まず驚いたのは、自分の家に泊まると分かった途端、ママが「この子はうちの子」とでも言うように温かく迎えてくれたことだ。言葉は完全には分からなくても、ママの想いは伝わってきて、恥ずかしくも嬉しかった。英語を話せる甥っ子が町を案内してくれた。15歳の彼の夢は写真家で、「人の人生に欠かせない仕事。人生のイベントや笑顔の瞬間を Frozen して、見返すことができる」と語った。15歳でここまで考えを持つ彼を尊敬した。また、パパの「貧しい人に家を建てた」という話も印象的だった。「貧しい人を見捨てると、他人のものを欲しがらる。住む場所があれば町全体が安全になる」と言い、支援は支援を受ける人だけで



なく社会全体のためでもあると気づかされた。町や家族を想うパパ、あたたかいママ、真面目な甥っ子、彼ら进行う気持ちで、私のネパールへの想いになった。



橋本幹子： 停電。暗闇になれば音が際立ち、雨や虫の音が鮮明に聞こえてくる。ネパールでの2泊3日のホームステイでは、突然の停電やお湯の出ないシャワーが日常である暮らしを体験し、便利さに囲まれた日本が失ってきた「工夫する力」や「支え合う姿勢」に気づかされた。ホストファミリーは普段は1日2食で暮らしているにもかかわらず、私たちに4食分を準備し、「あなたたちは家族だよ」という温かいまなざしを注いでくれた。また、私たちをいつも尊重し、寄り添い大切にしてくれたことも心に残っている。村では人々が声を掛け合い、食べ物を分け合い、子どもたちは自由に遊んでおり、日本では薄れつつある人と人との濃いつながりを実感した。交流会では、民族や年齢を超えて歌と踊りで一体となり、子どもに手を取られ一緒に踊った瞬間は忘れられない。さらに19歳のお孫さんに「ぼくたちと日本人は似ているね」と言われ、人の温かさや分け合う心は国境を越えて共通するものだと学んだ。一方で、おばあさんが「孫には海外へ出てお金を稼いでほしい」と語ったことに驚いた。日本ではあまり聞かない願いに、国の経済状況や暮らしの現実が映し出されていることを実感した。私はこの経験を通じ、違いを受け止めつつ、共通する価値を大切にしたいと感じた。



真野直亮： 最後の別れの朝、ぐっと涙をこらえて「また絶対帰ってきます」と伝えて、何度も手を振った。人生で初めてのホームステイ体験となったこの2泊3日は、沢山の思い出でいっぱいだった。子どもたちと地域の方々大切にしている寺院を案内してもらった。岩を切り抜いた所にあり、神聖なその場所へは靴を脱いで登っていった。参拝の仕方を教えてもらいながら、鐘を鳴らして同じように参拝した。その途端に、スコールが降ってきてあっという間に大雨になった。傘を差しながら、みんなで固まって雨宿りをした時間は今でも忘れられない。あんなにも雨に濡れて、靴も履けないうらいであっただが、お互い笑顔が溢れた。



ホストファミリーや地域の子どもたちと過ごしていた時、時間がゆったりと流れているように感じた。少しの移動でも車を使ってしまう日本の生活を振り返りながら、車を持っていない彼らと歩いて移動することで、その一瞬一瞬の気付きや心の動きを大切にすることができたからかもしれない。「今」という時間を大切に生きようと再認識する機会となった。

[8/3 (日)]

⑫ Kalidevi Secondary School



伊藤柚季： この学校は地方の公立学校であり、都市部の学校と比べて設備の差を感じた。しかし、子どもたちは私たちを見ると笑顔で手を振って温かく迎え入れてくれた。交流授業では、地元の盆踊りや祭り、伝統的な遊び（けん玉、福笑い、竹とんぼ）、和紙を使った紙飛行機づくりなどを紹介した。最初は緊張して日本の遊びに挑戦する児童は少なかったが、徐々に打ち解けて最後には夢中になって紙飛行機を飛ばす姿を見ることができてとてもうれしかった。



授業後に行った教員同士の意見交換会では、子どもの学力の差や学習に困難を抱える児童生徒への支援など日本と共通の課題が出てきた。また、子どもと関わる時に大切にしていることは、「子どもの興味関心を理解すること」や「しっかり子どもと向き合うこと」だと言っていた。国が違っても教育に対する考え方や姿勢は同じであると感じ、日本に帰ってから大切にしていきたいと強く思った。



真野直亮： 訪問した当日は、夏休み明けの初日であった。そんな日にもかかわらず、受け入れてくださったことに感謝の思いでいっぱいだった。クラス交流では、けん玉や福笑い、竹とんぼ等の日本の伝統遊びと一緒に挑戦した。始めはドキドキしていた生徒もけん玉の玉がお皿に載り、成功した瞬間に笑顔の花が咲いた。さらに、折り紙でそれぞれの紙飛行機を作った。雨が降り始めた校庭でその紙飛行機を空高く飛ばした。高く飛んだ紙飛行機や遠くまで飛んだ紙飛行機などそれぞれの飛んでいく先を見つめながら、それぞれの表情がもっと笑顔になっていった。雨が止む気配はなかったので一度投げたら終わりかと思っていたが、飛んでいった紙飛行機を拾っては、何度もはじめの位置に戻ってもっともっと上手く飛ばそうとする子どもたちに、「したい」という思いが溢れる学びのあるべき姿を見たように感じた。

先生方は、子どもたちの様子や表情をよく見ることで、その裏にどのような思いがあるのか把握することを意識されていることも学んだ。子どもを育てる教育において大切なことは、ネパールも日本も万国共通であった。

[8/4 (月)]

⑬ ACP (Association for Craft Producers) Nepal 工房、直営店「Dhukuti」



垣内望花： エンジンではなく電気を使用し、雨水を利用して節水したり、汚れた水をタンクで一度洗ったりするなど、環境への配慮が随所に見られた。また、10年ほどで育つ木材を使うなど、地球にも優しい取り組みをしていた。女性への福利厚生事業も充実しており、女性の自立や生活改善がシステムとして確立されていることに、とても魅力を感じた。こんなに魅力的な会社なら、誰もが働きたいと思うはずだと考えていたが、近年は若者が海外へ出てしまったり、難しい技術の習得が必要だったりすることから、働き手が不足していることに驚いた。ネパールを発展させていくために、非常に大切な取り組みだが、難しい現状があることを知った。フェアトレード商品の直営店「Dhukuti」では、どれもかわいくて魅力的な雑貨がたくさん販売されていた。しかし、フェアトレード業界が人材不足であることなどの現状を知り、フェアトレードは単なる支援ではなく、自分を守るものであり、意味のある仕事であることを広めていくことが大切だと感じた。フェアトレードは支援ではないという話を聞いて、私は今までフェアトレード商品を買うことを募金のような感覚でいたため、ハッとさせられた。「労働に見合った対価」を得ること、そして「リピートしたいし、買いたいから買うという商品であるべき」という考えを知り、フェアトレード商品への見方が大きく変わり、応援したい気持ちがさらに強くなった。



松本双葉： フェアトレードは、人だけでなく地球にも優しい取り組みであることを教えてもらった。また、寄付のような感覚で物を購入するのはフェアではなく、「良いと思って買ってもらえるよう、良いものを作る」という考えも初めて知った。まだ知らないことが多いと感じ、自分の住む地域でも取り組んでいる人がいれば知りたいと思った。工場の中に入ると、陶器を作る人がいて話を聞くと、JICAの海外協力隊が技術協力をしていたことが分かった。日本人の名前が出てきて驚き、ネパールと日本のつながりを感じた。最後に、女性が働いても給料を受け取れず、身内の男性が受け取っていた事例を聞き、見えないところで弱い立場の人が権利を得られないことがあると知った。支援や協力をする時は、自分がしたことだけでなく、相手のその後まで見届けることを忘れないようにしたい。

[8/5 (火)]

⑭ CWIN (Child Workers in Nepal) 事務所



澤田晃一：ネパールでは長年の取り組みにより児童労働者数は**110万人**へと半減したものの、依然として**10万人**もの子どもが危険な状況下で働かされている現実を知った。

最も衝撃を受けたのは、麻薬関連の労働に従事する子どもたちが、労働の過程で麻薬を使用させられているという事実であった。一方で、インフォーマルセクターでの労働は発見が困難で、製造業などでは多段階の下請け構造により児童労働が隠れやすく、レストランなど身近な産業にも潜んでいることを学んだ。経済のグローバル化が進む現代において、日本に住む自分も複雑なサプライチェーンを通じた消費行動により、知らずのうちに児童労働に加担している可能性があることに気づかされた。遠い国の問題としてではなく、消費行動の見直しや継続的な学習を通じて自分事として向き合う必要がある。授業を通してこの問題について伝え、考えてもらうことが、ネパールの子もたちと出会い、この問題を知った自分の、教師としての責務であると感じた。



橋本幹子：ネパールの児童労働保護団体 **CWIN** を訪問し、子どもを取り巻く過酷な現実を知った。児童労働は単に働くことではなく、採掘や危険な化学物質の扱い、紛争への関与、売春や奴隷のような形態もあり、想像以上に過酷であることに衝撃を受けた。虐待や家庭の事情から働かざるを得ない子どもも多く、カトマンズには約**5000人**の子どもたちがメイドとして働いているそうだ。菓代を稼ぐため「やらねばならない」と追い込まれ、読み書きや社会性を身につける機会を失い、成長やアイデンティティの形成が阻まれている。ある保護された子は、長い間、質の悪い米しか与えられず、**3年**ぶりに美味しい米を食べて涙したという話も聞いた。**CWIN** では「子どもたちは国の誇りだ」という理念のもと、シェルターや相談、レスキュー活動に加え、市民の意識改革や啓発にも力を注いでいた。子どもを親の元へ戻す際も、子どもの声を尊重し、必要に応じて経済的支援や親のフォローを行っている。一方で **CWIN** の活動を「邪魔だ」と捉える人もいる中、子どもの権利を守るために粘り強く取り組む姿勢に心を打たれた。今回の学びを通じ、このような現実を日本の子どもたちにどう伝えるべきか、自分の中で葛藤を抱いている。

[8/5 (火)]

⑮ シャプラニール事務所



杉下絵里華：シャプラニール事務所を訪れ、スタッフの横田さんから「取り残さない、その小さな声を」という理念がどのように実践されているのか、お話を聞いた。現地の活動は

「子どもの今を支え、明日を守る」「災害に強い地域を作る」「社会からの孤立を防ぐ」「市民同士のつながりを促す」の4つの柱で支えられており、どの取組にも共通していたのが「現地の人に寄り添う姿勢」だった。「現地の人と関わる上で大切にしていることは何ですか」と横田さんに質問すると、一番に「出しゃばらないこと」という答えが返ってきた。支援は「してあげる」のではなく「一緒に歩む」もの。そして、こちらが一方向的に決めつけて動くのではなく、現地で本当に求められていることを尊重することが不可欠だと感じた。現地の人と関わる際には、文化や関係性を尊重し、直接働きかけるよりもネパール人スタッフを間に挟むことが多いと言う。一方で、第三者だからこそ切り込める視点もあり、そのバランス感覚も大切だということ学んだ。この訪問を通して、支援の本質や自分なりの関わり方について見つめ直すことができた。



野田琴乃：シャプラニールは「取り残さない、その小さな声を」をスローガンに、子ども、防災、在住外国人、フェアトレードを中心に活動している。特に印象に残ったのは、児童労働の取り組みを「退学を防ぐことで、働く子どもを減らせる」という視点で行っている点である。子どもを働かせる理由を親

や雇用主の立場で考えると、身勝手に思える面もあるが、貧困や教育の不十分さなど、社会の構造的課題がそうせざるを得ない選択をさせている現実がある。子どもの保護・支援に加え、社会への働きかけとして、教員向けワークショップや、テレビ・ラジオを通じた市民への呼びかけ、省庁や自治体への政策提言など、活動は多岐にわたる。小さな声に気づくには、物事をカテゴライズせずに見る視点が大切だと学んだ。日本人と外国人、男性と女性といった境界が薄れつつある今、すべての人の持つ可能性が開花する貧困のない社会の実現に向けて、自分にできることを考えていきたい。

[8/6 (水)]

⑩ Next Generation Residential Academy



丹羽真琴： Next Generation Residential Academy では、防災クラブの活動を見せてもらった。その学校では、地震を体験したことがない子どもたちも興味をもって主体的に学べるよう、ゲームやクイズを通して、防災について学んでいた。先生たちが指示する様子はなく、子どもたちだけで防災を学ぶためのイベントを主催していた。体験をしてみて、大人でも考えさせられるゲームがあり、楽しいだけではなく、防災への知識・行動へとつながるものだと感じた。特に、身の回りのものを使っての搬送の方法や救急手当の方法が勉強になった。また、活動の中で、上級生が下級生をサポートする姿が見られた。上の学年が学んだことを下の学年に伝える活動を日頃行っているようだ。そのような学び合いを通じて、一人ひとりが、学校全体が、防災に対して強い意識をもっていると感じた。同じ地震国の日本として、まだまだ子どもたちにすべきことがあると感じた。



杉下絵里華： Next Generation Residential Academy を訪問し、生徒たちの防災意識の高さに感心した。限られた資源を工夫して使いこなす生徒たちの姿はまさにライフハックの宝庫で、こちらが学ばされる場面も多かった。また、上級生が下級生に教える仕組みが自然に機能しており、学び合いの文化が根付いていると感じた。さらにこの生徒たちは、「自分たちが地域の大人に防災や生活の工夫を教えるのだ」という誇りをもっており、それが自信となって表情や立ち振る舞いに表れていた。

歓迎の場では、まず生徒が歌や伝統舞踊を披露し、続いてこちらが「ふるさと」と「ソーラン節」を歌い踊った。温かい拍手が会場に響き、ネパールと日本が文化でつながる瞬間を全員で共有した。日本文化の授業でも、生徒たちは興味津々に習字や盆踊りに挑戦し、満面の笑みを見せてくれた。防災や生活の知恵、日本文化への好奇心、地域に還元しようとする誇り—その全てが一体となった学びの場に、強い感銘を受けた。

[8/7 (木)]

⑪ JICA 海外協力隊 (交通安全) 活動



野田琴乃： 「ネパールの交通意識を高めること」を使命に活動されている協力隊員の様子を見て、支援や協力は本当に小さなことをコツコツ積み重ねるものであり、成果がすぐには出ない大変な取り組みだと実感した。信号機が半分程度しか機能しない状況の中、自らが信号機の役割を担い、一人ひとりに声をかけて交通整備をする姿が非常に印象的だった。多くの人が交通ルールを守る意識が薄れている中で、根気強く呼びかけ続けるその姿には深い責任感と熱意を感じた。教育や取り締まりの立場でありながら、上から目線ではなく寄り添う姿勢で活動されており、対等で共生のあるべき姿を学ぶことができた。さらに、彼らは自分たちがマイノリティ側であることを自覚し、日本の方法を押し付けるのではなく、ネパールの文化や価値観を尊重した上で、その国に合った支援の方法を模索している。この姿勢こそ、持続可能な支援に欠かせない大切な考え方であると強く感じた。





丹羽真琴：ネパールに到着して最初に驚いたのは、道中の交通事情であった。車やバスがひしめき合い、信号は電気が通っておらず機能していないものも多い。実際、カトマンズ市内に設置されている 69 基の信号機のうち、稼働しているのは 36 基にとどまるといふ。車間距離は極めて近く、街中には大きなクラクションの音が絶え間なく響き渡っていた。車に乗りながら、「事故が起きないのだろうか」と強い不安を抱いた。そのような交通状況の中で、JICA 海外協力隊の寺嶋さんと澤口さんが取り組んでいるのが「交通安全意識」を高める活動である。限られた環境の中で、身近にあるものを活用した交通整備や、誰にでもできる簡単なことを繰り返し啓発することを大切にしているという。単に日本の方法を押しつけるのではなく、ネパールの人々の考え方を尊重し、その中で「自分にできること」を模索しながら活動している姿勢が印象的であった。毎日、危険と隣り合わせの環境にありながらも、「一人でも多くの人の安全と命を守りたい」という強い思いで活動する姿を目の当たりにし、涙が出そうだった。

[8/7 (木)]

⑱ アサン地区／タメル地区



橋本幹子：アサンやタメル地区を訪れ、教材として活用できる品々を買い求めた。アサンでは、香り豊かなスパイスやウコンの原型、3 種類の岩塩、ネパール柄の布、民族衣装のクレタを入手した。タメルでは、伝統楽器マダルや、ネパールの生活に根づいた 2083 年表記のカレンダー、香り高いお茶や T シャツを購入した。どれも日本ではなかなか手に入らないものであり、見て、触れて、匂いを感じられる「本物の教材」として大きな価値があると感じた。タメルで立ち寄ったカフェは、名古屋の中心にあっても違和感のないほど洗練された雰囲気、外国人客が多く、アサンやタメル地区が観光と国際交流の拠点になっていることを実感した。今後の授業や市のイベントでは、これらの品々を使い、ネパールの生活や文化の多様性を伝えるとともに、人々の工夫や伝統の豊かさに触れてもらいたい。特に「日常にある文化」が持つ魅力を体験してもらうことで、遠い国をより身近に感じ、国際理解のきっかけにつなげたいと考えている。



澤田晃一：カトマンズの 2 つの地区で教材収集や散策をした。アサン地区は細い路地が迷路のように入り組み、スパイス、野菜、生活用品、仏具などの露店が密集している。商品は店先に店主が見えなくなるほど山積みでレイアウトされ、地元の人々の生活に密着した市場という印象を受けた。コンクリートや鉄骨で整えられた店先と、赤レンガと木材を使ったネワール建築が混在し、生活と伝統が共存している様子を見ることができた。



一方、タメル地区では昼食をとったカフェをはじめとした都会的な飲食店や、日本でも見かけるアパレルブランドの路面店が並んでいる。土産物屋街には外国人観光客の姿が目立ち、アサン地区とは異なる国際的な賑わいを見せている。途中のスクールでは、張り出した軒のおかげでほとんど濡れることなく移動でき、建築の機能性も実感した。2 つの地区はそれぞれ異なる魅力を持っていたが、どちらも伝統とこの国の今が混在し、楽器の音や人の声、排気ガスやスパイスの匂いなど、ネパールらしい活気を五感で味わうことができた。

[8/7 (木)]

⑲ JICA 事務所関係者との懇親会



松本双葉：JICA ネパール事務所の関係者の方々には、私たちがこの研修で何を学び、何を感じ、これからどうしていきたいのかをととても気にかけてくれていた。なぜ教師を目指したのか、どんな思いで仕事をしているのか、といった質問をたくさんしてくれた。また、私たちも関係者の方々にさまざまな質問をした。外国で働きたい、ネパールで何かできることをしたいというお話は非常



に興味深かった。その中でも特に感じたのは、教師という仕事の素晴らしさとその責任の重さだった。ここにいる方々は、教員という立場の私たちに夢を託してくれているのだと実感した。世界を平和にし、日本やネパールをよりよい国にしようと活動する中で、多くの人に機会を与えられるよう考えた先に、多くの子どもと関われる教師の存在があるのだと感じた。この研修は決して私たちだけのためにあるのではなく、私たちのその先にいる子どもや大人に学びをつなぎ、広げていく活動なのだ改めて感じた。



垣内望花：世界で活躍されている方々と話す機会は滅多にないため、非常に貴重な経験だった。「どうして教員になったのか」「どうしてこの研修に参加しようと思ったのか」という会話を通して、自分自身の原点を見つめ直すきっかけになった。研修の終盤での懇親会だったこともあり、当初の思いと、今の自分の思いを比較することができた。また、他の参加者の話を聞くことで、さらに視野が広がった。JICA ネパール事務所の方々は、海外での教師経験者や、国際協力の最前線で活躍している方々ばかりで、話を聞いているだけで心が躍り、世界が広がっていくのを感じた。私もたくさんの知識や経験の引き出しを増やし、教員としてもっと幅を広げたいと強く思った。様々なきっかけでネパールに来られた方々が、口を揃えて「ネパールは良い国だ」と言っていたのが印象的だった。相手の国を知り、理解し、そして愛情を持って伝えるからこそ、国際協力は成り立つのではないかと思った。

★ネパールでの食事全般



真野直亮：ダルバートやモモなど、ネパールでの食事はどれも美味しく、スパイスの香りがとても懐かしい。また、アサン地区に多く売られていた金属のお皿に盛り付けられているのも特徴的である。日本に帰国後、近くにあるネパール料理店を訪れたが、日本に住む方々が好む味付けになっているから、そのお店では現地の味付けとは違うことを教えてもらった。

ネパールではベジタリアンの方もいるため、スーパーではベジタリアンマークのついた商品もあった。また、モモだけでもベジタブル、チキン、水牛があり、メンバーには水牛のモモが人気であった。Universal Training Center で入ったクラスで聞くと、チキンのモモが好きという学生が多くいた。そして、ネパールのお米は日本のお米と異なり、デンプン質が少なく、パラパラとしていた。ダルバートのさらさらのカレーとの相性も良く、あっさりとお食することができた。



伊藤柚季：ネパールの子どものおすすめ料理を聞くと最初にダルバートが出てくる。真ん中に細長いご飯（バート）がこんもり盛ってあり、その周りに豆のスープ（ダル）やカレー、ジャガイモなどの野菜のおかず（タルカリ）や漬物（アチャール）がセットになっているワンプレート料理である。日本人の口に合う辛すぎない味付けで、周りのおかずやスープとご飯を混ぜて食べる。ネパールの人々は手で混ぜながら食べていた。手で食べると熱さがわかるから火傷しないのがメリットだと教えてもらった。お肉以外はおかわり自由で、「プギョ！（十分です）」と言うまで何度もおかわりを入れてくれる。

他にもモモという餃子や小籠包に似た食べ物も有名で、蒸したり焼いたりして食べる。モモの中身は水牛、チキン、野菜から選ぶことが多く、それぞれのよさがあった。ネパールではヒन्दウー教徒が多く基本的に牛肉は食べないため、モモの中身に水牛を使用していたが臭みはなく美味しかった。

IV. 帰国後の報告

● 現地研修報告書

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度



伊藤柚季：今回研修に参加した目的は1つある。1つは「自分が五感で感じたことを自分のクラス、学年、学校、地域に伝えること」、もう1つは「世界を身近に感じてもらい、課題を自分事として捉えてもらうこと」である。ネパールでは、現地に行くことでしかわからない空気感を最大限に味わうことができた。匂いや感覚、人々の温かさなどを心や肌で感じ、未舗装の道路の不便さや自然の豊かさを全身で感じた。ネパールで出会ったものすべてが私の宝物であり、ネパールのことが大好きになった。日本に帰ってきて、周りの人々に伝えることが楽しみで仕方ない。「ネパールのことが大好きな先生」である私を通して子どもにもネパールに肯定的に出会ってほしい。ネパールだけでなく開発途上国共通の課題に自ら気づき、遠い国の関係ない話で終わらせるのではなく、仲間が困っているから自分が力になりたいと行動できる児童を育てていくために今後実践を行っていきたい。



垣内望花：国際理解という観点から、私は、座学ではなく実体験を通して文化の違いや国際的な取り組みを五感で感じ、教育観や視点を広げたいと考えていた。外国籍の児童生徒が多い地域での勤務を通して、国際理解に関する自身の知識不足や、彼らへの支援の難しさを痛感したことが、今回の研修参加のきっかけであった。研修を通して、単に「文化の違いを感じる」だけでは、国際理解には繋がらないと気づいた。むしろ、「文化を知り、理解し、互いに歩み寄り」ことこそが重要であると感じている。以前は、違いを感じる事が理解への第一歩だと考えていたが、研修での様々な経験を通して、各国の文化は深く、多面的なものであると実感した。知れば知るほど、考えさせられることばかりだった。

今回の研修では、多くの方々のご協力のもと、様々な場所で貴重なお話を聞くことができ、深く「知る」ことができた。しかし、自分の学級や学校にいる外国籍の児童生徒とその家族のことを考えると、彼らが日本の文化を十分に知り、理解しているとは限らないことに気づいた。そして、私は外国籍の児童生徒の各家庭の文化を深く理解できていないことを反省した。それぞれの家族が育ってきた環境には、それぞれの歴史、文化、風潮、そして独自の習慣がある。そのような多様な背景を持つ人々と共に生活しているということをもっと深く理解しなければならぬと痛感した。今回の研修で得た学び、つまり共存・共生していくことの大切さ、そして真の支援とは何かという自分なりの考えを、目の前の子どもたちに分かりやすく伝え、実践していくことが、私の使命であると考えている。



澤田晃一：ネパールの文化や生活を直接体験し、「自分自身の知見を広げること」と「生徒が世界の出来事を自分ごととして考えられる題材を得ること」を目的として本研修に参加した。事前研修等で得た知識やこれまでの経験から一定の予想や仮説をもって臨んだが、ネパールでの生活を体験したり、経済格差、インフラの未整備といった社会課題の実際を目の当たりにしたりする中で、自分の中の「当たり前」が相対化されていくのを感じた。一方で、ホームステイでの人々との交流や、学校での子どもたちとの模擬授業を通して、国や文化が異なっても共通するものが多くあることを実感した。

今回の研修で経験したこと、撮影した映像は教材として活用し、社会科の授業において、これまでの学習内容とネパールの事例を関連付けながら、グローバル化が進む現代社会の課題を具体的に考察させることができる。今回の研修は、生徒が世界の諸課題を自分ごととして捉え、自らの視点で現代社会を考察して意見を発表する授業構想の基盤となったと考える。



杉下絵里華：今回の現地研修での目的は、五感をフルに使ってネパールを楽しみ、その魅力を全身で感じてこの国を大好きになることだった。実際に現地での出会いや経験を通して、ネパールは心から大切

に思える国となった。この熱い思いを語るからこそ、国際理解に関心を持つ子どもを育てる力になると考える。外国に行くことは難しくても、自分が肌で感じた感動や現地の生の声を届けることで、その国とのつながりを築くことはできる。近年、日本国内はもちろん、私が暮らす関市にもネパール人が増えている。子どもたちにはこれから関わることになる外国にルーツ持つ人々と肯定的に出会い、世界の課題を自分事として捉えられる力を育てたい。今後は現地で集めた情報を精選して授業で活用し、リアルなネパールを伝える予定である。そして、子どもたちとネパールの縁をどのようにつないでいくかをじっくり考えていきたい。



丹羽真琴：私が研修に参加した目的は、よりよい世界をつくる一人として、また教師として子どもたちと何ができるかを考えることであった。昨年担任をした一年生が「ネパールの子は家の手伝いをしているかわいそう」と言った際、「かわいそう」で終わらず、自分にできることを考えられる子どもを育てたいと強く思った。現地ではCWINやシャプラニールで児童労働の実態を知り、街中では物乞いをする子どもとも出会った。また女性労働の状況にも触れ、人々の人権が守られているのか考えさせられた。実際に現地に行ったからこそ、国際社会の課題を目で、肌で感じる事ができた。この研修を経て、大好きになったネパールだからこそ、課題解決のために自分にできることを探し続けたいと今は強く思っている。今後は経験をもとに、子どもたちと共に「より良い世界をつくる一歩」を考え、1人の100歩ではなく、100人の1歩を生み出していきたい。



野田琴乃：子どもたちが世界を身近に感じ、自分事として考えられるようにするため、まずは自分自身の理解を深めることを目的に研修に参加した。ネパールで出会った人々は優しく、日本に関心をもつ人が多かった。日本にはない景色や文化、人々の暮らしがあるが、一つひとつに意味があり、知りたい気持ちがどんどん大きくなった。一方で、出稼ぎ、児童労働、防災、交通、そして今も残るカースト制度について考える機会もあり、支援には多くの理解と協力、時間が必要であると実感した。これらは遠い国の話ではなく、同じ地球に生きる仲間の問題だ。一人ひとりが考え、小さなことから行動することが未来を変えると感じ、「子どもたちどう考えようか」とワクワクする研修となった。人権や対等についても深く考えるきっかけとなったが、まだ全てを理解したわけではない。これからも学び続けながら、出会った生徒や大人に問いかけ、ともに考える仲間を増やしていきたい。



橋本幹子：私の現地研修の目的は、ネパールでの経験を生かすことで、子どもたちが「世界と自分」を重ねて考えられるようになることだ。そのために、現地研修に行く前に、所属校の子どもたちに「自分たちにできることは何か」を考えてもらった。子どもたちは「一緒に未来を創っていきたい」という思いをもち、ネパールの人々に向けた歌のプレゼントを用意し、現地へ届けることにした。実際に現地子どもたちや大人に歌を届け、子どもたちの思いを共有できたことで、言葉や文化の違いを越えて心が通じ合う瞬間を双方に実感させることができた。所属校の子どもたちの歌に笑顔で応えてくれたネパールの人々の姿を見せたことで、思いは確かに届くこと、そして「世界と自分とはつながっている」という感覚を子どもたちにももたせることができた。結果として、自身の国際理解教育の教材化の幅と視野を広げることができた。また、ホームステイや各施設の訪問先の人々と交流する中で、ネパールの豊かさや温かさを感じる一方、教育や生活環境の格差、安全面での課題にも直面した。これらの実感は単なる知識を超え、子どもたちに「世界の現実」についてどう問えばよいのかを考える大きなきっかけになった。さらに、この学びを帰国後、地域や行政と共有し、親子料理教室や市の国際交流イベントとつなげることで、学校だけでなく地域全体で国際理解を育む仕組みを広げていく可能性を得た。研修の経験を活かし、授業・地域・行政をつなぐ実践へと発展させていきたい。



松本双葉：私の目的は、外国籍児童の気持ちを自分自身で体感することだった。実際にネパールに来てみると、言葉は全く分からない。食べ物も見慣れないうえに、味の想像もつかない。文化やルールも日本と異なり、いつも不安だった。日本語の授業ではネパール語で説明されていて内容が理解できず、30分ほどの授業でさえ自分一人だったらと思うと焦る気持ちが増した。短期間の経験で外国籍児童の気持ちを完全に理解することはできないが、それでも現地で研修を受けられたことは大きな学びとなった。声の調子、文字一つ、ちょっとしたイ

ラスト、写真、実物など、非言語の要素にどれだけ助けられるのかを実感することができた。今後は授業に積極的に非言語の要素を取り入れると共に、より多くの教員と共有し、一人でも多くの外国籍児童が日本で安心して、居心地良く過ごせる環境を整えていきたい。



真野直亮：今回の研修に向けて2つの目的を考えていた。1つめは、ネパールでの経験を活かして、子どもたちと授業をすることである。人手不足の日本では、多くの外国人が様々な分野で社会を支えてくれている。文化や考え方の違う人とどのように関わり、共に暮らしていくのか、子どもたちが考えることのできる授業を目指している。ネパールで訪問した学校では、6人の生徒がそれぞれの民族の伝統的な衣装を着て、それぞれの民族の踊りをみんなで披露してくれた。お互いの民族の文化を尊重して、対等な関係で共に過ごす姿がとても印象的であった。2つめは、教師として自分自身の知見を広めることである。今回の研修を通して、ネパールの文化やネパールの方々が大好きになった。また、日本とネパールのつながりや共通の課題に気づくことができた。この12日間は、教師としても人としても成長した研修、知見を広めることのできた研修となった。

2. ネパールから学んだこと① 「ネパールに肯定的に出会う」という観点から



伊藤柚季：覚えてたの「ナマステ」を恥ずかしながら言ってみると、誰もが笑顔で「ナマステ！」と返してくれた。国籍も文化も違う見知らぬ外国人である私を笑顔で受け入れてくれた。私は心がつながった感じがして一瞬でネパールが好きになった。ホームステイでは、生活の仕方や幸せの考え方についての話をして、自分にはない考えを教えてもらった。「郷に入れば郷に従え」という言葉があるように彼らの生活の一部に入り込むことで気付く価値観や考え方にたくさん出会うことができ、さらにネパールのことが大好きになった。彼らが困っていることがあると、私は自分の友達が困っているときのように胸が苦しくなった。肯定的に出会うことで、相手をもっと理解したい、相手のためにできることは何か探したいと思うようになった。この経験はかけがえのないものであり、自分のクラスの子どもにも体感してほしいと強く感じた。



垣内望花：ネパールを訪れた際、人々は皆、笑顔で挨拶を交わしてくれる。歩いている時も、車の窓越しでも、目が合うと温かい笑顔が返ってくる。その優しさに触れ、心が温まるような感覚を覚えた。日本では、学校で挨拶の重要性を教えるが、学校の外、特に大人たちの間では、積極的に挨拶を交わす場面は少ないように感じる。ネパールのように、国全体がそのような温かい雰囲気であることは、素晴らしいことだと感じた。挨拶一つが、その国の魅力を形作る重要な要素になるのだと実感した。宗教が深く根付いているネパールでは、文化や風習も興味深く、宗教が人々の心の支えとなり、多くの人を救っていることを知った。宗教には、時に制約も伴うが、私が目にしたネパールの人々は、宗教を生活の中心に据えているというより、生活の中に自然と宗教が溶け込んでいるように見えた。

また、多くのネパール人が日本への渡航を希望していることに、喜びを感じた。しかし、日本語学校の生徒たちが「日本での心配なことはありません」と話していた言葉を思い出すと、不思議と心が痛んだ。私は、日本で困っている外国人の方々に、どれだけ手を差し伸べてきたのだろうか。関わってきただろうか。日本に行きたいと願うネパールの人々のためにも、そして、より多くの人々が安心して暮らせるように、日本はもっと温かい国であるべきだ。そんな国になることを心から願う。そして、そうなるために、国際理解教育として伝えていこうと思う。



澤田晃一：ホームステイの2日目の夜、村の人々がカルチャープログラムを開いてくれた。お世話になったホストファミリーなどの大人から、一緒に遊んだ子どもまでが伝統的な踊りを披露し、私たちも一緒に踊った。お礼として「ふるさと」の合唱を行ったが、その時の歌声は、以前、別の場所で歌った時よりも力強く、表情も気持ちもこもっていたと感じた。それは、ホームステイで村の人々の温かさに触れ、踊りに心から感動したことが合唱に自然と反映されたからだと思う。その瞬間、「自分が誰かに与えられるもの」は「誰かから与えられたもの」によって育まれているのだと気づいた。ネパールの人々と交流する中で、これまで自分自身も家族

や友人、同僚など多くの人から与えられてきたことを思い出し、改めて感謝の気持ちを抱いた。人との出会いや交流は一方的なものではなく、互いに与え合うことで深まっていくものだ実感した。



杉下絵里華：私は「郷に入っては郷を楽しむ」をモットーに研修にのぞみ、ネパールと肯定的に出会うことを心がけた。文化や習慣の違い、不便だと思えることさえもまるごと受け入れ、こちらの「知りたい」という気持ちや「仲良くなりたい」という笑顔を向けると、現地の人も全力で応えてくれたように感じる。私たちの交流の様子を見ていたホームステイ先の村のおじいさんから「日本人はスポンジみたいに何でも吸収するね。私たちの文化を思いきり楽しんでくれて嬉しいよ。自分たちも見習わなきゃね。」と声をかけてもらった時、想いが相手に届いたことを実感した。好きになればなるほど「もっと知りたい」という探求心が芽生え、課題に直面した時には本気で心配し、何とかしたいと思う気持ちが強くなる。こうした感情こそが、国際協力の出発点になるのではないかと気づかされた。ネパールとの肯定的な出会いは、私自身の世界を広げるだけでなく、子どもたちも前向きな国際理解の種をまく原動力になると確信している。



丹羽真琴：日本と同じところも違うところもあったが、素敵！楽しい！面白い！をたくさん見つけることができた。優しくあったかいネパールの人たち、子どもたちの素敵で無邪気な笑顔、美しい自然や歴史的建造物、伝統的衣装、楽しい歌や踊り、伝統的な美味しいご飯、料理の仕方、楽器、荷物の運び方など、新しく見るものや触れるものをどれも肯定的に捉えることができた。肯定的に出会えたものがたくさんあったからこそ、ネパールをより知りたくなったし、学びたいと思った。ネパールがどんどん好きになった。そう思えたからこそ、ネパールの課題を自分事として考えていくことができたと思う。子どもたちと国際理解教育をするときも、肯定的に出会うことで、自分事として考えることにつなげていきたいと思った。まずは、自分が大好きになったネパールの素敵や面白いを、子どもたちにたくさん感じてもらいたい。



野田琴乃：街中や田舎など、どこを散策していても、「ナマステ〜」と満面の笑みで挨拶してくれる。「どうしてみんなに声をかけてくれるの？」と尋ねると、通訳の方が「ネパールは多民族・多宗教の国で、民族や宗教間の隔たりがあまりなく、お互いに知り合おうとする感覚が強いのかもかもしれない」と教えてくれた。異文化交流会では、日本といくつかの民族の踊りを一緒に踊り合った。カトマンズにはヒンドゥー教と仏教の寺院が隣り合わせにあり、お互いの寺院を行き来する人々の姿が見られる。ドキドキしながら訪れた学校では、子どもたちから声をかけてくれた。ホームステイ先には複数の民族が住んでいるが、そんなことは関係なく、大人も子どももお互いの家を行き来していた。彼らの寄り添う姿勢やマヤ（思いやり）の心が感じられ、私たちは心を交わすことができた。自ら自然に一步を踏み出せる彼らの姿勢のおかげで、私は肯定的にネパールに出会い、ネパールが大好きになった。



橋本幹子：ネパールでは、食事は手で食べるなど現地の人たちと同じように過ごし、自分自身も「当たり前」を揺さぶられることで、訪問国に肯定的に出会うことの意味を強く実感した。行きの機内で出会ったネパールの方が、見返りもなく4時間もネパール語会話の練習をしてくれたことや、道を歩けば誰もが笑顔で手を振り「ナマステ」とあいさつをしてくれる姿から、人に知識や力を惜しみなく分け合うネパール文化のあたたかさを学んだ。一歩進むごとに新しい価値観が広がり、自分の世界がどんどん書き換えられていく感覚を味わった。また、協力隊員やネパールで支援活動をしている方々が、時間をかけて信頼関係を築き、地域に根ざして活動している姿、日本の子どもたちへ向けたビデオメッセージに込められた「マヤ（思いやり）の心を大切に」という言葉には深く心を動かされた。こうした経験を通じて、異なる文化や考え方を面白いと感じ、互いに学び合う姿勢の大切さを実感した。



松本双葉：昨年度の研修受講者の言葉や発表から、彼らが「ネパール大好き」という印象が心に残っている。実際にネパールを訪れてみると、食べ物がおいしくて、伝統工芸品は美しく、フェアトレード商品も人にあげたくなる物だった。でも、私にとって何よりもネパールを好きになった理由は、出会った人々が

とても魅力的だったからだ。ホームステイ先の子どもは「写真家」という夢を持ち、誰かの人生に欠かせない瞬間をいつでも思い返せるようにしたいと教えてくれた。訪問校の子ども達は、一生懸命伝えようと話しかけてくれて、私が理解できない時には身振り手振りをつけてゆっくり話をしてくれた。この魅力的な人たちのことが大好きになったし、人との出会いやつながりの大切さを改めて感じた。大きな国の中の誰か一人でも大切な人が出来れば、その国のことを好きになれるし、大切に思えるんだなと感じた。



真野直亮：初めての海外に行く機会を得て緊張していた。そんな私に対して、現地の方々は大人数、子どもに関わらず、日本語を使って積極的に声をかけてくれた。また、日本に対して友好的な方が多いという印象を受けた。私が話すネパール語はたどたどしいものだったが、相手が大切にしている言葉を話すことで相手との距離が縮まっていると感じた。同様に、相手の大切にしている考え方から学んだことがある。ネパールで80%以上の方が信仰しているヒンドゥー教の寺院である「パシュパティナート寺院」では埋葬はせず、故人の灰は川に流す。初めはこの埋葬の仕方に疑問を持ったが、ヒンドゥー教では輪廻転生という考え方を大切にしていると聞き、故人の来世を願う人々の思いを知った。30年間、日本で過ごしてきた自分の感覚や、常識がネパールや世界の常識ではないことを実感した。またこの経験を通して、同じ日本人同士であっても同じ常識を持っているわけではない、という「違い」を受け入れて、相手を理解しようとするのが大切だと再認識する機会となった。

3. ネパールから学んだこと②

「日本とネパールとのつながりや同一性を理解する」という観点から



伊藤柚季：ネパールの街中には日本製のバイクや車が多く走っていて、スーパーマーケットには日本の商品が何個も売っていた。ホームステイ先では「日本の製品は品質がいいから壊れないよ」と嬉しそうに教えてくれたり、「この道路はJICAの支援によってできたんだ」と自慢げに教えてくれたりした。日本語学校の生徒は「早く日本に行きたい」と目を輝かせていた。そして、どの訪問先に行っても初めて会う私たちを温かく歓迎してくれて、時間いっぱいまで彼らの活動内容を丁寧に教えてくれた。これほどまでにネパールの人々が日本に対して良い印象をもってしてくれるのは、今までの日本人が行ってきた支援や協力のおかげだと強く感じた。日本とネパールの懸け橋となり、様々な方法で支援を続けてきてくれた日本人がいるからこそ、遠く離れた国同士にもかかわらず良好な関係を築けていると感じた。研修中にネパールの人々からもらった愛やおもてなしの心を、今度は自分が日本にいるネパール人に返していけたらと思う。



垣内望花：思っていた以上に、ネパールと日本とのつながりが深く、驚いた。最も身近に日本の支援を感じたのは、ホームステイ先での出来事だった。「この道路はJICAが作ってくれた。このおかげでヒマラヤまで早く行けるようになった。」と、何人もの村人たちが話してくれた。道路建設の支援をありがたく思い、生活がより良くなったことを喜んでいる様子だった。現地の声を聴くことで、支援はソフト面だけでなく、ハード面も生活改善に大きく貢献することを知った。支援する前も、支援した後も、現地の声に耳を傾けることが重要であると改めて感じた。現地の学校の先生たちは「まずは、子どもの話を聞く。そして、寄り添う。」ということを重視しており、日本の教育で大切にしていることと共通点が多いと感じた。子どもたちがより良い教育を受けることを願う気持ちや、「子どもたちは国の宝」という言葉に、深く共感した。日本も同じように考えていると思うが、ネパールの学校は、日本の学校以上に子どもたちにフォーカスしているように感じた。教育を受けられることが当たり前ではない環境の中で、子どもたちを大切に育てている先生方の姿勢を見習いたいと思った。

また、ラブグリーンの話聞いた際、「身近な緑の募金はここに繋がっているのか!」と、今まで以上にネパールとのつながりを強く感じた。緑の募金は、漠然と「木を増やす活動」というイメージだったが、実際に見学し、話を聞くことで、その活動の奥深さを知った。単に緑を増やすだけでなく、作物の作り方、栽培方法、地球に優しい方法、持続可能な取り組み、販売ノウハウまで、手厚い支援が行われていることを初めて知った。緑を増やす活動だけが、支援ではないと気づかされた。この学びは、生徒たちによりネパールを近く感じてもらえると思うのでぜひ自分の言葉で生徒たちに伝えたいと思った。



澤田晃一：人間には「未知のものを分類して理解したい欲求」がある。そのため、よく知らない人や物事をカテゴライズしようとする。しかし、それは偏見や差別につながることもある。研修を通じて出会ったネパールの人々に夢を尋ねると、日本の子どもたちと同じように、それぞれが異なる目標を持ち、努力していることが分かった。自分の子どもに海外で活躍してほしいと願う親もいれば、地元に残ってほしいと願う親もいた。ネパールを誇りに思う人もいれば、早く海外に出たいと考える人もいた。この多様な姿を知ること、[ネパールの人々]という一括りのイメージではなく、一人ひとりが個性や価値観を持つ存在であることを実感した。

一緒に食事をし、会話をし、共に過ごす中で、関わったネパールの人々は自分にとって「他人」ではなくなっていた。一人の個人として向き合い、知ろうとすることが共生の第一歩だと気づいた。



杉下絵里華：今回の研修を通して、日本とネパールには文化や環境の違いはあっても、先生たちの子どもへの想いや向き合い方には多くの共通点があることを知り、安心感と嬉しさを覚えた。子どもの表情をよく観察すること、何かが起こった時にその要因を探ること、興味を持てるよう工夫すること、そして子どもの想いを理解し寄り添うこと。こうした姿勢は、教育現場だけでなく、人と人、国と国が関わるあらゆる場面で必要であり、実際に国際協力に関わるすべての人の口からも「寄り添う大切さ」が語られていた。また、日本とネパールは途上国からの発展を目指す過程や大きな自然災害の危険といった共通の課題も抱えており、同じ困難を知る者同士だからこそ協力し合える可能性が大きいと感じた。こうした共通点や同一性を理解することは、相手の国をより身近に感じ、対等な立場で関わるための大切な第一歩になると実感した。



丹羽真琴：出会った人みんながやさしくてあたたかく、すれ違うときには「ナマステ！」と笑顔で挨拶をしてくれる。そんなふうに日本人の私たちに温かく接してくれるのは、長年ネパールのために熱い思いをもって支援・協力してきた人々の存在があるからだ、現地に行き初めて気づいた。通訳のラクスマンさんや、ティミルシナさんはじめ JICA ネパール事務所の方々、JICA 海外協力隊、国際協力 NGO。多くの出会いを通して、私は「日本とネパールの人々とのつながり」を実感した。中でも心を打たれたのは、ネパールで活動する海外協力隊員の姿だった。知り合いもなく、言語も違う世界で、その国がよりよくなることを願い、相手に寄り添いながら活動を続けている。「子どもたちの未来の可能性を広げたい」「国民の安全意識を高めたい」そんな強い思いを胸に、自分たちの活動が終わったあとも現地の人々が続けていけるように協力をしていた。「いろんな人の想いを聞いてよかった」で終わらせるのではなく、私も日本にいる自分だからこそできることを見つけ、行動していきたい。



野田琴乃：日本語学校を訪問し、「日本へ行くことが本当に楽しみ」「日本で働いて家族に仕送りをし、家を建てたい」という話を聞き、彼らが来日する背景を知った。日本人に対しては「優しい、真面目、時間を守る」と好印象を持っており、研修中の歓迎してくれる姿勢からも、日本への強い思いが伝わってきた。その思いに触れ、私たちはネパールについてどれだけ知っているのかと考えさせられた。JICA をはじめとする国際協力団体がネパールに協力し、ネパールの人々から感謝される中で、多くの方が日本で働き、日本側も大きな助けを得ているという事実がある。そのことを正しく理解し、身近にいるネパール出身の方や他国籍の方々にもっと関心を持つべきだと強く感じた。「なんとなく声をかけない方が無難」と考えるのではなく、マイノリティとして日本で生活している彼らと共に、誰もが心地よく暮らせる社会について、子どもたちや身近な人と共に考えていきたいと思う。



橋本幹子：日本とネパールの「つながり」や「共通点」を多方面から感じる事ができた研修だった。市場には日本の製品が数多く並び、同じ調味料やお菓子をネパールの人々も口にしてることに親近感を覚えた。一方で、ネパールの子どもの夢には「軍隊に入りたい」「外国で働いてお金を稼いだい」といった現実的な夢が多く、日本の子どもが描く夢との違いに現実の生活が強く影響していることに気づいた。しかし、子どもたちが大笑いしたり、思い思いの夢を語ったりする姿は、日本の子どもたちと変わらない。夢の形は

違って「未来をよりよくしたい」という思いは共通しているように感じた。日本とネパール両国をつなぐ役割を果たしている方にも多く出会い、互いの文化を理解しながら活躍している姿に触れ、個人の努力が両国の架け橋になっていることを学んだ。地震やジェンダーギャップといった共通課題を抱える両国だからこそ、経験や知見を分かち合いながら支える関係でありたいと強く感じた。表面的な違いを超えて、同じ課題や願いを共有する仲間として共に歩むことの意味を学んだ。



松本双葉：私はこれまで、ネパールから日本へ働きに来る人が増えているという認識はあったものの、日本とネパールのつながりを強く意識することはなかった。なぜネパールの人々が私たちに親切で温かく接してくれるのか、また、なぜ働く国として日本を選んでいるのか、十分に理解できていなかった。

実際にネパールを訪れてみると、これまで JICA や NGO など多くの日本人が現地では信頼関係を築き、互いのニーズを理解しながら、持続可能な取り組みを進めてきたことを肌で感じる事ができた。その積み重ねこそが、ネパールの人々から日本が信頼される大きな理由なのだと実感した。さらに、日本語学校の生徒から「日本は安全な国だから、自分が稼いで家族も日本に連れて行くのが夢だ」と語られ、日本への憧れと期待を知った。そうした思いを抱いてくれている人々に対し、私はこれまでどのように接してきただろうかと考えさせられた。多くの人々が築き上げてきたつながりを、私自身も大切にしていきたいと強く思った。



真野直亮：ネパールの教員が学校教育で大切にしていることとして、子どもの様子や表情をよく見ること・子どもの思いの背景や原因を探ること・子どもと多く関わることなどが挙げられた。学び手である子どもたちの思いを大切に、日々の学びを進めていくという姿勢は、まさに私が日本で子どもたちと接するときに大切にしていることであり、ネパールでも日本でも教員は同じ思いを持ちながら子どもと向き合っていると思った。CWIN の「子どもたちは国の誇りだ」、シャプラニール事務所の「取り残さない、その小さな声を」というスローガンを聞いて、抱える課題は様々でも、教育の重要性や将来の社会を担っていく子どもたちを大切に考える考え方は共通していると感じた。この研修での学びを踏まえて、2 学期以降も子どもたちの気持ちを尊重し、背景にある思いを想像しながら一人ひとりと向き合っていく決意である。

4. ネパールから学んだこと③

「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から



伊藤柚季：協力や支援とは何かを何度も考えた。飯塚次長の問いにもあったように「日本はネパールに協力・支援をする必要性はあるのか」を何度も考えて訪問先の方と交流をした。ネパールにはいい面がたくさんありネパールの人々は幸せそうに見えるが、課題があるのも事実である。JICA をはじめとする世界各国からの支援を受けて生活がより良くなった人々がいることも学んだ。支援をしている方々に話を聞く中で、課題を解決するために日本としてできる支援とは、「相手のニーズに合わせた支援」「現地にあるもので現地の人と一緒に進めていく支援」「自分たちの手が離れても持続可能な支援」であると考えた。また、これらの支援は教育と通ずるところもあり、教員として子どもと同じ立場で向き合い子どものニーズに合わせた教育支援をしていきたいと強く思った。そして、目の前の子どもたちにネパールだけでなく開発途上国に共通して関わる課題に気付き、自分事として捉え、仲間として何ができるかを考えてもらうために授業実践をしていきたい。



垣内望花：支援という観点から、日本が途上国に行っている支援は本当に必要なのか、研修期間中ずっと考え続けた。私たちが課題だと考えていることが、必ずしも相手にとって課題ではないかもしれないということや、どんな支援を必要としているのかということが多面的多角的に考え、深く理解することが重要であると学んだ。特に印象的だったのは、シャプラニールが支援のために提供した鉛筆が、市場で売られていたという話だ。良かれと思って行った支援がニーズに合っておらず、現金化されたり、地元の文房具店の営業妨害になったりする可能性もある。ニーズを正確に理解し、支援方法を模索することの大切さを痛感した。「支援する際に日本人は出し過ぎない」という姿勢も、支援の際には重要であると考えさせられた。

ネパールは大地震を経験しているため、日本と同じように防災対策をしているのか気になっていたが、その備えがあまり十分ではないことに驚いた。地震よりも、まずは目の前の生活を大切にしているからだろうか。素晴らしい国だと感じたからこそ、少し心配になった。

カースト制度や児童労働、格差や貧困などは、ネパールに行く前に学んでいた以上に、深刻で根強く残る課題であることを知った。これらは決して放置されてはならない問題だが、現状は改善されていない。その事実を考えると、非常に歯がゆい気持ちになった。児童労働を防ぐために、学校に通うことや教育を受けることが重要という話を聞き、学校の役割や、学校に求められるものが、教育だけにとどまらないことを痛感した。日本の当たり前が、当たり前ではない現実を改めて強く認識した。



澤田晃一：ネパールでは2015年の大地震を経て、都市部を中心に防災への取り組みが進んでいる。Next Generation Residential Academy では、防災に関するゲームや体験活動を通じて生徒たちと交流した。生徒たちが楽しみながら主体的に学ぶ姿から、学びにおいて体験や参加が重要であることを改めて実感した。日本もまた多くの震災を経験してきた国であり、耐震技術、防災物資の備え、防災教育などの面で相互に協力し合える可能性があると感じた。また、ラプグリーンネパール事業地を見学した際に、人手不足や高齢化、価格変動による農家の収入減といった課題が示された。これらは日本の農業が直面している問題とも共通していた。他国の課題を知ることは、自国の現状を相対化して見直すきっかけとなる。共通の課題を共有し合い、互いに学び合う関係性を築くことが、今後の国際協力の基盤になると考える。



杉下絵里華：ネパールの農村と都市の格差、貧富の差、そして児童労働の現実。日本においても、私立と公立の教育環境や家庭の経済状況による機会の差が存在する。形は異なっても、両国の先生たちは「どうすればその格差を埋められるのか」という共通の課題に頭を悩ませており、それは決して他人事ではない。子どもたちにより多くの選択肢を与えるためには何ができるのか、未来に希望を持ってもらうにはどのような関わりが必要なのか。そうした問いは、国境を越えて共有できるものであり、共に考え、共に乗り越えていくべき課題だと感じた。「子どもは国の宝である」という認識は、日本でもネパールでも同じである。だからこそ、その宝をどう育て、どう守るのかを考えることは、教育者だけでなく社会全体の責任であり、国際的な協力や知恵の共有が不可欠だと強く思った。今回の研修は、今までつい目を背けてしまいがちだった課題を直視し、共に向き合うきっかけを与えてくれた。



丹羽真琴：ネパールでの研修を通して、現地の課題を知ると同時に、日本の状況についても考えさせられることが多くあった。特に、貧困の悪循環に直面する子どもたちや、それを改善しようと活動する団体の姿に触れ、教育や健康に格差が影響する現実の厳しさを肌で感じた。しかし、このような課題は日本にも共通して存在することに気づいた。児童労働をしている子どもや貧しい子どもたちに対して、「かわいそう」という感情で終わらせず、自分たちができることを見つけられる人を育てたいと思った。「子どもは国の誇り」という言葉が心に残り、あたりまえに教育を受け、夢をもち、幸せに生きられる未来の大切さを改めて考えさせられた。日本でもネパールでも目に見えない課題は多く、「人は幸せになるために生まれてきた」という世界共通の価値を忘れてはいけない。知らないことが一番の怖さであり、学べる機会を通して、私たちも目の前の子どもたちも、できることから行動していきたい。



野田琴乃：支援とは、支援の手が離れた後も、現地の人々が自分たちの力で継続できるものでなければならぬことを学んだ。ネパールの多くの人々が日本へ出稼ぎに来ている現状は、ネパールの経済が国外に大きく依存しているという課題の表れでもある。ネパールでのこの課題が解消された場合、日本に働きに来る人材が減ることになり、日本の経済にとっては労働力不足という新たな課題を生むのではないかと研修中に考えた。しかし、日本もかつて途上国として多くの援助を受けてきた歴史があり、やがてネパールや他国も「援助される側」から「援助する側」へと変わっていくだろう。日本の労働力不足といった新たな課題も、国を越えて支え合う中で乗り越えるべきだと感じた。こうした協力の連鎖が国ごとの課題を「地球全体の課題」として捉える感覚を生

み、それが地球規模で助け合える形に育っていくことこそ理想だと思う。その一歩として、少し離れたところで起きている課題も自分事として捉え、協力して行動しようとする生徒を育てられるよう働きかけていきたい。



橋本幹子：これまでの柱 1・2 を通して、日本とネパールがともに抱える課題に向き合うことの大切さを学んだ。ネパールでは教育や生活の格差、ジェンダーの不平等、自然災害への備えといった課題があることを実感した。特に地震の被害について語られたとき、日本の東日本大震災の記憶が重なり、「同じ痛みを経験した国同士だからこそ支え合える」と強く感じた。また、女性が学び続けることの難しさや、生活を支えるために海外へ出ざるを得ない若者の姿からは、ジェンダーや貧困が未来を左右している現実があることに気づかされた。こうした課題は遠い国の出来事ではなく、日本社会ともつながっている問題である。だからこそ、一方的に支援するのではなく、互いの知恵や経験を持ち寄り、共に乗り越えていく姿勢が求められる。課題を共有し合うことは、国境を越えて学び合う出発点である。子どもたちにも、「世界の課題は自分たちの課題でもある」と実感できるような学びを届けたい。



松本双葉：日本では、女性が当たり前のように働きながら子育てをしている。しかしその両立は容易ではなく、出生率の低下は社会的課題となっている。ところが、ネパールでのホームステイ先での暮らしや通訳のラクスマンさん、ACP でのお話を通して、女性は学ぶ機会が男性よりも少なく、家事は女性の役割という意識が根強く残り、働いても給料を受け取れないことがあると知った。そうした状況を肌で感じ、とても辛く思った。本人の想いとは関係なく、弱い立場に立たされることは、どの国であっても理不尽であると感じた。日本の女性には働く選択肢がある。職業も選べる。しかし、選択肢があるといっても日本の女性の多くは働かざるを得ない状況にあり、家庭をもつことと自己実現を両立させるのは簡単ではない。日本とネパール、それぞれの段階で異なる課題を抱えつつも、共通する部分もあるのだと実感した。今回の経験を通して、改めて「女性にとって過ごしやすい社会とは何か」を考えさせられた。



真野直亮：この研修を通して、「貧困の悪循環」や「貧困の連鎖」について知るとともに、その悪循環や連鎖を断ち切るための様々な活動を学んできた。日本の子どもの貧困率は9人に1人、ひとり親家庭に限ると半数近くが貧困に陥っていることから、それぞれの国の状況はあるものの共通の課題といえる。貧困から脱するための手立てとして、3つに分けられる。1つめは、「仕事」である。性別に関わらず、お金を稼ぐことができ経済的自立ができるようにすることや、製品や商品の価値が高まり、収入が増えるような技術を伝えることも大切な手立てとなる。2つめは、「学校」である。誰もが中等教育までを学べる機会を保障されていること、新しい能力や技術を学ぶための場所があることも道を切り開いていくために重要である。3つめは、「健康」である。自然環境や労働環境に配慮することや子どもたちが健全に成長していけるための環境整備についても学んだ。教員として教育課程の中でできる活動の1つとしてキャリア教育が重要なのだと今は考える。

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回における報告

- ◇ 海外研修受講者1人につき、開発教育指導者研修(実践編)のみに参加している受講者2~3人ずつ向かい合って座り、5分間×3回(席を替わって)、現地研修についての報告を行った。



● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2026 に向けた準備

- ◇ 「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2026」で行う「教師海外研修報告」及び「実践体験ワークショップ」の検討を、次の日程で行った。

第1回：2025年11月15(土) 10:00~12:00、13:00~16:00

第2回：2026年1月17(土) 10:00~12:00、13:00~16:00

● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2026 での報告

- ◇ 実践報告フォーラムでは、「教師海外研修報告」「実践報告(ポスターセッション)」「実践体験ワークショップ」で、海外現地研修や学校での授業実践について参加型で報告を行った。
- ◇ 「教師海外研修報告」では、同行ファシリテーター挨拶の後、写真や動画などを投影(P.38に抜粋掲載)しながら、ネパールでの学び、帰国後の実践という視点で報告を行った。
- ◇ 「実践報告(ポスターセッション)」では、実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム参加者へ42分間(14分×3セッション)の各自報告を行った。
- ◇ 「実践体験ワークショップ」では、受講者が実践したプログラムのうちの1つを2時間の一般向けに修正して、受講者がファシリテーターになって提供した。





海外研修報告の様子と投影資料 (抜粋)

V. 実践報告書

実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	テーマ	タイトル
1	伊藤 柚季	小学校6年生 (89名)	12	国際理解、環境	みんなで はなそう まちのこと みはまクリーンプロジェクト
2	垣内 望花	中学校1年 (224名)	4	人権問題、共生	あつったかい 世界・日本・学校・クラスへ ～共に生きる～
3	澤田 晃一	特別支援学校 高等部1・2年生 (4名)	7	国際理解、SDGs	ネパールの高校生は何の夢を見るのか
4	杉下 絵里華	小学校6年生 (62名)	18	国際理解、SDGs	ネパールからのメッセージ！ ぼくらの未来会議
5	丹羽 真琴	小学校6年生 (96名)	7	人権、国際理解	創ろう！みんなの世界・みんなの幸せ ♡
6	野田 琴乃	中学校1・2年生 (179名)	4	多様性理解、共生、 コミュニケーション	違いを知り、同じ願いへ
7	橋本 幹子	小年生～中学生 (27名)	2	異文化理解、 自己の確立、 コミュニケーション	ネパールへ冒険！お宝ゲット大作戦！ ～つながる・考える・伝え合う～
8	松本 双葉	小学校5年生 (34名)	9	多文化共生、 国際理解	咲かそう！ わたし・あなた・みんなの笑顔
9	真野 直亮	中学校1年生 (14名)	21	共生、貧困、 ソーシャル ・アクション	Personal is Political ～共生社会に向けた私たちの選択～

※ 次ページ以降の実践報告書には、授業実践を6時限以上行った場合は、主要な時限についてのみ掲載しています。

④みんなで ⑤はなそう ⑥ちのこと みはまクリーンプロジェクト

所属	愛知県美浜町立河和小学校	実践者	伊藤 柚季
対象	小学校6年生（89名）	実践日	2025年9月～12月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	12時間
テーマ	国際理解、環境		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールという国に関心を持ち、ネパールと日本に共通する課題を見つける。 ・プラスチックの行方を知り、人体や環境に及ぼす影響を考える。 ・美浜町の環境をよりよくするための手立てを考え、計画を立てる。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	「はじめまして！ネパール！」 ・ネパールはどんな国なのかを知る。(Google スライド) ・民族衣装や楽器などの実物を体験する。	【使用した教材】 ・ゆずき先生のネパール日記(スライド)
	2	「くらべて！ならべて！ネパール食べ物ランキング」 ・写真を見てグループごとにランキングを作る。【ダイヤモンドランキング】 ・1位の食べ物は選んだ理由も考えて、学級全体で発表する。 ・教師の体験談を交えた各写真の料理の説明を聞く。	
	3・4	「ネパールのキッチンをのぞいてみよう！」 ・調理方法や生ゴミの処理方法を知り、「へえ～！」や「なんで？」と思ったことをまとめる。【対比表】 ・対比表の中から環境に優しいポイントを見つけて発表する。(ポップコーン方式)	・ネパールで収集したグッズ ・ネパールで食べた食べ物の写真9枚
	5・6	「くらべてみよう！ネパールと日本のゴミ事情」 ・ネパールでのポイ捨ての様子を見て原因を考える。 ・日本の海や山の様子を見て、美浜町のゴミの現状に気付く。 ・ネパールと日本のゴミ回収の様子や分別について知る。	・美浜町の海岸(6か所)や道端の写真 ・動画「なるほどプラスチック」 (プラスチック循環利用協会「プラスチックのはてな～小中学生のための学習支援サイト～」)
	7	「どこへ行くの？プラスチックの一生」 ・身のまわりにあるプラスチック製品を見つける。【ブレーンストーミング】 ・見つけたものから、昔はプラスチックではなかったものに丸をつける。 ・プラスチックについて詳しく知る。【クイズ】	・DEAR 開発教育協会『プラスチックごみ 開発教育アクティビティ集』
	8	「プラスチックと私たち」 ・海洋ごみやマイクロプラスチックについて知る。【クイズ】 ・プラスチックが増えるとどうなるかについて考える。【派生図】	
	9～12	「主役はわたしたち！みはまクリーンプロジェクト」 ・自分たちにできることや周りを巻き込んでできそうなことを考える。 ・グループで1つプロジェクトの提案書を作成する。(半模造紙) ・作成した提案書を学年で審査し、各クラスの優秀作品を決める。	
	成果	最初はネパールと肯定的に出会い、徐々に現状や課題を話し合う流れにしたところ、児童がネパールに親しみをもち、課題を自分事として考えることができた。また、ネパールと美浜町の共通の課題を見つけさせることで、つながりを感じながら自分たちの住むまちをよりよくするための企画を考えることができた。	
課題	実践を行う中で、「ネパールの人と友達になりたい」「ネパールの人と話してみたい」など前向きな声が出た。学年全体で時間を調整し、オンラインでネパールの人と実際に交流する機会を設けることができると学びが深まったと思う。		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の1～4年生にも第1時の授業を行い、他の先生方にも見ていただいた。 ・町内の教員に向けて学習会を開き、ネパールや教師海外研修について発表した。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「はじめまして ネパール」

この時限のねらい

- ・写真や動画、教師の体験談を通してネパールに肯定的に出会う。
- ・日本とは違う文化や習慣をもっと知りたいという思いをもつ。

1 子どもの活動の流れ

① ゆずき先生のネパール日記

- ・クイズを交えた教師の体験談を聞き、ネパールという国に興味をもつ。
- ・民族や宗教、調理方法、食べ方などの写真や動画から日本との共通点や相違点を探す。
- ・自動車メーカーや日用品、食料などの写真を見て、日本から遠く離れた国であるネパールとのつながりに気付く。

② ミニゲーム

「4つのコーナーゲーム」

- ・ところでネパールってどこにあるの？
- ・食べてみたいものはどれ？
- ・さわってみたいものはどれ？



さわってみたいものはどれ？



③ ゆずき先生のお土産を見てみよう

- ・教師がネパールで収集した楽器、服、スパイス、その他のグッズなどを体験する。
- ・実際に見る、触る、匂いを嗅ぐ、身に付ける、試してみるなどの体験を通してネパールにより一層興味をもつ。

2 子どもの活動の成果・反応

◇興味津々で教師の話聞いており、クイズや体験を通してネパールに肯定的に出会うことができた。

◇「実際に行ってみたい」「ネパールの人と仲良くなりたい」などの発言が多かった。

1 ネパールの写真や動画を見たり、実際に本物をさわったりしてどんな気持ちになったかな？自分の気持ちに近いものを3つをえらぼう！

おどろいた	すごい	なんで？どうして？	いいな
行ってみたい	おもしろい	もっと知りたい	もっと見たい
わくわくする	楽しい	すてき	そのほか
食べてみたい	仲良くなりたい	一緒にやりたい	

2 その気持ちをえらんだ理由を書いてみよう！

何か日本とちがう文化や物があっておもしろいから
ネパールのものをさわって、おもしろい
やつやたいこがあるのしかたとしてもおどろいた。
(こうやってつかうんだとおどろいた。)



3 使用した教材

<教材1> ゆずき先生のネパール日記

<教材2> ネパールで購入したもの(楽器、服、スパイス、お香など)

<教材3> ふりかえりシート(参照:2020年度 教師海外研修ガイドブック JICA 中部)

2-4 時限目「調理をきっかけに環境を考えよう！」

この時限のねらい

- ・ネパールのキッチンの様子や調理方法を見て日本との共通点や相違点を見つけ、それぞれの国のよさに気付く。
- ・ネパールの生活の中から環境に配慮した調理方法やモノを無駄にしない習慣を見つけ、自分たちの生活に生かす方法を考える。

1 子どもの活動の流れ

① くらべて！ならべて！！ネパール料理ランキング

- ・教師がネパールで食べた料理の写真を見て、グループごとに話し合ってランキングを作る。

【ダイヤモンドランキング】

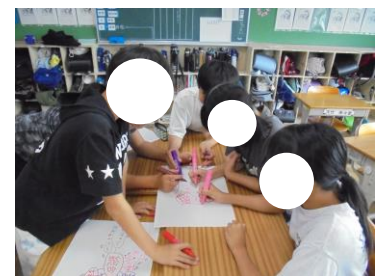
- ・1位の料理は選んだ理由も考えて、学級全体で発表する。
- ・教師の体験談を交えた各写真の説明を聞く。

② 「ネパールのキッチンのをぞいてみよう！」

- ・調理方法や生ゴミの処理方法を知り、「へえ～！」「なんで？」と思ったことを個人でまとめる。【対比表】
- ・対比表の中から環境に優しいポイントを見つけて学級全体で発表する。(ポップコーン方式)
- ・ふりかえりで自分たちの生活の中でも生かせる工夫を考える。

③ もしも…環境に優しくない人が増えたら？

- ・環境のことを考えない人が増えたら、世界はどうなってしまうかグループで考える。【派生図】
- ・グループで出た意見の中から最悪な結果2つにドクロマークをつける。さらに、自分とかかわりのある問題にはイニシャルを書く。
- ・他のグループに考えを見に行き、「なるほど」「いいね」と思った考えに☆をつける。(ギャラリー方式)



2 子どもの活動の成果・反応

◇グループで話し合いながらランキングを決めることで、全員が自分の考えを伝え合うことができた。

写真に関する教師の体験談を伝えたことで料理への関心がより深まった。

◇ギャラリー方式で紙を共有することで時間内に多くのグループの考えを見て☆をたくさん書くことができた。

自分の考えに☆が書いてあることに気付くとうれしそうな表情を浮かべていた。

3 使用した教材

<教材1> ゆずき先生のネパール日記

<教材2> ネパールで食べた食べ物の写真9枚

7・8 時限目「どこへ行くの？プラスチックの一生」「プラスチックと私たち」

この時限のねらい

- ・プラスチック製品が作られる工程やリサイクル方法を知り、プラスチックのよさと課題に気付く。
- ・プラスチックが環境や生態系に与える影響を知り、プラスチックごみを減らす方法を考える。

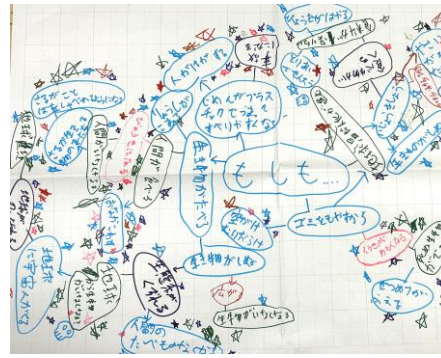
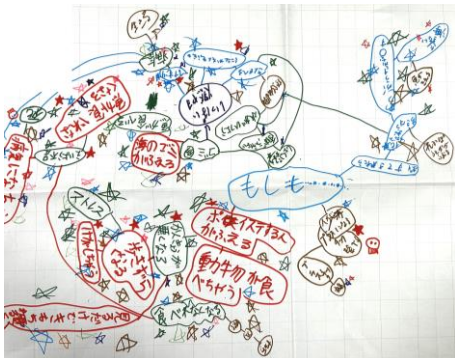
1 子どもの活動の流れ

① どこへ行くの？プラスチックの一生

- ・身のまわりにあるプラスチック製品を見つける。【ブレインストーミング】
- ・見つけたものの中から昔はプラスチックではなかったものに丸をつける。
- ・動画で身の回りのプラスチック製品やそれらの生産工程を知る。
- ・グループ対抗でプラスチックに関するクイズを通して、「大量生産・大量消費」や「分解に時間がかかる」などの課題を知る。

② プラスチックと私たち

- ・海洋ごみやマイクロプラスチックについて知る。【クイズ】
- ・プラスチックが増えるとどうなるかについて考え、最悪な結果2つにドクロマークをつける。【派生図】
- ・半模造紙を回し読みしてすべてのグループの考えを確認し、「なるほど」「いいね」と思った考えに☆をつける。



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇動画やクイズで楽しみながら学ぶことで意欲的に授業に参加していた。
- ◇派生図で最悪な結果を考えるとときに、プラスチックの増加によって起こる問題は人類や生物の命にかかわる重大な問題であることに気付いていた。「リサイクルできるものはリサイクルをする」「プラスチック製品を使いすぎない」など、自分たちの生活と関連付けて考えることができた。

3 使用した教材

- ・動画「なるほどプラスチック」
(プラスチック循環利用協会「プラスチックのはてな～小中学生のための学習支援サイト～」)
- ・DEAR 開発教育協会『プラスチックごみ 開発教育アクティビティ集4』

9-12 時限目「みはま クリーンプロジェクトを企画しよう」

この時限のねらい

- ・学習のまとめをし、美浜町の環境をよりよくするための取組を考える。
- ・地域のために海岸清掃をし、ゴミの分別を通してこれからの自分の行動を考える。

1 子どもの活動の流れ

① 自分が興味・関心のある課題を見つけよう！

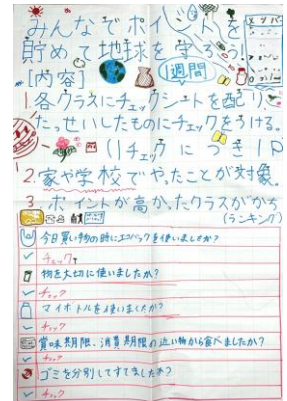
- ・グループで話し合っ「ゴミ」から連想されることを紙に書く。【ブレインストーミング】
- ・グループの意見の中で自分たちが特に興味のある課題を選ぶ。

② 主役はわたしたち！みはまクリーンプロジェクト

- ・自分たちが興味のある課題に関して、美浜町のために自分たちができることや周りを巻き込んでできそうなことを考える。
- ・グループで1つプロジェクトの提案書を作成する。(半模造紙)
- ・作成した提案書を学年で審査し、各クラスの優秀作品を決める。

③ 海岸清掃をしよう！

- ・実際に小学校の近くの海岸に徒歩で行き、ゴミ拾いと分別を行う。
- ・燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミの3種類に分けて砂浜のゴミ拾いをし、学校に帰ってきてから混ざっているゴミや汚れているゴミを洗って分別し直す。
- ・活動を振り返り、気付いたことや自分ができていることを考える。



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇自分たちが興味のある話題を企画のテーマにすることで、意欲的に調べ学習をしたり意見交換をしたりしていた。
- ◇学級や学校だけでなく、家庭や地域（美浜町全体）など、グループによって規模は様々であったが自分たちができていることを探して企画書にまとめることができた。
- ◇クラスごとに優秀作品を選ぶことを伝えると、よりよい企画にするために内容だけでなくタイトルやイラストにまで工夫を凝らして企画書を作成していた。

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対 象	小学校 1～4 年生（270名）	実践日	2025 年 9 月～10 月
実践教科	総合的な学習の時間・社会科・生活科	時間数	6 時間
実践内容	<p>◇6年生の授業実践の第1時で行った「はじめまして！ネパール」を学年に合わせて実施した。学級単位で行った学年と学年単位で行った学年があったため、実態や実施場所に合わせて内容を少し変更しながら行った。</p> <p>◇授業の最後には振り返りシートを配付し、授業を通してどんな気持ちになったかを表してもらった。</p> <p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネパールという国に興味をもち、日本との共通点や相違点に気付く。 ・日本とネパールのよさを見つけ、世界に対する考え方を広げる。 <p>児童の活動</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ゆずき先生のネパール日記 ② ミニゲーム（4つのコーナーゲーム） ③ ゆずき先生のお土産をさわってみよう ④ ふりかえり <p>子どもの活動の成果・反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業後に学校内ですれ違うと「ナマステ」とあいさつしてくれる児童や、さらに聞きたいことを6年3組の教室まで質問をしに来てくれる児童がいた。 ・ふりかえりシートでは「ネパールの人と仲良くなって一緒に踊りたい」「もっとネパールのことを知りたい」という発言が多かった。 		



<その他の実践その②>

対 象	美浜町内の若手教員	実践日	2025 年 11 月
実践教科	平和学習会	時間数	1 時間
実践内容	<p>◇「貧困の輪」を通して貧困の原因を考え、それに対する支援を話し合ってもらった。</p> <p>◇教師海外研修で学んだことや本校での授業実践を紹介した。</p>		



＜周りへの波及活動＞

◇本校の教職員へお土産とともに自作のお便りを配付した。

それを見てネパールで体験したことをさらに質問して下さる先生や授業を実践する場を提供して下さる先生がいた。

◇知多地区の教員へ向けて実践報告を行った。国際理解教育や開発教育に興味をもって下さる先生方がいた。



2 実践の総括

◇2学期から6年生3クラス分の総合的な学習の時間を担当したため、学期を通して計画的に実践を行うことができ、授業のつながりの観点からも有意義な実践となった。

◇3クラスとも同じ内容の授業実践を行ったが、クラスの雰囲気や実態によって児童の反応はさまざまであった。6年3組では、日ごろから担任がネパールのお話をしていたり他の授業の中でブレインストーミングや派生図に取り組んでいたため、他のクラスよりも活発に活動を行うことができた。

3 次の実践者へのエール

◇教師海外研修に参加する前にある程度の授業のビジョンや実践のテーマを決めておくと、それに沿った写真や動画を収集することができると思った。私自身、ネパールで学ぶ中で自分が一番印象に残った活動や場面を実践のテーマにしようと思っていたため、教材をつくる際に必要な写真を探すことに苦労した。

◇写真や動画はもちろん、実物があると児童の学びはさらに深まることを実感したため、現地で教材収集をしておくよと思った。私は自分が集めてきたものを児童に見せたが、JICAのネパールボックスを活用するとさらに授業の幅が広がると思った。


◇五感で感じたことは生き生きと話することができるため、とにかくたくさんの方の経験をして授業実践に生かしてほしいです！

4 参考文献・資料

- 1) 独立行政法人国際協力機構 中部センター『2020年度 教師海外研修ガイドブック』(2021)
- 2) DEAR 開発教育協会『プラスチックごみ 開発教育アクティビティ集4』(2020)
- 3) 動画「なるほどプラスチック」
(プラスチック循環利用協会「プラスチックのはてな～小中学生のための学習支援サイト～」)

以上

あつったかい世界・日本・学校・クラスへ～共に生きる～

所属	小牧市立味岡中学校	実践者	垣内 望花
対象	中学校1年（32人×7クラス）	実践日	2025年11月～12月
実践教科	総合的な学習の時間・学級活動・道徳	時間数	4時間程度（他クラスも実施）
テーマ	人権問題・共生		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他文化(ネパール・日本)の異なる点、同じ点を比較することで世界の視点を広げる。 ・ 人権週間中に人権問題について触れることで、人権を身近に感じられるきっかけにする。 ・ 世界の人権問題を知り、子どもの権利条約から、日本の子どもの人権についても考える。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 豊かな社会にとって大切なこと〈自分にとっての豊かさとは〉 ① 「豊かな社会にとって大切なこと」シートから自分にとっての豊かさを考える。9枚選ぶ ② グループで共有を行い、自分の選んだ項目を9枚から5枚に絞る。 	開発教育協会 (DEAR) ・豊かさと開発 ・豊かさランキングの視点5種
	2	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 豊かな社会にとって大切なこと〈違う立場で考えよう〉 ① ネパールクイズから世界を感じる。 ② 「日本の子供達、途上国の若者、社会的マイノリティ、自然や資源にとって、日本が豊かな社会であるために」5つの視点で前回の「豊かな社会にとって大切なこと」シートを記入する。5つ選ぶ。 ③ 同じ視点、異なる視点で選択したカードを見ながら共有をし、新しい気持ちに触れる。共有の中で感じた違いや共感に気付く。 ④ 「もしも無関心だったら・・・」【派生図】【ギャラリー方式】 	
	3	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 人権って何・・・？〈多文化共生から考えよう〉 ① ネパールクイズ 日本との違いは？ <ul style="list-style-type: none"> ・ 他文化を知る。良い違い、よくない違いについて考える。動画を見せ、背景を知る。→交通量、児童労働など ② CWIN のインタビュー動画から児童労働について考える。 ③ 人権の資料を読む。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 世界の人権問題、子どもの権利条約、身近な人権侵害(偏見・差別) ④ 「もし、人権が守られなかったら・・・」【派生図】【ギャラリー方式】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 状況だけではなく、その時の気持ちや感情も想像する。 ⑤ このクラスって人権守られている？:守られていると思う状況を考える。 	ロイロノート ・共有ノート 〈NIED 資料〉 ・差別の背景 ・人権とは ・日本における人権重点課題
	4	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 人権を身近に ① 道徳:「ちがいについて考えよう」から、公平・平等について考える ② 「みんなが人権を守っていくために・・・」【派生図】【ギャラリー方式】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 改めてこのクラスって人権守られている？どんな違いが大切？「違い」を守っていくためには？違いを尊重していくためには？学級目標や今までの学級課題と照らし合わせる。 	・道徳の教科書
成果	人権週間で取り扱い、道徳の授業を含めて教科横断的に人権について授業を行ったことで、生徒たちの興味や考える視点が変わっていくのを感じた。また、実際にわたしがネパールで見えてきた様子を動画で見せたことで世界と日本という視点で人権を考えるきっかけになった。国際的な背景や行動背景を知ることで多面的に考える生徒もいて、新たな気づきの一つになったと思う。		
課題	異文化や世界の人権問題から人権の学習に繋がったことで、世界の人権問題と身近な人権問題を切り離して考えてしまった。生徒たちの人権の知識が少ないことや、世界へ向けた視点が少ないことを教師側が理解をし、より身近に感じられるように例を提示することや、共通点から考えるなどの手立てを考えるべきだった。		
備考	CWIN の動画が、児童労働によるものだったため、事前の準備では考えていなかったが、子どもの権利条約を生徒に配布することにした。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「自分にとっての豊かさを考えよう。」

この時限のねらい

- ・「豊かさ」について考える。
- ・自分自身の価値観や考えを明らかにする。

1 子どもの活動の流れ

- ① 「豊かさ」という言葉を聞いて考えを膨らませる。
- ② 自分にとって「豊かな社会にとって大切なこと」を読む
 - ・〈自分にとって〉豊かであるとはどういう状態か考え、もっとも当てはまる9枚を選ぶ。
- ③ グループで共有を行い、自分の選んだ項目を9枚から5枚に絞る。
 - ・理由を含めて共有する。考えを変えていいことにする。
 - ・5枚に絞った後、再び共有を行う。
- ④ 本時のふり返しを行う。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ グループ活動を通して「自分が大切でないと思っていたことも、人によって大切なことが違う」ということに気付いていた。
- ◇ 子どもたちの「豊かさ」の定義が曖昧で、環境保護だと思っていた生徒が多くいた。「差別とかも豊かさの一つであると気付いた」という声があった。
- ◇ グループで共有を行ったため、自分と級友の選んだものを比較する機会があった。その時に、「級友の選んだ理由を聞けば聞くほど考え方は人それぞれで、反対や否定してしまうのは違うと感じた」という反応があった。

自分にとっての豊かさを考えて、友達の考えも聴いて感じたこと、考えが変わったことは？

はじめの自分にとっての豊かさは自然環境とか、資源を大切にすることというところに目を向けて考えていたけど、班の人の意見を聞いたら、環境とかも大切だけど、自分たちの豊かさをも大切なんじゃない？という意見を聞いて確かにと思いました。

自分にとっての豊かさを考えて、友達の考えも聴いて感じたこと、考えが変わったことは？

自分のことばかりを考えていたけれど友達の意見を聞き地球やほかの人のこともきちんと考えることも重要なんだなと思いました。地球にやさしくしたりして将来につながることが大切だと言っていたしそういうところから自分にとっての豊かさを生み出していけるんじゃないのかなと思います。

自分にとっての豊かさを考えて、友達の考えも聴いて感じたこと、考えが変わったことは？

自分にとって豊かさは環境や自然を守れて、動物たちや人間が共存できて、自由に暮らせて安全なことが自分にとって豊かさだと思いました。けれど意見を聞いて差別や〇〇だからだめなどもなくしていればもっと豊かになると思いました。

3 使用した教材

<教材1>「豊かさと開発」(開発教育協会(DEAR))

2 時限目「違う立場で豊かさについて考えよう。」

この時限のねらい

- ・ 前時で選択したカードをふり返り、視点を変えて選択をすることで考えを深める。
- ・ 同じ質問でも、考える視点が違うことで、求めることが異なることに気付く。

1 子どもの活動の流れ

- ① 「豊かな社会にとって大切なこと」を5種類の視点でカードを選ぶ。
 - ・ 〈日本の子どもたちにとって〉〈途上国の若者にとって〉〈社会的マイノリティ〉〈自然や資源にとって〉〈日本が豊かな社会であるために必要なこと〉の5つの視点でカードを選択する。
 - ・ それぞれの立場で、グループ内でカードを5枚選ぶ。
 - ・ 理由を明確にして選択をする。
- ② 同じ視点、異なる視点で選択したカードを見ながら共有をし、新しい気付きに触れる。
 - ・ 選んだカードの理由を明確にする。
 - ・ その理由を自分の言葉で、伝える。
- ③ 共有する中で、感じた違いや共感した部分をふり返る。
 - ・ 元のグループで思いや考えを共有する。
 - ・ 自分自身で考えたことをふり返る。
- ④ 「もしも無関心だったら・・・」というテーマで派生図を実施する。

【派生図】【ギャラリー方式】

 - ・ みんなが無関心だったらということを学校や家庭を思い浮かべてグループごとに派生図を書く。
- ⑤ 本時のふり返りを行う。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「前時で感じた豊かさと価値観や感じ方が大きく変化することが面白かった。」という生徒の声があった。
- ◇ 「立場が違くと、欲しいものや求めることが大きく違う。」ことに気付くきっかけになっていた。大人と子供、教師と生徒で変化があることにも触れていた。
- ◇ 立場が同じでも違うこともあり、立場が違くとより大きく違いがあることに気が付く生徒が多かった。
- ◇ 鬼が「心の豊かさ」について話しているJTのコマーシャルを思い出して話している生徒もいた。「豊かさが人それぞれ違うってこういうことか。」と抽象的だった事柄が具体的になった様子が見られた。

3 使用した教材

- ＜教材1＞「豊かさと開発 Development for the future」(開発教育協会(DEAR))
- ＜教材2＞「豊かさランキングの視点5種」(開発教育協会(DEAR))

3 時限目「豊かさから、人権が守られなかったら」全7クラス授業実践

この時限のねらい

- ・ 異文化理解や、多文化共生という視点から「違い」について考える。
- ・ 人権資料を読み、人権侵害について想像し、人権について考える。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールクイズ

- ・ 日本の写真かネパールの写真なのかクイズを行う。
- ・ 豆知識や、文化も伝えながら写真を見せる。
- ・ 気になった写真があれば動画も見せる。(交通量、授業の動画など)

② 「日本とネパールのよい違い?よくない違い?」で写真を分類する。

- ・ 自分の視点で分類した後に、グループで話しながら分類をする。
- ・ 理由を明確にし、分類する。
- ・ 選択に迷った写真は、真ん中に置くように伝える。
- ・ 子どもの困り感(分類に困った写真)から③の活動に繋げる。

〈資料1〉



③ お金をねだる子どもから、児童労働の件について考える。

- ・ CWINの動画を見せる。
- ・ 動画を見て何を感じたかグループで共有を行う。
- ・ 改めて理由を明確にして「よい違い、よくない違い」で分類を行う。

④ 人権についての資料を読む。〈参考教材使用〉

- ・ 人権について大まかに知る。イメージを膨らませる。
- ・ 子どもの権利条約から、子どもについての人権に触れる。
- ・ さっき見たお金をねだる子どもの動画から、もう一度人権という視点で動画を見る。
- ・ 〈差別〉や〈偏見〉という言葉から人権侵害が身近にあることも触れる。
- ・ 身近な自分事にして考えられるように声をかける。

⑤ 「もし人権が守られなかったら」というテーマで派生図を実施する。【派生図】【ギャラリー方式】

- ・ 分からない場合は資料をみて、学校や家庭を思い浮かべてグループごとに派生図を書く。

⑥ 学級って人権守られている?

- ・ グループで聴き合う。
- ・ この時間は全体では共有は行わず、本時の学習を踏まえた自分自身の考えを大切にもつことを伝える。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 人権週間に人権問題について触れ、ぴったりの時期に行ったことで子どもたちの興味があり、反応が大きかった。
- ◇ この時期に社会の授業で世界情勢のことをやっていたため、教科横断的な視点で人権について考えることができた。
- ◇ 今まで人権侵害だと思っていなかったことも、人権の資料を配布したことで人権侵害について具体的に知る機会をつくることができた。

- ◇ 人権に対する知識を増やしたうえで派生図を行った。そのため、人権がない世の中を具体的にイメージして考えながら活動する様子が見られた。
- ◇ ギャラリー方式で他のグループの派生図を見て「なるほど！」と声を上げている場面があった。また、気になった言葉にマークして回ったことで、自分の席に戻ってきたときにマークが多いと共感してもらえた気持ちが大きくなってとても嬉しそうな様子が見られた。



【ふり返り】

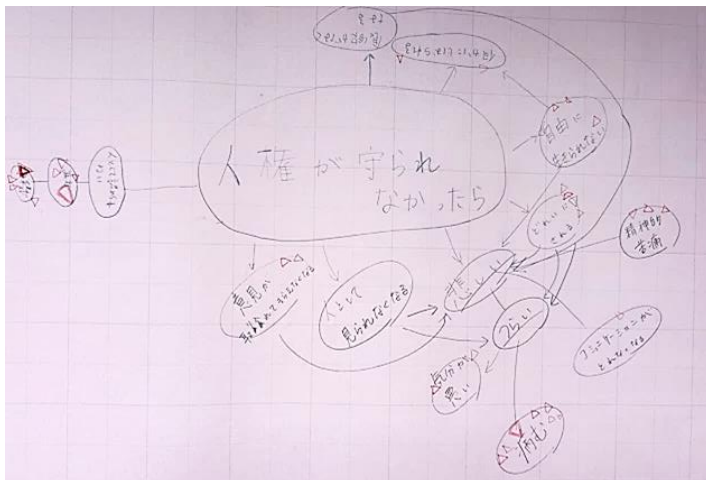
これから自分が人権が守られるように大切にしていけることは何かな。

人に左右されないように、自分の意見を持つことが大切だと思いました。自分の意見を発信することも大切だと思ったけど、たくさんの人の前で発言するのは難しいと感じたので、発言しやすい環境を周りの人が作ることも大切だと考えました。自分の意見を押し付けたりするのは良くないと思うので、人の意見を尊重する事も大切だと思いました。

これから自分が人権が守られるように大切にしていけることは何かな。

相手に守ってもらえるようにするにはまず自分が相手を大切にしないといけないと思うから、まず相手のいない場所でもいる場所でも相手の偏見、差別などをしない、それをたくさんの人にしてあげばいろんな人に自分が逆に人権を守られるようになると思った。からそういう人の役に立って相手にとっていいことをしてあげたいと思いました。たとえ相手がどんなにムカついてイライラしても、思ったことを言わなければ、その場の雰囲気が悪くならないし、自分が落ち着いて冷静になれるんじゃないかなと思いました。自分の人権が守られる前提じゃなくて、守ってもらえるようにするために考えたらいいんじゃないかなと思いました。

【派生図】



3 使用した教材

<教材1>「人権とは何か」(NIED・国際理解教育センター作成資料)

<教材2>公益財団法人日本ユニセフ協会:学習資料「子どもの権利条約 第1~40条抄訳一覧」

4 時限目「人権を身近に。(道徳)」

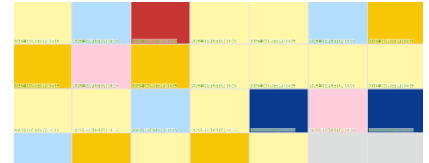
この時限のねらい

- ・ 教科横断的に人権について考えることで、視点を広げる。
- ・ これまで学んできた人権を踏まえて、この学級について考える。

1 子どもの活動の流れ

① 前時の資料や授業から、自分の学校生活、家庭生活は人権が守られていると思う？ 〈資料2〉

- ・ ロイロノートで色分けカードを提出する。
- ・ 守られている：青カード、守られていない：赤カード、分らない：黄色カード



② 平等と公平について考える。

- ・ 道徳資料、イラストから考える。

③ これから違いを尊重するためには？

- ・ グループで聴きあう。
- ・ 人権資料を根拠に話をしてみる。
- ・ 前時の派生図も資料として考えられるように声をかける。

④ この学級は人権が守られていると思う？

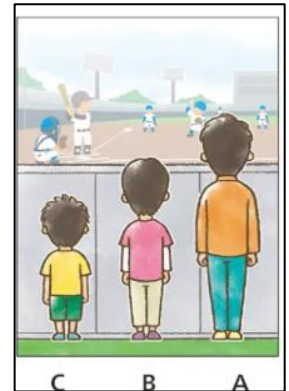
- ・ 守られているとこと、守られていないところがあることに気付く。

⑤ 「みんなが人権を守っていくために…」というテーマで派生図を実施する。

【派生図】【ギャラリー方式】

- ・ よりよくしていくためにどんな行動が具体的に必要か考える。

〈資料3〉



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「豊かさ」とは違って、「公平・平等」で人権について考えることで人権の視点が広がった。
- ◇ この4時間の実践では、「あつったかいクラス」をねらいとして授業を行った。今まで学んできた人権を通して生徒たちが自分の学級を客観的に考える機会になった。違いは大切だけれど、その違いをどう認めてどう生きていくのかを考えていく中で、他者と共存、共生していくことをより深く考えるきっかけになった。外国籍が多くいる地区だからこそ世界に目を向けて人権問題を考えられたことはよかった。
- ◇ 生徒のふり返りとして、「学級では人権は守られている気がするけれど、今回学んだ人権を意識して学んだことを生かすことで、より過ごしやすいあたたかいクラスになると思う」という声があった。学級経営を人権という視点で考えることで、学級の現状理解や、今後の学級課題が明確になったと感じた。
- ◇ 私の学級は、今までは他人に興味がない生徒が多いように感じていたが、徐々に「あたたかい学級」ということを考えるようになった。今回の授業が少しのきっかけになったのではないかな。

3 使用した教材

＜教材1＞『ちがいについて考えよう』教育出版とびだそう未来へ中学道徳1

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対象	本校保護者・職員・全校生徒	実践日	2025年11月
実践教科	特別活動・総合的な時間	時間数	3日間
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 授業とは別に、文化祭の展示スペースを利用して「ネパール特別展示」を行った。展示スペースの一角に、ネパールボックスの中身と、自身で作成したネパール訪問の掲示物を作成し、展示した。 ◇ 保護者や教職員も見ることができる機会だったため、広く周知することができた。保護者からは、「先生ってこういう研修があるんだ!」というように関わりがない保護者も興味をもってもらえる機会になった。 ◇ 職員にも掲示物について聞かれることがあり、ネパールで学んできたことやネパールという国についての興味をもってもらえるきっかけになった。 		

<その他の実践その②>

対象	中学校1年生(32名✕7クラス)	実践日	2024年11月~12月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	各1時間
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 3時間目の授業を各クラスで行った。 ◇ 人権週間にネパールの異文化という視点から、人権に繋げて話をした。 ◇ 社会や道徳で教科横断的に考えられる単元があり、時期をそろえて行った。 		

<周りへの波及活動>

- ◇ 自分の学級だけでなく、学年全クラスに授業を行った。
- ◇ ネパールボックスを使用して、ネパールの紹介や、自身の研修の概要を伝えた。
- ◇ 研修のチラシや研修報告を貼り、周知を行った。

2 実践の総括

◇今年度、研修を通して国際教育について深く学び、初めて国際教育を軸にした授業を行った。参加型の学習を取り入れたことで、子どもたちが仲間との関わりの中で考えを広げていく姿が多く見られた。社会科で学んだ知識を踏まえて国際理解について考えるなど、教科横断的な視点や発言も増え、思考が深まる場面が多かった。また、今年度は教師海外研修に参加し、ネパールで文化の違いや人とのつながりだけでなく、「共に生きること」の大切さを強く実感する経験を得た。現地で撮影した写真や、私自身が写っている写真、動画、インタビュー映像など、リアルな体験を子どもたちに示したことで、学習への興味・関心が大きく高まった。さらに、国際的な共生は、外国籍の児童が多く在籍する本校にとって重要な課題であると改めて感じた。今回の経験は、国際社会における共生だけでなく、学級の仲間と「共に生きていく」ことの大切さを伝えるきっかけにもなった。加えて、人権問題を学級経営の視点と結びつけたいというねらいのもと授

業を行い、学級目標と照らし合わせて自分たちの姿をふり返る機会をつくった。自分たちの課題を見つけることで、よりよい学級を目指す第一歩につながったと感じている。

◇今回の実践の課題として、実際の写真や動画は子どもたちの大きな興味につながると感じた一方で、授業の都合上、現地の人と直接つながる機会をつくることができなかつた点が挙げられる。また、中学校勤務である私は、授業時間の確保が非常に難しく、限られた時間の中でどのように深い学びへとつなげていくかを試行錯誤した。

3 次の実践者へのエール

◇ 開発教育指導者研修で学んだ視点をもってネパールに行くことができたため、より広い視野で教員海外研修に参加することができた。そして、帰国後すぐに実践できる場があることや生きた教材で授業ができたことは子どもたちにとって非常によい教育活動に繋がった。ネパールでの経験やそこで感じたことを自分の言葉で語れることは、大きな強みになったと感じている。生の声や生の視点を大切にしながら、今回の経験を伝え続けていくことが私の使命だと強く思う。国際理解教育に関心をもつ教員がさらに増え、未来の子どもたちが国際的なつながりを肯定的に学んでいける場面が広がってほしい。そして私自身は、来年度も引き続き実践を継続し、今年度に十分取り組めなかつた部分に力を注いでいきたい。共に、子どもたちへ大切な学びを伝え続けていきましょう。

4 参考文献・資料

<教材1>『豊かさの開発 Development for the future』『豊かさランキングの視点5種』
(開発教育協会(DEAR))

<教材2>「人権とは何か」(NIED・国際理解教育センター作成資料)

<教材3>公益財団法人日本ユニセフ協会:学習資料「子どもの権利条約 第1~40条抄訳一覧」

<教材4>『ちがいについて考えよう』教育出版とびだそう未来へ中学道徳1

以上

ネパールの高校生は何の夢を見るのか

所属	愛知県立ひいらぎ特別支援学校	実践者	澤田 晃一
対象	高等部 1、2 年生（4 名）	実践日	2025 年 7 月～2026 年 1 月
実践教科	歴史総合	時間数	7 時間
テーマ	国際理解、SDGs		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールと肯定的に出会うことで、海外の出来事に関心をもつ。 ・ネパールの事例を通して現代の課題について知り、既習内容との関連に気付く。 ・日本と世界の課題との関連について考え、その解決方法や、自分にできることを発表する。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	◆ネパールと肯定的に出会うために 「ネパールってどんな国？」【プレゼンテーション、ブレインストーミング】 ・テーマごとにネパールについて調べ、お互いに教えあう。 ・ネパールの人に聞きたいことをリストアップしてアンケートを作成する。	・ワークシートは Excel で作成し、Teams 内で共同編集しながら進める。
	2	「ネパールの人に日本を紹介しよう」【イメージ図】 ・ネパールの人に日本を紹介するための絵を描く。	
	3	◆日本とのつながりや同一性に気付くために 「ネパールってどんな国？シーズン2」【クイズ、分配円】 ・生徒が調べた内容を基に、写真や動画、クイズでネパールについて知る。 ・アンケート結果の分析を行う。	・現地でとったアンケート
	4	「ネパールってどんな国？シーズン2」【フォトランゲージ、対比表】 ・現地で収集した資料(※)から、共有したいものを選んで発表しあう。 ・日本とネパールの共通点と相違点をまとめる。	・(※)現地で撮影した写真や動画、統計データ
	5	◆共通の課題について共に考え、共に越える姿勢を育てるために 「ネパールの課題は何だろう」【ブレインストーミング、KJ法】 ・ネパールの課題は何か考え、日本との共通点を見つける。 ・ネパールの課題がそれぞれ SDGsのどの項目に当てはまるか分類する。	・現地で撮影した写真や動画、統計データ
	6	「課題のその先に」【派生図、シミュレーション】 ・課題を放置するとどんな世界になるか予想し、自分との関連に気付く。 ・「児童労働」を含んだカードで貧困の悪循環をつくる。	
	7	「課題の解決と自分にできること」【アイデアの共有、行動計画、ギャラリー方式】 ・既習内容や調べた内容を根拠として、解決方法を提案する。 ・課題解決の為に自分にできることを考え、発表する。	
成果	ネパールの子供たちと絵を交換したり、質問に回答してもらったりすることで、双方向的な関わりが生まれ、海外を身近に感じる事ができた。肯定的に出会う経験を通して、ネパールの課題に対してより深く考える姿が見られた。既習内容と関連付けながら考察したり、課題に対する解決方法を主体的に考えたりすることができた。現代の諸課題を身近に捉え、自分にできる行動を考え、表現する姿が見られた。		
課題	教科の中での授業実践であったため時数に限りがあり、テーマに十分迫り切れなかった部分もあった。生徒の実態に応じて、総合的な探求の時間や生活単元学習で計画をすると幅広く内容を取り扱えると感じた。		
備考	対象生徒は肢体不自由であり、タブレット端末と Microsoft Teams を使用して、資料共有やワークシートの記入、参加型プログラムの進行を行った。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「ネパールってどんな国？」

この時限のねらい

- ・ネパールについて分担して調べ、教えあうことで関心を高めたり、協働的な学びの力を育てたりする。
- ・一人ひとりの人に対象を絞ったアンケートの作成を通して、海外にいる他者を身近に意識し、肯定的に出会うための準備をする。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールについて調べよう。

- ・ネパールという国について知るために、何を調べればよいか案を出す。【ポップコーン方式】
- ・出された意見をもとに、調べるテーマを整理・分類し、それぞれ興味のあるテーマを一人一つ選んで調べ学習を行う。

② 調べた内容を教えあおう。

- ・各生徒が調べた内容を PowerPoint にまとめ、Teams 内で共有して発表する。(生徒作成資料 1) 【プレゼンテーション】

人種
多民族国家

大きく分けてインド系のアーリア系民族と中国からのモンゴル系民族
具体的な民族としてバルバテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール

バルバテ・ヒンドゥー: 高地に住むヒンドゥー教徒の民族
マガル: 西部・中部山岳地帯に居住する民族
タルー: 南部平原地帯に居住する民族
タマン: 中部山岳地帯に居住する民族
ネワール: カトマンズ盆地に居住する民族で独自の文化を持つ
シェルバ: ヒマラヤ山脈の登山ガイドなどで知られる民族

100以上のカーストや民族が存在すると言われている
カーストと民族を「ジャート/ジャーティ」という言葉で括ってる

生徒作成資料1

ネパールの楽しい行事は? ● ネパールの自慢できることは何? ● ネパールは何が有名?

● ネパールの美味しい食べ物は何?

● 好きな食べ物 ● 好きなこと ● 暇な時何してる ● 好きな場所 ● 行ってみたい場所(海外) ● やってみたいこと ● 流行っていること ● 日本のイメージ ● 好きな教科 ● なりたい職業 ● 日本のアニメや番組見たことあるか ● 好きな日本語 ● 家では何してる ● 家族構成 ● 好きな教料は何 ● 好きな日本語 ● 家では何してる ● 家族構成

生徒作成資料2

③ ネパールの人にアンケートを取ろう。

- ・「ネパールという国全体」についてではなく、「ネパールに暮らす一人の人」をイメージし、その人個人のことを知るためには何を聞けばよいかという視点で質問を考える。(生徒作成資料 2) 【ブレインストーミング】

2 子どもの活動の成果・反応

◇分担学習により、一人で全てを調べるよりも効率的に、かつ多角的にネパールについて理解することができた。自分が選択したテーマについては「専門家」としての意識をもち、責任感をもって調べ学習と発表に取り組む姿が見られた。また、以降の授業では輪になって全員の顔が見える状態で進めたことで、発言や質問のハードルが下がり、対話的に学びを深めることができた。

◇アンケート作成の場面では、国や制度についての一般的な質問ではなく、「MBTIは何?」や「暇

なとき何しているの？」など、「友達と仲良くなるなら、こんな質問をするよね」という発想で質問を考えることができていた。

2 時限目「ネパールの人に日本を紹介しよう」

この時限のねらい

- ・他国の人々を意識した表現を通して、日本の文化や生活を見つめ直す。
- ・ネパールへ届く絵の制作を通して、双方向的な関わりへの期待感をもつ。
- ・自分の作品が届いたり、海外から作品が届いたりする経験を通して対象国と肯定的に出会い、身近に感じる

1 子どもの活動の流れ

① ネパールの人達に日本を紹介しよう

- ・ネパールの人達に紹介したい日本の文化や景観を考え、絵で表現する。【イメージ図】

② ネパールを紹介してもらおう

- ・自分の描いた絵をネパールの子供達が見ている様子を映像で観る。
- ・ネパールの子供達を描いた絵を見て気付いたことを発表する。



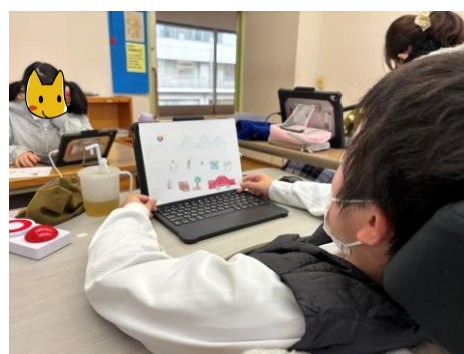
＜教材3＞生徒の描いた絵を見る様子



＜教材3＞ネパールの子供が描いた絵

2 子どもの活動の成果・反応

◇遠く離れた国に、自分の描いた絵が届いたという経験や、映像の中にいるネパールの子供が描いた絵が手元にある実感など、表現を通してつながるという感覚によって海外を身近に感じることができていた。



3 使用した教材

＜教材1＞画用紙、色鉛筆

＜教材2＞生徒用タブレット端末、イラスト制作アプリ(ibis Paint)

＜教材3＞大型モニター、現地で収集した画像資料

3-4 時限目「ネパールってどんな国？シーズン2」

この時限のねらい

- ・アンケート結果の分析を通して、ネパールの人々の考え方や生活について知る。
- ・現地で集めた資料からネパールの生活や文化を読み取り、日本とネパールの共通点と相違点について考察する。

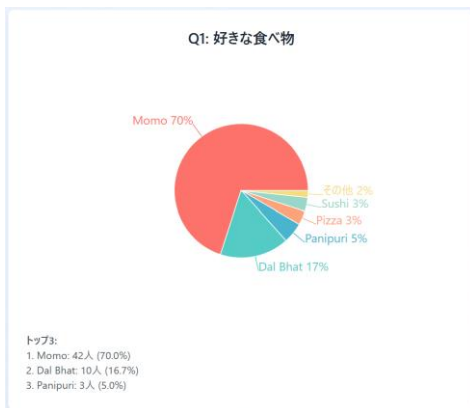
1 子どもの活動の流れ

① ネパールってどんな国？

- ・生徒が調べ学習を行ったテーマに沿って、現地で撮影した映像を使ったクイズでネパールの概要を振り返る。

② アンケートの分析

- ・アンケート結果をグラフに起こして分析し、気づいたことを共有してまとめる。【分配円】



グラフ化したアンケート集計結果

アンケートから気付くこと
好きな食べ物、モモが多い、偏ってる 都市部だとモモが圧倒的に多い、その他も結構ある。農村部はモモとダルバートおなじくらい、その他ほぼない
好きな娯楽、モバイル（ゲーム）、アニメが多い、娯楽は日本と大して変わらない 都市部は全体的に散らばりながら1番はダンスや歌が多い、でもほぼおなじくらい、農村部は圧倒的モバイル、ゲームが多い。農村部の娯楽が少ないの意外、偏っている。ユマちゃんはダンスが好き！！
宝物はfamilyがとっても多い、物よりも人が多い お金が都市部より農村部の方が多いのが意外、お金に困ってたりするからなのかな？宝物にワンピースがあった、ワンピースで宝物宝物ずっと言っているからかな？ (先生曰く、日本みたいな宝物という概念がないらしい) 都市部は娯楽や宝物が多様だけど、農村部はスマホと金が多い。 日本の高校生は家族が宝物ってあまり言わないかも
幸せを感じる時、家族と友達と一緒に多い、何かをするのではなく、一緒にいるだけで幸せを感じるの違い ネパールの人心が穏やかな人が多い？ 結構普通、もっと海外っばきを感じるかと思った、日本の高校生と一緒に
自然や山が多い、僕がネパールにいたら同じことを言うと思う。 文化祭って伝統的なお祭りのことかな？ 自然と文化が多い。 食べ物がおいしいと書いてある。

生徒作成資料1

03 日本とのつながりや同一性に気付くために

ネパールのことを知ろう

1) Do you believe in any religion?
 2) Are there people with other religions at your school? What kinds?
 3) What do you think about people who believe in different religions? (We learned that there are many religions in Nepal.)

1 ans
 Yes, I do. I respect my religion and its traditions, but I also believe in being open-minded toward others.
 Ans 2 Yes, my school has students from different religions. Some are Hindu, some are Buddhist, and some are Christian and Muslim. We all study together and respect one another.
 Ans 3 I think it's completely normal and beautiful. Everyone has the right to follow their own belief. Different religions teach good values like kindness, peace, and respect, so I appreciate people from all religions.

①の答え
 はい、信じています。自分の宗教とその伝統を大切にしています。でも、他の人に対して心を開いていることも大事だと思っています。

②の答え
 私の学校には、いろいろな宗教の生徒がいます。ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教などです。みんな一緒に勉強して、お互いを尊重しています。

③の答え
 とても普通で、美しいことだと思っています。誰にでも自分の信じる宗教を持つ権利があります。宗教は親切や平和、尊敬といった良い価値を教えるので、どの宗教の人とも素晴らしいと思います。

宗教に関する質問とその回答

③ 資料の読み解き

- ・現地で収集した資料（写真・動画・統計データ）から、共有したいものを選んでまとめ、気づいたことや考えたことを発表しあう【フォトランゲージ】

④ 比べてみよう 日本とネパール

- ・日本とネパールの共通点と相違点を対比表にまとめる。【対比表】

				ネパールと日本の共通点、相違点	
				共通点	相違点
資料				ゲームが好き 娯楽が盛んでいる 若者はSNSが好き	バイク通学
メモ	牛が歩いてる。誰も引き連れてない。でも多分誰かの牛	誰だ。多分野菜か？ 親子か？	とりだ。親子？ 別の種類？ 普通に歩いてる。食べられない？	自然が豊か ガソリン価格がほぼ一様	動物がいっぱい。犬、サル、とり、うし トイレとカンパニーが外 電柱が傾いている。電線が絡まっている 電気自動車が多い
資料				男の人は普通の服（Tシャツ）着ている	動物が歩いているのが多い お土産が売っている Tシャツを売っている店が多い お土産が売っている Tシャツを売っている店が多い お土産が売っている Tシャツを売っている店が多い
メモ	犬だ。かわいい。犬も人間も慣れている。			歴史と文化を大切にしている	宗教がいっぱい 家族が第一（日本の高校生は変わらないかも？） 宗教がよくわからない 形式上は分かっているけど考え方には差が大きい 価値観が違う人の意見を受け入れられるのが広い スマホやお土産が豊富
				娯楽が多い。遊園地のひともいる サンリオがある 犬が多い 娯楽が多い（娯楽も多いのかな？）	電動椅子の人は動きにくそう エレベーターがある 娯楽が多い 娯楽が多い

生徒作成資料2

2 子どもの活動の成果・反応

◇それぞれが印象に残ったものや、みんなに共有したいと思ったものを選び、感じたことや考えたことを発表しあった。食べ物に興味をもって発表する生徒や、街にいる動物が気になる生徒など、興味関心も多様であり、一人ひとりが異なる視点でネパールを捉えていることが分かった。

◇日本とネパールの共通点と相違点を対比表にまとめる活動では、「娯楽が似ている」「若者はSNSが好き」といった共通点を見つけて親近感を示す一方で、「電動車椅子の人は動きにくそう」「価値観が違う人の意見を受け入れられるのは心が広い」とそれぞれの視点で相違点と同一性に気づく発言が見られた。

3 使用した教材

<教材1> 現地で収集したアンケートや画像資料、統計データ

<教材2> ワークシート(Excel)

<教材3> 生成 AI(「Claude」「Microsoft Copilot」)

5 時限目「ネパールの課題はなんだろう」

この時限のねらい

- ・現地の映像やアンケート結果、統計データ等の資料から、ネパールが抱える課題を発見する。
- ・課題を SDGs の視点で分類し、既習事項と関連付けたり、グローバルな視点で捉えたりする。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールの課題はなんだろう

- ・参照した資料やこれまでの学習を基に、ネパールの課題はなにか考える【ブレインストーミング】

② SDGs 17 目標との関連

- ・それぞれの課題が SDGs 17 目標のどの項目に当てはまるか分類する。

③ 日本との共通点

- 各課題が日本にも共通しているかを検討し、関連のある課題に印をつける。

SDGsの観点	ネパールの課題は何だろう
	貧困や経済格差がある ●
	デモで死人が出ている。治安悪い？
	道がたがた ●
	電柱が倒れている。電線が絡まっている。
	トイレお風呂が汚い
	みんなが海外に行っているから、ネパール自身の経済が成長しない ●
	家族が海外に出稼ぎに行っている。小さいころに親がいなくて大きい
	停電など、インフラ技術が未発達
	水がきたない
	児童労働や物乞いをする子供がいる。言葉が分からない子がいる
	海外の車ばかり走っている。重化学工業が自国でできないとGDPが上がらないのでは？

生徒作成資料

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇現地で出会った高校生がSNSに投稿していたデモの様子が印象に残っているようだった。
- ◇日本のガソリン価格と変わらないことから、収入に対してガソリンが高価であるということに気づく様子が見られた。また、車メーカーのシェアを外資が占めているという点から、利益率の高い重工業や先端技術産業を外資に依存している点や、人口における海外で出稼ぎをしている人の割合を見て、人材が海外に流出している点がネパールの発展の妨げになっているのではないかという意見が出た。地理総合や歴史総合での既習事項と関連付けて推論する様子が見られ、学びが深まっていることが感じられた。

3 使用した教材

- <教材1> 現地で収集したアンケートや図像資料、統計データ
- <教材2> ワークシート(Excel)

6-7 時限目「課題のその先に・課題の解決と自分にできること」

この時限のねらい

- 課題を放置した場合の未来を予測し、自分との関連に気付く。
- 既習内容を根拠として、現実的な解決方法を提案したり自分にできる具体的な行動を計画したりする。

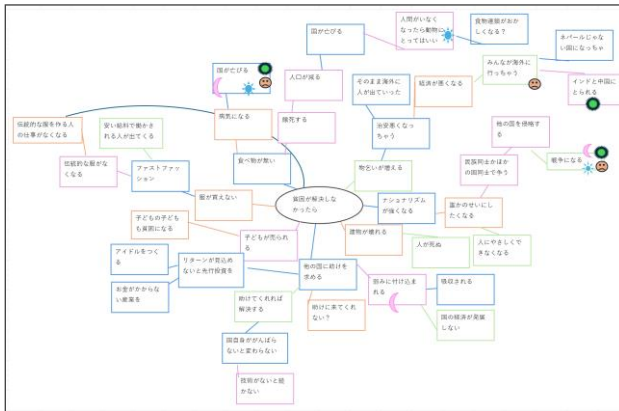
1 子どもの活動の流れ

① 課題のその先は

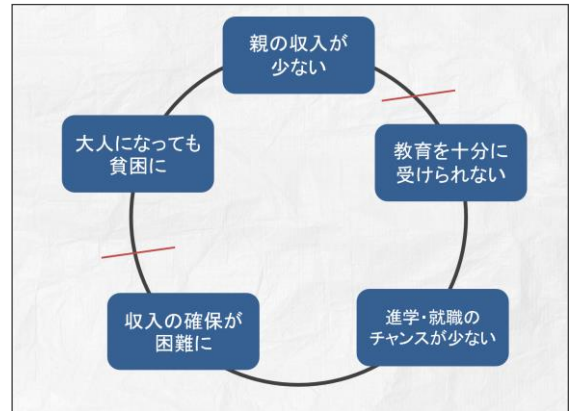
- 前時で分類した課題の中から一つを選定し、その課題を放置した場合の未来を予測する。【派生図】

② 断ち切ろう貧困の輪

- ・ 貧困のサイクルカードを正しい順番で円形に並べる。
- ・ 貧困の悪循環を断ち切るために最も重要である部分を考えて話し合い、線を引く。



ワークシート「派生図」



ワークシート「貧困の輪」

③ 課題の解決と自分にできること

- ・ 前時でリストアップした課題に対する解決法を提案する。【ブレインストーミング】
- ・ 課題解決の為に自分ができていることを考え、行動計画を立てる。

④ アイデアの共有と相互評価

- ・ 考えた内容を共有し、互いに閲覧する。
- ・ 共感した内容や「いいね」と思った部分に印(スタンプやコメント)をつけあう。

4
5
6
7 生産者の生活を守るためにフェアトレード商品買うのが大事だと思った。
8 まずは国の事情や課題を知らないとも始まらないから少しでも知ることが大事だと思いました。この授業
9 をやる前はネパールのこと全然知らなかったのでアクションを起こしようが無いとも思いました。
10 アフリカなどの紛争地域の課題解決を助けるためにユニセフみたいなやつに募金するのも重要だと思った。
11 貧困解決や技術進歩のためには教育が本当に大事なんだなと思った。なので義務教育の仕組みを整えること
12 は、必ずと言って良いほど必要なのかなと思いました。経済力の無い国に対しては教育に関する費用を先進
13 国が支援するのも手かなとは思っています。
14
15
16

ワークシート「自分にできること」



共有の様子

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 韓国の事例を踏まえて、「エンタメ産業に力を入れることで外貨を獲得できるのでは」といった具体的な提案や、「リターンが見込めないと投資が受けられないのでは」といった先進国の目線に立った意見も見られ、多角的に考察する力が育っていることが感じられた。
- ◇ フェアトレードの学習では、自分たち自身も作った製品を文化祭等で販売することがあるため、生産者と消費者両方の立場から「本当の意味でのフェアとは何なのか」を考えるきっかけになっていた。
- ◇ 購入するものをフェアトレード商品から選択していくといった、今回の学習内容に直結したものでなく、ワンクリック募金や、今回学んだことをたくさんの人に共有するといった具体的な行動計画を発表することができていた。4人で課題解決の方法を話し合った際に出た案を取り入れて発表している生徒もおり、協働的な学びが個々の行動計画にも活かされていた。

3 使用した教材

＜教材1＞ワークシート「派生図」、「貧困の輪」、「自分にできること」

＜教材2＞フェアトレード商品

＜教材3＞現地で収集したアンケートや画像資料、統計データ



[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

＜その他の実践その①＞

対 象	特別支援学校高等部 1 年 通常学級（2 名）	実践日	2025 年 7 月、10 月
実践教科	学級活動	時間数	1 時間
実践内容	◇ネパールの子どもたちに日本を紹介するための絵を描く活動を行った。 ◇2 学期に、生徒が描いた絵をネパールの子ども達が見ている様子を映像で観たり、ネパールの子ども達が描いた絵を観賞したりした。現地で収集した映像や具体物を使ってクイズ等でネパールについて紹介をした。		

＜その他の実践その②＞

対 象	特別支援学校中学部 1 年 重度重複障害学級（8 名）	実践日	2025 年 11 月
実践教科	生活単元学習	時間数	6 時間
実践内容	◇現地で購入した民族衣装を着て、ネパールの楽器を音楽に合わせて演奏した。 ◇色を見比べたり匂いを嗅いだりして、生徒達が選んだスパイスを使用してカレーの調理を行った。		

＜周りへの波及活動＞

◇2 学期始業式にて、勤務校の防災週間に合わせて、教師海外研修の報告を防災の観点と関連させて行った。

◇愛知県高等学校国際教育研究協議会 (AKK) にて、愛知県内の高等学校教員を対象に教師海外研修の報告および特別支援学校における授業実践について講演を行った。

2 実践の総括

◇実践の背景と目的

特別支援学校に通う生徒に世界に興味をもってもらい、これまでに学習した知識と結びつけながら、世界の出来事や課題について自分事として考えたり、共に課題解決に向かうために自分に何ができ

るのかを考えたりするためには、教材や手立てに特別な工夫が必要だと感じていた。そこで、教師海外研修に参加し、以下を目標として本実践を行った。

- ・ネパールと肯定的に出会うことで、海外の出来事に関心をもつ
- ・ネパールの事例を通して現代の課題について知り、既習内容との関連に気付く
- ・日本と世界の課題との関連について考え、その解決方法や自分にできることを発表する

◇実践の工夫と成果

研修で経験してきたことや撮影してきた映像を資料として活用した。渡航前から準備を行い、絵の交換やアンケート作成など双方向的な導入を展開したことで、ネパールと肯定的に出会うことができた。その結果、生徒たちはネパールの事例と現代の諸課題を身近に捉え、これまで学んできた知識と関連付けながら、解決方法を主体的に考えることができた。

実践のまとめで行った生徒の行動宣言および授業の感想では、「詳しく知らなかった国だけど、授業を受けて急に近く感じた。」「どこに生まれるかは偶然だったし、自分にできることがあると分かったから（その国の為に）取り組んでいきたい」といった感想が出た。生徒たちから世界とのつながりを感じる発言が聞けたこと、自分にもできることがあると発言してくれたことは、迷いながらの実践ではあったが、素直にやってよかったと思わせてくれた瞬間であった。当初に考えていた実践の目標としては、一定の成果があったと考えられる。

◇今後の課題と展望

課題としては、授業時数に限りがあり、単元としての目標から逸脱しないよう、実践は一教科担当としてできる範囲にとどまった。実際に現地の人とオンラインでつないだり、日本に移住してきた人など関わったり、実際のコミュニケーションがあれば、国際理解についてさらに深く考える機会になったと思われる。

今後も、教材や機会の工夫を継続して、特別支援学校における国際理解教育の可能性を追求し、生徒が世界に視野を広げていける実践を目指していきたい。

3 次の実践者へのエール

◇自分の意見が受け入れてもらえるという安心感の中でのびやかに発言する中から、必ず光る意見は生まれます。よいアウトプットは、量を重ねる中からこそ生まれるのだと分かりました。現地で集めてきた教材を通して、生徒が何を感じ、何を考え伝えようとするのか。それは実践してみなければ分かりませんが、その瞬間に出会えることこそが授業の醍醐味であり、大きな楽しみでもあります。参加型の手法を取り入れた授業の中で、生徒が自ら学んでいく姿に触れ、まだまだ可能性を引き出せると実感しました。私達自身の学びや挑戦が、生徒たちの学びをさらに広げて未来に繋いでいくのだと思います。

4 参考文献・資料

- 1) 『よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編 ―他者に関わる力を育もう―』2018年、NIED・国際理解教育センター

以上

ネパールからのメッセージ！ぼくらの未来会議

所属	岐阜県関市立桜ヶ丘小学校	実践者	杉下 絵里華	
対象	小学校6年生（62名）	実践日	2025年9月～3月	
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	18時間	
テーマ	国際理解、SDGs			
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールで起こっている諸問題を世界各国や身近な問題とつなげ、自分ごととしてとらえる。 ・みんなが豊かに生きるために、自分にできることを考える。 			
実践内容	回	プログラム	備考	
	1	「ナマステ！ネパール」★ネパールと肯定的に出会う ・ネパールと言えば？ ・クイズ ・文化体験(衣・食・住、宗教、音楽、言語等)	【フォトランゲージ】 【ネパールグッズ】	
	2	「ネパールと日本のつながりを考えよう」 ・ここはどこだ？(ネパールor日本) ・ネパールと日本の共通点・相違点・それぞれの良さを考える →みんなが違っている良さを考えよう	知る	【フォトランゲージ】 ・ネパールで見つけた日本 ・日本で見つけたネパール 【対比表】 【派生図】 【ギャラリー方式】
	3	「教えて！ラクスマンさん」通訳ラクスマンさんとオンライン交流会 ・日本の文化紹介 ・ラクスマンさんによるネパール講座 ・質問タイム等		
	4	「ネパールの課題について考えよう」 ・6枚の写真から、ネパールの課題について考える ① グループに1枚ずつ写真を配布 ② 考えたことを他グループに伝える ③ 新しいグループのメンバーにも意見をもらう ④ 元のグループで集約		6枚の写真 (校庭のゴミ・物乞いの子・家事をする女性・舗装されていない道路・信号のない歩道・耐震工事されていない住宅) 【ジグソー法】
	5～ ～10	「このままでいいの？ネパールの課題」 ・1時間につき1枚の写真について深める ① 今日の1枚を提示し、課題について共有 ② もしも放置したらどんなことが？ ③ 派生図にSDGsシールを貼り、関連を考える ④ 課題に向き合う人々を知る ⑤ 自分にできることを考える	思考を耕す	【派生図】 インタビュー動画 (ネパールで活躍する人) SDGsシール
	11～ ～13	「考えたい！解決したい！世界の問題について考えよう」※1人1案作り ① 選ぶ ② 課題についてまとめる ③ 自分たちに置き換えると・・・ ④ 解決に向けて取り組む人々 ⑤ 自分にできること「自分宣言」	自分で考える	学年単位 ※項目ごとのグループ活動
	14 15・16 17 18	「桜小サミット～ぼくらの未来会議～」 「今、地球で起こっていること・未来のためにできること」※サミット振り返り&まとめ 来年度国際理解の学習を引き継ぐ5年生へ、1年間の成果発表 地元の高校生との意見交流 ※小学生だからできること・高校生だからできること	発信する	あこがれをもつ
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースでネパールが取り上げられた時は友達のように心配したり、近所のネパール料理屋さんを調べたりと、ネパールに関心をもつことができた。 ・ネパールの授業で学んだことを生かして、世界で起こっている問題について考え、自分ごととして向き合うことができた。 		
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・地震について取り組むネパールの学生たちとオンラインを通じて意見交換をしたかったが、言語の壁が高く、実施できなかった。→通訳を介す、翻訳機能を活用するなど対策を考えたい。 ・来年度以降実践する際は、市内で国際貢献している人や技能実習生とも交流し、より身近に感じられる工夫をしたい。 		
備考	15～18については2月下旬より実施予定			

[授業実践の詳細]

2 時限目「ネパールと日本のつながりを考えよう」

この時限のねらい

- ・ネパールと日本には共通点があることを知り、両国の繋がりに気付く。
- ・「ちがいがあがる」からこそその良さについて考える。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の授業の復習

- ・ネパール語で自己紹介をしよう。(挨拶+名前+好きなもの)
- ・ネパールのお話を聞いて、印象に残ったことは？

② ここはネパール？日本？

- ・ネパールと日本の写真を用意し、どちらで撮った写真を仕分けする。(ロイロノート活用)
- ※ネパールの日本料理屋、万博のネパール館等、お互いの文化を肯定的に捉えている、かつ意外性のある写真を選択する。



③ ネパールとの共通点・相違点を考えよう

- ・対比表を使い、ネパールと日本の共通点・相違点を考える。
 - 共通点(醤油を使う、カレーを食べる、地震が多い、ドラえもんが好き、笑顔が素敵など)
 - 相違点(食事は手で食べる、スパイスを多く使う、宗教を大事にしている、民族衣装など)

④ みんなが違っていることの良さを考えよう

- ・グループごとに、色々な文化や考え方が存在することの良さを挙げていき、交流する。
 - ・色々な種類の料理が食べられる ・授業で多様な意見が出てくる
 - ・ファッションの幅が広がる ・悩んだ時に新しい解決策を見つけられる など

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「ネパールでも日本の醤油が売られているんだ」「ネパール人も抹茶のスイーツやラーメンが好きなんだ」など、自分たちが好きなものが遠く離れた国でも愛されていることを知り、嬉しそうな様子だった。また、日本でもネパール人が運営するカレー屋さんがたくさんあったり、万博のネパール館を多くの日本人が楽しんだりしていることを知り、お互いの文化を尊重し合っていることを理解することができた。
- ◇ 自分と意見が合わなかったり、趣味が違ったりすると敬遠してしまいがちだが、違うからこそ面白い、違うからこそ選択肢が増えるということに気付くことができた。

3 使用した教材

<教材1>ネパールと日本の写真

3 時限目「教えて！ラクスマンさん」

この時限のねらい

- ・通訳としてお世話になったラクスマンさんに関わりをもつことで、よりネパールを身近に感じる。
- ・ラクスマンさんのお話を聞いたり、質問したりすることを通して、ネパールと日本の共通点や良さに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① ラクスマンさんと仲良くなろう！

- ・全員おでこにティカを付けて授業に参加
- ・ネパール語であいさつ、自分たちが勉強してきたことの紹介
- ・子どもたちが考えたオンライン越しでのアイスブレイク
→日本語のじゃんけんを教え、ネパール式のじゃんけんも教えてもらう
→ラクスマンさん 対 桜小6年生 じゃんけん大会



② ラクスマンさんのネパール講座

- ・ネパール語(民族の言葉)での自己紹介から始まり、民族や文化についてのお話をしていただく。



③ ラクスマンさんに質問タイム

- ・ネパールの魅力 ・おすすめの観光地
- ・好きな和食 ・日本での思い出の場所 等

④ 日本の子どもたちへのメッセージ

- ・日本は素晴らしい国だから、まずは自分の国に誇りをもって、好きになってほしい。
- ・自分の国を大切にできる人は、他の国や自分でない誰かのことも大切にすることができる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ネパールと日本がつながった瞬間や、ラクスマンさんが日本語で挨拶をしてくれた時、歓声が上がった。先生から話はよく聞いていたけれど、まだまだ遠い存在だったネパール。オンラインを通じて「今この瞬間」を共有できたことや、日本と深いつながりのあるラクスマンさんとお話できたことは、ネパールに興味をもち、世界を身近に感じるきっかけを作ることができたと思う。
- ◇ 質問する時は、はじめに「ナマステ！メロ ナーム〇〇 ホ」とネパール語で自己紹介をし、答えてもらった「ダンネバード」とお礼を言う姿が見られた。相手の言語・文化を大切にしようとする姿勢が育っていることを感じた。
- ◇ 好きな和食や、日本で過ごした思い出の場所についての質問に答えてもらった時、「一緒だ！」「え！それ知っているの！？」と嬉しそうに反応する姿があった。自分たちの文化や好きなものを相手に受け入れてもらえる喜びを味わうことができた。また、自分が国際理解教育を通して子どもたちに伝えたかった「自分の国を大切にできる人は、他の国や自分でない誰かのことも大切にできる」ということを、ラクスマンさんから言っていただけことは、説得力があり、より子どもたちにも響いたのではないかと感じる。

5 時限目「このままでいいの？ネパールの課題」

この時限のねらい

- ・身近になった国、ネパールの課題について自分ごととして向き合う。
- ・課題解決に向けて、自分にできることを考える。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレイク

- ・グループで気持ちを1つにしよう「〇〇と言えば？」
※自分が思いついたからではなく、班の仲間が答えそうなものを選ぶ。

② 今日の1枚について話し合う

- ・第4時で共有した6枚の写真のうち、今日の1枚について、どんな場面だったか、何が問題なのかを話し合う。

【第5時で使用した写真】

- ・ゴミがたくさん捨てられている。
- ・小さいし、量も多くて拾おうとする気持ちが失せる。
- ・落ちている場所が校庭ということは…
→外で遊ぶことができない。
体育の授業はどうやって行っているの？
これは子どもたちが出したごみなのか？
なんでこんなことに…



写真: 仲本隊員のスライドより

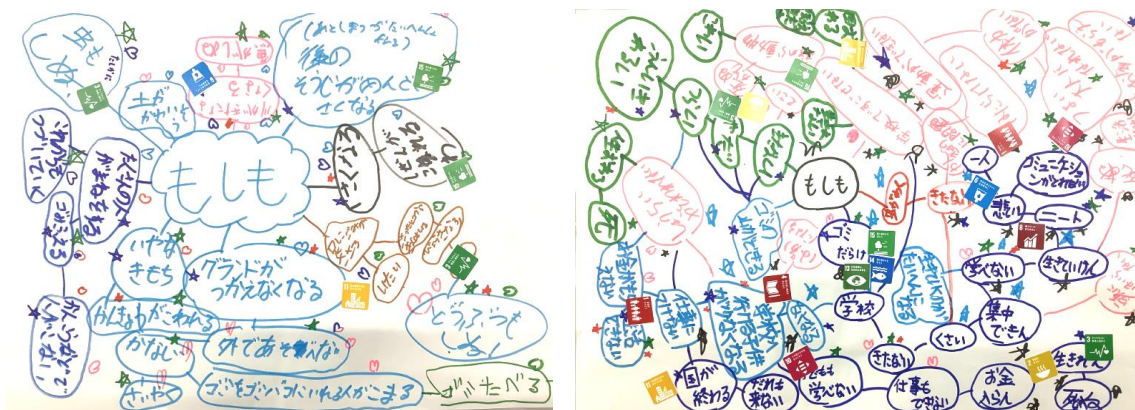
③ もしも、この問題を放置してしまったら何が起きる？

- ・「もしも」から派生して、今後起こるであろうことを予想し、グループの仲間と話し合う。
★派生図 ※P5 写真参照
- ・グループ間交流をする。「いいね！なるほど」と思ったものに♡を付け、次のグループに回す。



④ SDGs との関連を考えよう

- ・派生図に、関連するSDGsのシールを貼っていく。
- ・ゴミ問題は1つの問題に終わらず、教育格差、住み続けられるまちづくり等、様々な問題に派生していることに気付く。



⑤ 課題に向き合う人々について知る

- ・ JICA ネパール隊員、仲本さんの取り組みを紹介する。
- ・ 子どもたちへのメッセージ動画を見せる。

⑥ 自分にできることって何だろう

- ・ 課題解決のために自分ができるようなことを、ロイロノートに書いて提出する。
- ・ 共有機能を使って全体交流をする。

【子どもたちが実際に書いた内容 ※一部抜粋】

- ・ ポイ捨てを許さず、まずは自分の周りをきれいにする。 ・ ゴミが落ちていたら拾う。
- ・ ポイ捨てをする人に注意をする。 ・ ボランティア活動に興味をもつ、参加する。
- ・ 今のきれいな環境を当たり前だと思わない。 ・ 感謝の心をもつ。 ・ ゴミ問題について勉強する。
- ・ 今自分が楽かを考えるのではなく、先のことを考えて行動する。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ネパールの文化体験やラクスマンさんとの交流等、ネパールを身近に引き寄せてから向き合った課題だったため、子どもたちが自分の国のことのように心配し、熱中して考えることができた。
- ◇ 仲本隊員の話から、支援をする上で大切なことを学んだ。一方的に支援をするのではなく、相手の文化や生活環境等、背景にあるものを考えること、相手の立場に立って、相手の気持ちを考えて行動することの大切さを教えてもらった。これらは国際理解教育のみでなく、学級活動や生徒指導等、様々な場面で生かすことができた。
- ◇ 仲本隊員の動画を見せたことで、具体的にどんな支援が行われているのかイメージをもつことができた。よって、授業の最後に自分ができることを考える際、スムーズに意見が出てきた。
- ◇ 第5時で行った流れで、他の写真の内容についても授業を実施した。環境、貧困、男女平等、災害、交通、インフラの6つのテーマについて、今後深く考えていくための素地を養うことができた。これらを通して身に付けた基礎知識や考え方を生かして、国や場面が変わっても、自分の興味のある内容について詳しく調べたり、意見をもったりすることができた。

3 使用した教材

- <教材1> 派生図 <教材2> 校庭に散乱するゴミの写真(仲本隊員のスライドより)
- <教材3> 仲本隊員によるビデオメッセージ

14 時限目「桜小サミット ～ぼくらの未来会議～」

この時限のねらい

- ・得た知識を基に、仲間の考えを尊重しながら課題に対する自分の考えを伝え、話し合いを行う。
- ・世界の問題を「自分ごと」として考え、仲間と意見交換をする。

1 子どもの活動の流れ

① 話し合いの約束を確認する

- ・サミットの定義について説明する。
- ・3の約束（異なる考えでも否定しない・仲間の話を最後まで聞く・自分の考えも相手の考えも大切にする）

② アイスブレイク

- ・グループで気持ちを1つにしよう「〇〇と言えば？」
※グループは学年単位で、同じテーマについて考えた子同士がまとまるように組んである。
- ・30秒スピーチ「そのテーマを選んだ理由」「調べてみて1番びっくりしたこと」

③ もしも、この問題を放置してしまったら何が起きる？

- ・「もしも」から派生して、今後起こるであろうことを予想し、グループの仲間と話し合う。
- ・書いたものの中から、「この未来が一番嫌だ」と思うものに“どくろマーク”を付ける。

④ 問題解決のために活動している人や機関を紹介する

- ・自分が調べた問題解決に向けて活動している人や機関（JICAの取組、大学の研究、NPOの活動家等）を仲間を紹介し、問題を解決するための様々な方法があることを学ぶ。

⑤ 問題解決のために必要なことベスト3を考える

【子どもたちが実際に書いた内容 ※環境について話し合った2つのグループの意見参照】

- ①問題について知る ②ゴミ拾い等、できることを行動に移す ③意識を続けてもつ
①活動している人に協力する(募金・ボランティア参加等) ②周りに広める ③学び続ける

⑥ 自分宣言

- ・「今からできる！問題解決のために私は〇〇をします」を決め、仲間に宣言する。
- ・頑張る仲間にエールを送る。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇活動自体は5～10時間目の内容と似ているが、ネパールの事例を挙げて考えていた時よりも、深い話し合いができたと感じる。教師がネパールを具体例として思考を耕し、自分で興味のあるテーマを選んで調べたからこそ、関心と知識に基づいた質の高い話し合いにつなげることができた。
- ◇課題を自分ごととしてとらえ、「自分ならどうするか」という視点で考えたことで、調べた内容を根拠にした発言が増え、主体的に話し合う姿が見られた。

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対 象	小学校6年生（62名）	実践日	2025年6月・11月
実践教科	総合的な学習の時間・英語	時間数	8時間
実践内容	<p>◇関市内のALTを招いて行う国際交流会に向けて、外国の方と接する際のマナーや、質問の精選を行った。自分が逆の立場だったら何を聞いてほしいか（文化、魅力等）、どんなことは聞かれないか（外見、宗教等）、相手の立場を思って自分たちがどうあるべきかを考えた。ここで学んだことが、ブラジル人の転校生を受け入れる際や、ラクスマンさんとオンラインで交流する際に役に立った。</p> <p>◇国際交流会では、第1回目はALTによる国紹介、第2回目は体験ブースを用意し、日本文化の紹介を行った。ALTの国紹介を、身を乗り出して聞く姿や、日本文化を生き生きと紹介する姿が見られた。「違うからこそ面白い」「相手の国に興味をもつためには自分の国のことも一生懸命勉強する」ことの大切さに気付くための素地は、国際交流会を通して養ったと思っている。これらが布石となり、ネパールについて学ぶ学習もスムーズに進んだ。</p>		

<その他の実践その②>

対 象	小学校4年生（53名）	実践日	2026年1月
実践教科	道徳	時間数	1時間
実践内容	<p>◇道徳の価値項目「国際理解」に関連付け、ネパールの紹介をしながら異文化について考える授業を行った。授業では、ネパールに関するクイズや、ネパール語の挨拶を使って交流するビンゴ活動を取り入れた。子どもたちは、日本との違いを「正解・不正解」で判断するのではなく、「違いを知ることのおもしろさ」として前向きに受け止めていた。活動を通して、異文化との出会いを肯定的に捉える姿が多く見られ、わずか1時間の授業であっても、子どもたちの意識に変化が生まれることを実感した。</p>		

<周りへの波及活動>

- ◇ 総合的な学習の時間の年間計画を作成し、6年生の全ての児童に対して同じ内容の授業を行った。同じ学年部の先生はもちろん、教育実習生や他学年の先生方にも授業を見に来てもらい、様々な参加型の手法を体験してもらうことができた。
- ◇ 年間を通して子どもたちがつかんだ学びを発表する場を設けることによって、学んだことを学年だけで終わらせず、発信する機会を設けることができた。
- ◇ 道徳の国際理解の項目と関連付け、ネパールにかかわる授業を他の学年でも行わせてもらうことで、国際理解教育の楽しさを他学年の子どもたちや先生方に伝えることができた。

2 実践の総括

- ◇ 本学年の児童は、4年生から3年間持ち上がり、4・5年生時から社会科や道徳の時間に国際理解教育を実践してきた。本年度は6年生の総合的な学習のテーマとして「国際理解」を掲げ、1年単位で取り組んだ。広い視野で物事を考えることや、世界に思いを馳せて考えることは過年度に経験済みである。今まで培ってきた知識や経験も相まって、4年生時と6年生時では、発言の

内容や授業への向き合い方が変わったと感じた。国際理解教育は何年生でも実践できる。ほんのわずかの時間でも、小さな積み重ねを作っていくことが大切であると感じた。また、今年度は自分自身が教師海外研修に参加させてもらったことで、実際に肌で感じたことを、熱意をもって伝えることができた。現地で撮影してきたインタビュー動画を見たことや、つながりができたラクスマンさんとお話ししたことで、よりネパールを身近に感じることができた。子どもたちの反応も良く、やはり経験に勝るものはないと感じた。

- ◇ 国際理解教育は、教科横断的に実践でき、また、生徒指導においても生きるものだと思っている。意見が異なる人とも分かり合おうとすること、自分本位になるのではなく、相手の立場を考えることの重要性・国際理解教育で学んでいることは、今後をより良く生きていくために必要なことだと考える。何か特別な機会を設けずとも、日常的に実践していくことで子どもたちの心は少しずつ育っていくと感じた。

3 次の実践者へのエール

- ◇ 教師海外研修での経験は、一生の宝物である。普段の海外旅行では得られない学びを、この研修を通して得ることができる。現地で味わった感動や葛藤を、熱意をもって伝えることで、子どもの表情はみるみる変わっていく。だからこそ、現地では貪欲に学び、戻ってきたら子どもたちにたくさん還元してほしい。また、一度しかないこのチャンスを存分に生かすためには、ぜひねらいをもって研修に臨んでほしいと思う。「こんな授業をしたいからここでインタビューをしたい」「日本と比較するためにこんな写真を撮りたい」など、授業でどのような教材を使いたいのか、ビジョンを明確にしておくこと、より深い教材研究ができる。

4 参考文献・資料

- 1) 『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』 2021 年、JICA 中部
- 2) 『JICA 中部 2024年度 教師海外研修報告書』 2025 年、JICA 中部

以上

創ろう！みんなの世界・みんなの幸せ♡

所属	愛知県春日井市立高座小学校	実践者	丹羽 真琴
対象	小学校6年生(96名)	実践日	2025年12月～1月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	7時間
テーマ	人権・国際理解		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの文化や良さに出会い、世界と自分は近くにあることに気付く。 ・いろいろなみんなが幸せに過ごすために、自分ができることを考え、行動する力を育む。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	ネパールに肯定的に出会う！ (Google Meetでの全校集会) ・ネパールクイズ	
	2	ネパールステキ！～わたしが大好きなネパール～ ・アイスブレイク『国名あいうえお』 ・ネパールを知ろう！ネパールカルタ【フォトランゲージ】 ・ネパールのいいな！ステキ！紹介	・『国名あいうえお』プリント ・ネパールカルタ
	3・4	日本とネパール ・日本とネパールの同じ・違いを見つけよう！【ネパールBOX】 ・日本とネパールの共通点と相違点をかこう【対比表】【ギャラリー読み】 ・日本とネパール、その他の国々全部同じだったら…？違っている良さは？ 大好きなネパールにも課題が… ・写真から課題を考える(インフラ、ゴミ、ジェンダー、教育格差、児童労働) 「あっていい違い」「よくない違い」ってなんだろう？『○・△・×どの立場？』 ・課題の裏にある原因ってなんだろう？【ロールプレイ】	・ネパールBOX ・模造紙、ペン ・ロールプレイのワークシート
	5	幸せに生きるために生まれてきた私たち ・アイスブレイク『私にとっての幸せって…？』 ・いろいろな人の立場になって、「人の幸せに関わる大切なこと、必要なもの」について考えよう【幸せカード】 ・どの国のどんな人であっても「幸せに生きる」ために共通に必要なものは何？【ブレインストーミング】	・幸せカード ・A3用紙、ペン
	6・7	私にできることってなんだろう？ ・私たちにできることってなんだろう？【KJ法】 (みんなのできること・個人のできること・すぐできること・時間が必要な軸) ・みんなの幸せを守るために活動している人の存在について知る【動画】 ・日本の子供たちへのメッセージ動画を見る【動画】 ・動画を見たうえで他にできることを付箋に書き、共有する【ギャラリー読み】 ・みんなの幸せのために、自分にできることってなんだろう？【行動宣言】 ・思いをこめた学年のタルチョをつくる	・模造紙、付箋、ペン ・動画 ・折り紙、ひも、木製ピンチ
成果	いろいろな参加型の活動を取り入れたことで、子どもたちは楽しみながら進んで学習に取り組み、国際理解への関心を高めることができた。特に、ネパールでの経験に基づいた「生の声」や、現地の服や道具といった「本物」に触れたことは、子どもたちが遠い国を身近に感じる大きなきっかけとなった。		
課題	学年全体での授業だったため、細部の確認や説明が不十分な点もあり、内容を難しく感じる場面があった。また、世界をより身近に捉えた上で、各自が興味もった事柄を深掘りできる「探究の時間」を設けることで、より学びを深められるのではないかと感じた。		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間3クラス合同で授業を行った。 ・授業を公開し、他学年の先生方に見に来ていただいた。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「ネパールに肯定的に出会う！」（全校集会）

この時限のねらい

- ・クイズやスライドを通して、ネパールに肯定的に出会う。
- ・異文化への理解を深めることで、他国に対しても「もっと知りたい」という気持ちを育む。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールのあいさつ

- ・ネパールの挨拶「ナマステ」の意味を紹介。互いに手を合わせ、笑顔で挨拶を交わす体験を通して、心の距離を縮めた。

② 先生のびっくり！コーナー

- ・「毎朝の国歌斉唱」「手で食べる食事風景」「おでこで荷物を運ぶ知恵」など、日本の日常との違いを紹介。子どもたちの驚きを引き出し、文化の多様性に触れさせる。

③ ネパールクイズ

- ・人気アニメや民族衣装(帽子)、生活用具についてクイズ形式で出題。日本との意外な共通点(アニメ等)に気付く。

④ 学校の様子や子どもたちについての説明

- ・制服姿で学ぶ様子や、流暢な英語を話すことを説明。将来の夢について語るネパールの子供たちの姿を通し、国は違うけれど、同じ志をもっていることに気付く。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 事後、廊下で「ナマステ！」と笑顔で挨拶を交わす姿や、食文化・生活習慣について自ら質問しに来る姿が見られ、多文化への知的好奇心の高まりが確認できた。
- ◇ 教職員からも「児童の表情が生き生きとしていた」「自級でも実践してほしい」といった前向きな反響があり、国際理解教育の重要性を共有する機会となった。

3 使用した教材

<教材1>ネパールで撮影した写真・動画

みんなもやってみよう！



<「ネパールのあいさつ」スライドの一部>



<「先生のびっくり！コーナー」スライドの一部>

クイズ これは、いつつかう？



<「ネパールクイズ」スライドの一部>

2 時限目「ネパールステキ！～わたしが大好きなネパール～」

この時限のねらい

- ・「国際理解」の意義について自分たちの考えを持ち、学ぶ目的を意識する。
- ・カルタや視覚教材を通して、ネパールの「衣食住」や「文化」に触れ、ネパールの魅力を知る。

1 子どもの活動の流れ

① 「国際理解」とは？

- ・「なぜ今、世界について学ぶのか」をグループで話し合う。多角的な視点をもつことの重要性を共有し、学習への構えをつくる。

② アイスブレイク「世界の国名アイウエオ」

- ・指定された頭文字から始まる国名を挙げるアクティビティを実施。

③ ネパールカルタ

- ・教師が読んだものと関係するカードを取る。
- ・読み札に合わせた解説（衣食住や文化の背景）を行い、写真を通して現地のリアルな生活を提示する。

④ 感想タイム

- ・ネパールについて「ステキ！おもしろい！」と思ったことについて感想を伝え合う。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 感想タイムでは、「ネパールはいろいろおもしろいところがあった。いつか行ってみたいと思った」「ネパールには道にさるがいたり、バイクがたくさん走っていたりすることを知れました」という感想がでた。
- ◇ カルタという手法を使うことで、どの児童も積極的に参加をし、楽しく学ぶことができていたように感じる。
- ◇ 初めてみるネパールのもや街並みの写真に興味を示している児童も多かった。

3 使用した教材

<教材2> ネパールカルタ(カード 20 枚)

11/28 国際理解教育【国名 アイウエオ】 (2)組 ()班

アメリカ	インド	ウクライナ	エジプト	オーストラリア
カタタ	キューバ	ク	ケニア	コ
サウジアラビア	シンガポール	スペイン	セルビア	ソ
タイ	中国	ツリバル	デンマーク	トルコ
タイリア	日本	ヌ	ネパール	ノルウェー
パキスタン	ヒ	ブルガリア	ベトナム	ポルトガル
マリ	ミャンマー	ム	メ	モロッコ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リビア	ル	レ	ロシア
ワ				

<活動②成果物>



<活動③「ネパールカルタ」の札>



<活動②の様子>

3・4 時限目「日本とネパール」「大好きなネパールにも課題が・・・」

この時限のねらい

- ・日本とネパールの共通点や相違点について調べ、違っていることの良さについて考える。
- ・国や文化の「違い」には、「あっていい違い」と「あってよくない違い」があることに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① 日本とネパールの同じ・違いを見つけよう！

- ・衣・食・住、学校や子どもの生活、自然、文化などの視点から、日本とネパールの共通点や違いを探す。【ネパールBOX】
- ・調べたことをもとに、「共通点」「相違点」に分けて対比表を作成する。【対比表】
- ・各班の対比表を見て回り「なるほど」「いいね」と感じた内容に★マークを付ける。【ギャラリー読み】



<活動①の様子>

② 違っている良さは？

- ・「もし、日本とネパール、その他の国が全部同じだったらどうなるだろう？」という問いをもとに話し合い、国や文化がちがうことのよさについて考えを深める。【グループトーク】

③ この違いはどうか・・・？

- ・日本とネパールのさまざまな違いを提示し、○（あっていい）／△（考える）／✕（よくない）のコーンを使って、自分の立場にあてはまるところに移動する。

共通点	相違点
スーパーに乾飯料がある。 学校がある。 コンビニがある。 お菓子がある。 車がある。 屋根が高い。 春休みが長い。 バイクがある。 本の種類が多い。 絶景。	国境の形が丸がる。クワクワシ。 さもかき。めずかしい。 おでこに赤い点。 水道水が冷たい。 手で食べる。 あさび(いろいろな物)。 ジュース65%OFF。 電線、高い。 ジュースのサイズ。 ぼろレリ形が。 バイロの量が。

<活動①の成果物>

④ 「よくない違いの共通点」ってなんだろう？

- ・活動と話し合いを通して、「あってよくない違いは、人権に関わることが多い」という共通点に気付く。
- ・人権＝「人が人間らしく、幸せに生きるための権利」であることを確認する。

⑤ 課題の裏側にある原因ってなんだろう？

- ・ロールプレイを通して、それぞれの立場になって課題の裏側にある原因について考える。【ロールプレイ】

事例1 児童労働

事例2 ジェンダー

事例3 格差・カースト制度



<活動⑤の様子>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「日本では当たり前だと思っていたことが、世界では必ずしも当たり前ではないこと」や「共通している点もあれば、大きく異なる点もあること」に気付き、国や地域を比べながら考える姿が見

られた。

◇ロールプレイを通して、登場人物の立場や置かれている背景を想像し、相手の気持ちに寄り添って考えようとする様子が見られた。

◇ロールプレイ後の振り返りでは、「事例①では、仕方のない状況ではあるが、どうにかできないのかと感じた。他国からの支援の重要性を考えた」「事例②では、学校に行けない女の子はかわいそうだが、両親や地域の人、学校の先生の誰か一人が悪いわけではなく、解決が難しい問題だと感じた」「事例③では、自分で未来を選べることは当たり前だと思っていたが、そうではない現実があることに気づき、古い考え方は見直していく必要があると思った」などの感想が聞かれた。これらの活動を通して、課題が簡単には解決されない背景や要因について、多面的に想像しながら考えることができたと考える。

3 使用した教材

<教材3>ネパール BOX(JICA より)

<教材4>ネパールで購入した服や楽器、食べ物など

<教材5>ロールプレイ ワークシート

事例1: 児童労働

配役 A:働いている子ども(ラミル) B:家族(お母さん)
C:雇やとい主 D:地域の大人/先生(子どもの様子を知っている)

A:「本当は学校に行きたい。でも家のお金がなくて、毎日レンガ工場で働いているんだ。」

B:「ラミル、ごめんね。本当は学校に行かせたい。でもあなたの給料がないと家族が食べていけないの。」

C:「うちも助かっているよ。子どもは手先が器用だし、安い給料で働いてくれるからね。」

D:「ラミル、最近学校に来ていないから心配していたんだ。勉強したい 気持ちはあるの？」

A:「もちろんあるよ。でも僕が働かないと、妹たちがごはんを食べられない...。」

B:「私も子どものころは学校に行けなかった。だから、こうするしかないと思ってしまって...。」

C:「親から“働かせてほしい”と頼まれるんだ。うちも商売だから断れない。」

D:「働く子どもを守る法律はあるけれど、みんなが守っているわけじゃないんだよ。」

A:「勉強して未来を変えたい気持ちも本当なんだ。」

<活動⑤「ロールプレイ ワークシート」の一部>

活動③の内容

- ・バナナの売り方
- ・教室の様子(1人1つの机/3人で1つの机)
- ・伝統的な衣装がある(浴衣・サリー)
- ・水道水の違い
- ・道路の様子
- ・ゴミがたくさん捨てられている
- ・学校に行けず働いている人がいる(児童労働)
- ・ヘナアートやピアスをしている子供
- ・手でごはんを食べる
- ・洪水被害で家を失っている
- ・カースト制度

<活動③で提示した様々な違いについて>



<活動①の様子>

5 時限目「幸せに生きるために生まれてきた私たち」

この時限のねらい

- ・いろいろな人の立場に立ち、幸せに生きるために必要なものについて考える。
- ・国や立場がちがっても、「幸せに生きる」ために共通して必要なものがあることに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① 自己紹介

- ・名前と「自分が幸せを感じる時」を紹介する。

② 幸せに生きるために必要なものは何だろう？

- ・自分の幸せにとって必要だと思うものを5個まで選ぶ。【幸せカード】

- ・プリントにないものについては、空欄に自由に書いてもよい。

- ・選んだ番号をグループ内で共有する。人によって「幸せに必要なと思うもの」が違うことに気付く。

③ いろんな立場の人になって考えよう！

- ・いろんな立場の人になって「人の幸せに関わる大切なこと・必要なもの」について考える。それぞれの立場の人が、必要だと思うものを5個まで選んだ。

【立場カード】

④ 「幸せに生きる」ために共通に必要なものは？

- ・どの国の、どんな人であっても「幸せに生きる」ために共通に必要なと思うものについて考える。【ブレインストーミング】

2 子どもの活動の成果・反応


◇幸せカードの空欄には「自分の意見が国の政策や仕組みに反映されること」「好きなものを好きだと表現できること」「自分が行きたい場所に行ったとき、友達や家族と共にいられること」「全部（幸せは選ぶものではない）」など、子どもたち一人一人の価値観が表れた多様な意見が見られた。

◇ネパールという特定の国における人権課題を取り上げるとともに、「日本に住むネパールの子どもや「ヤングケアラー（日本）」といった身近な課題も並行して扱った。その結果、国際的な問題を遠い出来事としてではなく「自分事」として捉えようとする姿が見られた。

3 使用した教材

<教材6> 幸せカード

<教材7> 立場カード

幸せカード  () 組 名前 ()

① お腹いっぱいご飯が食べられること	② 自分の好きな仕事・やりた い仕事を選んで働けること	③ 一生けんめい働けば、生 活に困らないだけのお金 がもらえること
④ 空気や水や土がきれいで、 健康を心配しなくていいこと	⑤ 学校のことを自分たちで話 し合って決められること	⑥ 子どもに関わるルールやま ちづくりに、子どもの意見が 大切にされること
⑦ お金がなくても、けがや病 気のときに安心して病院に 行けること	⑧ いじめや暴力を心配せず、 安全に毎日をすごせること	⑨ 外であそぶとき、危険なこ とを気にせずに、のびのび遊 べること

<活動②③「幸せカード」の一部>

① 児童労働する子ども(ネパール)

名前: ラミルくん 年齢: 12歳 国籍: ネパール

状況:

家が貧しく、家族の生活を支えるために毎日レンガ工場で働いている。

本当は学校に行きたい気持ちがあるが、ラミルくんの給料がないと家族がごはんを食べられないため、学校を休む日が続いている。



<活動②③「幸せカード」の一部>



<授業の様子>

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対象	小学6年生（30名）	実践日	2025年 9月
実践教科	道徳	時間数	10時間
実践内容	◇「よりよい世界を目指して」をテーマに、よりよい世界とはどのようなものかについて、ブレインストーミングの手法を用いて意見を出し合い、考えを整理する。 ◇まとめた内容をもとに、SDGsの17の目標のうち、どの項目に当てはまるかを考え、シールを貼り分ける。		

<周りへの波及活動>

- ◇ 6年生全クラスが集まって授業を行うことで、さまざまな参加型の手法を、他のクラスの教員にも実際に体験してもらうことができた。
- ◇ 昨年度に引き続き、校内授業研究として参観を呼び掛けたり、初任者研修の一部として取り上げてもらったりすることで、参加型授業のよさを校内に広げることができた。
- ◇ 市内の「総合的な学習の時間」研究会に所属し、今年度の実践の発表を行った。

2 実践の総括

- ◇ 振り返りには「自分は幸せに過ごせていると感じているからこそ、何事にも感謝して過ごしたいと思った」「日本にもネパールにも、それぞれ改善していくべき課題があることが分かった。もっと学び、自分自身も課題に向き合い、みんなが笑顔で『いい国だ』と言える社会にしていきたい」といった記述が見られた。これらの記述から、課題に出会って「かわいそう」と感じるだけで終わるのではなく、自分にできることを考え、行動につなげようとする意識をもった児童が多くいたと考えられる。

3 次の実践者へのエール

- ◇ 実際に現地を訪れ、自分の目で見て感じたことを「生の声」として語りながら授業を行うことで、子どもたちはより前向きに学びに向かう姿が見られました。迷っている方がいたら、ぜひ一歩踏み出して挑戦してほしいと思います。
- ◇ 参加型の手法を取り入れることで、子どもたちはいきいきと学び、主体的に活動に関わるようになります。様々なアクティビティを取り入れ、子どもたちと楽しみながら実践してみてください。

4 参考文献・資料

- 1) 『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』 2020年、JICA 中部

以上

違いを知り、同じ願いへ

所属	愛知県津島市立藤浪中学校	実践者	野田 琴乃
対象	中学校1・2年生(179名)	実践日	2025年12月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	4時間×3クラス
テーマ	多様性理解・共生・コミュニケーション		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とネパールの違いを考え、誰もが大切にされる存在であることと、そのための方法を学ぶ。 ・日本で働く外国人の思いや現状を知り、共に生きていくために自分達にできることを考える。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1年 1回	「いろんな違い」 <ul style="list-style-type: none"> ・シンキングボウルとリンの音色を聞き、違いを感じる。 ・ネパールと日本の違いを、あってもいい違いと、あると危険な違いに分け、グループで理由を話し合う。【対比表】 ・トピを被ったネパール人が電車で受けた心無い言葉のニュースを読み、感じたことを共有する。 ・世界人権宣言を読み、あってもいい違いは認め合い、あると危険な違いはなくしていくべきものだと考える。 	【使用教材】 <ul style="list-style-type: none"> ・ネパールで撮影した写真・映像 ・現地で購入した教材 ・ニュース記事 ・世界人権宣言資料 ・アクションプラン ・PPTスライド ・ワークシート ・違いカード ・事例カード ・模造紙 ・付箋 ※授業内容に応じて適宜活用
	2回	「私もあなたも大切にするには」 <ul style="list-style-type: none"> ・成長や経験とともに、思考や意見が増えることに気付く。【プレスト】 ・3つのコミュニケーション(アグレッシブ・ノンアサーティブ・アサーティブ)を続けると、どのような結果に繋がるか考える。【派生図】 ・課題に対するアサーティブな答え方について、私メッセージを参考に各自で考え、ペアで実践する。【シミュレーション】 ・今日から自分ができる行動を考える。【行動宣言】 	
	2年 1回	「彼らの未来、どんな未来？」 <ul style="list-style-type: none"> ・ネパールと日本は繋がっていると感じる。【クイズ】 ・日本で働きたいネパールの人の映像を見て、彼らの思いや未来を想像する。【フォトランゲージ】 ・私たちが世界で働く立場になった場合を想定し、楽しみなことと不安なことを整理する。【対比表】 ・日本は自国の力でだけで成り立っていないと感じる。【クイズ】 	【参考資料】 <ul style="list-style-type: none"> ・毎日新聞(2025.10.2) ・アムネスティ日本 ・『参加型アクティビティ集』NIED・国際理解教育センター ・『SDGs 実践資料集』開発教育研究会
	2回	「みんなで創ろう！みんなの居場所」 <ul style="list-style-type: none"> ・在留外国人の事例を読み、よりよい未来を共に創っていくためにできることを考える。【ブレインストーミング】 ・在留外国人が感じる3つの壁(言葉・心・制度)を学び、考えたアイデアがどの壁に関わるのか整理する。【ベン図】 ・日本語学校の先生のメッセージ動画とアクションプランを読む。 ・2時間の授業の振り返り、自分ができる行動を考える。【行動宣言】 	
成果	子どもたちは、自分たちの当たり前が世界共通ではないことに気付き、他国の文化や背景に目を向ける姿が見られた。特に、映像や参加型の活動を通して、在留外国人やネパールの人々の思いを自分事として捉えようとする様子があった。相手の立場を想像しながら関わろうとする意識の芽生えが見られた。		
課題	授業時数が限られている中で、伝えたい内容を十分に厳選しきれず、広く浅い学びになってしまう場面もあった。今後は、目の前の子どもたちにとって最も大切にしたいねらいを明確にし、子どもたちの素朴な疑問や発言を丁寧に拾いながら、対話を通して考えを深めていける授業展開を目指したい。		
備考	実践した授業は、学年職員にも見ていただき、学んだ内容が日常生活でも繰り返し意識できるように声掛けを依頼した。また、授業内容を保健便りに掲載し、生徒へのフィードバックと保護者への紹介を行った。		

[授業実践の詳細]

1

時限目「いろんな違い（1年生）」

この時限のねらい

- ・ネパールと日本の文化や生活の違いを知り、互いの「当たり前」について考える。
- ・世界人権宣言を通して、認め合うべき違いとなくしていくべき違いが保障されていることを理解する。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレイク「違いを耳で感じる」

- ・シンキングボウルとリンの音色を聞き、それぞれの違いを感じる。

② 違いを分けよう

- ・グループで話し合い、違いカードを「あっていい違い」と「あると危険な違い」に分類する。【対比表】
- ・ギャラリー方式で他のグループの意見を確認し、再考する。
- ・判断に迷ったカードの理由を発表し、ネパールと日本の文化を踏まえて、どちらの違いに当たるか再度考える。

③ ニュースの違い、どう思う？

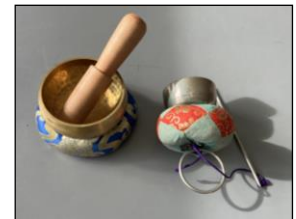
- ・トビを被って電車に乗っていたネパール人が、「ここは日本だから海外の文化を持ち込まないで」と言われたというニュースを読み、感じたことを共有する。

④ 違いを認め、なくすための世界人権宣言

- ・世界人権宣言の資料を使い、認め合うべき違いとなくしていくべき違いを考える。

⑤ 今日から自分ができること

- ・今日から自分ができる行動を考え、授業を振り返る。【行動宣言】



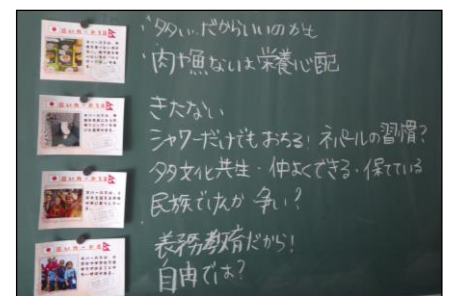
<シンキングボウルとリン>



<対比表に取り組む生徒の様子>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「牛肉が食べられないのはかわいそう」「お風呂に入らないのは不衛生」という意見が多く出た。宗教や文化、生活背景を知り、他国の当たり前をあっていい違いとして捉え直すことができた。
- ◇ 「様々な国や文化を調べたい」「他国の当たり前を知り、差別しないようにしたい」など、世界への関心が高まっていた。
- ◇ 「勉強は好きではないけれど、学校に通えない子がいるのに、自分がやらないのはよくないと思った」といった、今の環境に感謝し、自分の生活を見直そうとする姿も見られた。



<対比表で悩んだ内容の整理>

3 使用した教材

<教材1> 授業用スライド(左)・授業用ワークシート(中)

<教材2> ネパールで撮影した写真を元に作成した違いカード(右)

<教材3> ネパールで購入したシンキングボウルと日本のリン・ネパールで汲んだ水(ペットボトル)



2 時限目「私もあなたも大切にするには（1年生）」

この時限のねらい

- ・ 3つのコミュニケーションの特徴を知り、自分も相手も大切に伝える伝え方について考える。
- ・ 私メッセージを基にしたアサーティブな伝え方を理解し、実践できるようにする。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレイク「たくさん出せた人が勝ちゲーム」

- ・ 「夏と言えば」で連想するものを、3分間でできるだけ多く出す。【ブレインストーミング】
- ・ 成長とともに知識や経験が増えることで、意見や考え方に違いが生まれることを確認する。

② 意見が違うときは、どんな伝え方がいいのかな？

- ・ 3つのコミュニケーション（アグレッシブ・ノンアサーティブ・アサーティブ）について知り、どの伝え方が望ましいか、また自分が日頃の伝え方をしているか振り返る。
- ・ それぞれのコミュニケーションを続けた場合に、どのような結果に繋がるか考える。【派生図】
- ・ ギャラリー方式で他のグループの派生図を確認し、プラスの共感には星印を、マイナスの共感には涙印を付ける。

③ アサーションマスターを目指そう！

- ・ アサーティブな伝え方の要素として、私メッセージを知る。
- ・ 課題に対するアサーティブな伝え方を考え、ペアで実践する。【シミュレーション】
- ・ アサーティブな伝え方を受けたときの感じ方について、ペアで共有する。

④ 今日から自分ができること

- ・ 今日から自分ができる行動を考え、授業の振り返りを行う。【行動宣言】

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 「アグレッシブははっきりしていて私は楽」「ノンアサーティブは傷つかななくて済む」など、子どもたちの率直な意見が多く出た。その後、派生図を用いた活動を行い、ギャラリー方式で印を区別して示したことで、それぞれの伝え方が自分や周囲に与える影響を視覚的に捉えることができた。その結果、アサーティブな伝え方が最も望ましいことに納得する様子が見られた。

◇ 感想には、「喧嘩すると口調が強くなるので気を付けたい」「相手の気持ちを考えて話したい」など、日常の自分の言動を振り返る内容が多く見られた。また、友人関係の相談で保健室を利用した生徒への対応場面においても、授業内容を思い出し、私メッセージを意識して解決しようとする姿が見られ、学びを実生活に生かそうとする様子が見られた。



<派生図に取り組む生徒の様子>



<アグレッシブを続けた時の派生図>

3 使用した教材

<教材5> 授業用スライド(左)・授業用ワークシート(右)



3 時限目「彼らの未来、どんな未来? (2年生)」

この時限のねらい

- ・日本で働きたいと考えるネパールの人々について知り、日本に来てからの暮らしを想像する。
- ・同じ立場だったらどのように感じるかを考え、母国を離れて働くことの楽しさや不安の想像を深める。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレイク「つながりクイズ」

- ・食べ物の写真を見て、ネパールと日本のどちらで撮影されたものかを考える。【クイズ】

② 彼らの未来、どう想像する?

- ・日本で働きたいと考えるネパールの人々の映像や写真を見る。【フォトランゲージ】
- ・日本で働いた場合を想像し、幸せに感じそうなことと苦勞しそうなことを数値化して表す。

③ 自分だったら楽しみ? 不安?

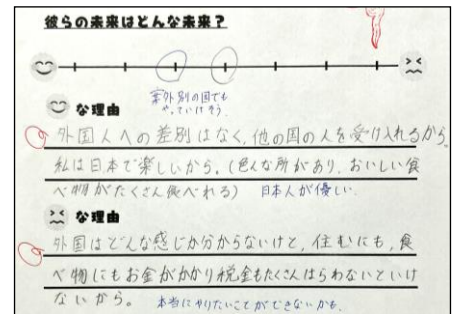
- ・今世界で働くことになったら、どのような気持ちになるか、楽しみなことと不安なことを書き出す。【対比表】
- ・ギャラリー方式で他グループの対比表を確認し、共感できる意見には星印を書く。

④ すき焼きクイズ

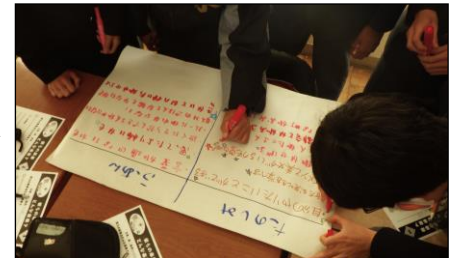
- ・他国を全く頼らなかった場合に食べられる食材の少なさに気づき、日本は日本だけで成り立っている国ではないことを知る。【クイズ】

⑤ ふりかえり

- ・本時の感想を書き、次時の授業内容について予告をする。



<幸せ感と苦勞感のワークシート>



<対比表に取り組む生徒の様子>



<すき焼きクイズのスライド>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 現地で撮影した「日本へ行くのに不安なことはない」とネパールの人々が話す映像に驚く声上がり、「不安がないのがすごいと思った」「日本を信頼しているのだと思った」「日本に来てくれて嬉しい」など、ネパールの人々を尊敬し、日本を誇りに思う気持ちを感じられた。
- ◇ 当初は「夢が叶うから幸せ」「日本は優しい人が多いから安心」と前向きな意見が多かったが、対比表で自分事として考える中で不安や苦勞にも目を向け、「自分だったら行く決断はできない」「大変なことも多いと思う」など、在日外国人の立場を想像する姿が見られた。
- ◇ すき焼きクイズを通して、「多くの国や人に支えられている」「日本は他の国を支えているのか気になる」「日本のよさを伝えたい」など、日本と世界の繋がりに気付く感想が多く見られた。

3 使用した教材

<教材6> 授業用スライド(左)・授業用ワークシート(右)



4 時限目「みんなで創ろう！みんなの居場所！（2年生）」

この時限のねらい

- ・在留外国人が抱える困り感や日本での生活の現状を知る。
- ・3つの壁を知り、共に生きていくために自分たちにできることを考える。

1 子どもの活動の流れ

① 日本で暮らす彼らの現状

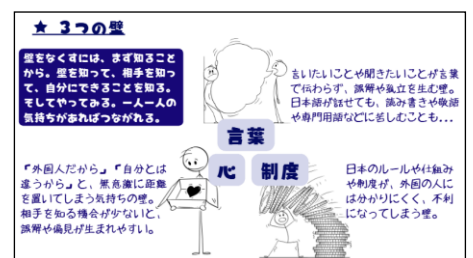
- ・ 在留外国人の事例資料を読み、誰が(何が)どうすれば、よりよい未来を共に創れるかをグループで話し合い、意見を出す。【ブレインストーミング】
- ・ 各グループに1つずつ事例を提示し、順に回覧しながら、3つの事例について考える。

② なくしたい3つの壁

- ・ 3つの壁(言葉・心・制度)について知る。
- ・ グループで出したアイデアが、どの壁に関わるものか整理し、分類する。【ベン図】
- ・ 各壁をなくす方法を更に考え、ベン図に書き足す。
- ・ ギャラリー方式にて他グループのベン図を確認し、共感できる意見には星印を付ける。

③ 今日から自分ができること

- ・ 日本語学校 (Yokohama Japanese Language Academy) の寺本先生のインタビュー動画を視聴する。
- ・ アクションリストを紹介する。
- ・ 今日から自分ができる行動を考え、授業の振り返りを行う。【行動宣言】



<在留外国人が感じる3つの壁>



<プレストする生徒の様子>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ベン図で分類を進める中で、「言葉の壁」に関する意見が出ていないことに子どもたち自身が気づき、「これでは壁がなくていい」「新しく考えよう」と、教師の指示を待たずに自ら付箋紙を付け足す様子が見られた。
- ◇ 「遅延証明書を持ってきてもらえばよい」「安い食材で節約料理を作ったらどうか」など様々なアイデアが出た。一方で、「そもそもその手段を知っているのだろうか」と疑問の声も挙がり、自分たちの当たり前が在留外国人にとっては当たり前ではないことに気付くことができた。
- ◇ 英語で話しかけることや、書類・表示を英語表記にするなどの意見に触れ、英語の重要性に気付く子どもが多く、「英語をしっかりと勉強しようと思った」といった感想が多く見られた。



<3つの壁を整理したベン図>

3 使用した教材

<教材7> 授業用スライド(左)・授業用ワークシート(中)

<教材8> 事例カード(右)



5 時限目「それって誰のため? (3年生)」

この時限のねらい

- ・支援や思いやりは、相手を理解しようとする姿勢が大切であることに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① 想いの先には

- ・贈り物に何を選ぶか、落ち込んでいる人にどう接するかについての価値観を共有し、どの選択にも「相手のことを考えている」という共通点があることに気付く。【4つのコーナー】

② 国際協力だって同じ

- ・英語の単元で扱った「アフガニスタンの子どもたちにランドセルを寄付した」話を振り返る。

③ その文房具、どうして売ったの?

- ・シャプラニール事務所で横田氏から聞いた、「寄付をした文房具が翌日、質屋で売られていた」という話を聞き、送り手の思いと受け手の事情について考え、書き出す。【対比表】
- ・ネパールに関する資料を読み、受け手の事情を書き加える。【分担読み】
- ・ギャラリー方式で他グループの考えを共有し、自分たちにはなかった視点に星印を付ける。
- ・「どうして思いはすれ違ったのか」「どのような支援がよいか」について、考えや気づきを共有する。

④ 支援や思いやりは相手を理解するところから

- ・授業の振り返りを行い、卒業を控えた3年生へ向けた養護教諭からのメッセージを聞く。

送り手の思い	受け手の事情
<ul style="list-style-type: none"> 勉強のために使って欲しい。 → 発展のため 使わない文房具と混ざらない。 いい大人になしてほしい。 勉強の教える人* 	<ul style="list-style-type: none"> 生活でお金がない 勉強の教える人がいない。 勉強する場所がない。 働いていて勉強する時間がない。 安全に勉強できる場所がない(防災対策も手配がなされていない)。 学校は寄付と設備が整っていない。 学校に通うために、親が即ち教員の関心がない。 カニ下り制度で働く勉強を教えるか? 勉強を教える海地* 教員、富集が理解されている。 政府が教員を力を入れている。

<それぞれの立場の対比表>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 対比表に取り組む中で、「受け手の事情はどうなのだろう」という疑問をもち、資料の必要箇所に線を引きながら読み進める姿が見られた。その後、「日本にとっての当たり前と、他の国の当たり前は違うのかもしれない」「勉強した方が将来に役立つという発想がないのかも」など、自分たちの基準で物事を考えていたことに気付く発言が見られた。
- ◇ 「水を得るために時間を費やしているならダムを支援しよう」「ネパールの人にも日本の当たり前を知ってもらうために、日本に来てもらおう」など、相手の状況を考えた意見が出された。
- ◇ 「農作物などの支援をしても、それを担うために子どもが使われてしまうのではないか」「仕事はかどるように、少し良い機械を送ったらどうか」「でも、それも結局お金に換えられてしまうのではないか」など、支援が別の問題を生む可能性を考え、支援の難しさに気付く姿が見られた。
- ◇ 「水道管を整える」「一緒につくる」「壊れた後の直し方を教える」など、支援は渡して終わりではないことに気づき、支援した後のことまで考える意見が出された。

3 使用した教材

<教材9> 授業用スライド(左)・授業用ワークシート(右)

<教材10> 参考文献(⑤⑥⑦⑧)をもとに作成したネパールについての資料



[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対 象	全校生徒	実践日	2025年8月
実践教科	学活	時間数	20分(オンライン)
実践内容	<p>◇写真や動画を用いて、ネパールの地理や宗教、文化の魅力を紹介した。</p> <p>◇ネパールの交通を支える日本人の活動や、日本で活躍するネパール人を紹介し、国を越えた繋がりに気付かせた。</p> <p>◇JICA 海外協力隊員（仲本さん）の動画を通して、日本やネパールに共通する「思いやり」「マヤの心」の大切さを伝えた。</p>		



<その他の実践その②>

対 象	全校生徒・職員・保護者	実践日	2025年10月
実践教科	文化祭作品展	時間数	(展示)
実践内容	<p>◇ネパールで出会った人とその人の夢を紹介する写真や、現地の楽器を展示した。(ネパール BOX 活用)</p> <p>◇LOVE GREEN NEPAL の活動を紹介し、生徒会の緑の募金活動の意義や人の繋がりによって成り立つ支援を伝えた。</p>		



<その他の実践その③>

対 象	津島市内養護教諭 12 名 海部地区養護教諭 17 名	実践日	2025年10月～11月
実践教科	養護教諭研修会	時間数	20分(2回)
実践内容	<p>◇ネパールの健康問題や学校における健康を支える体制の実際と、日本の保健室の役割や意義について紹介した。</p> <p>◇健康な生活と不健康な生活を対比表で考える実践を示し、参加型の手法が保健教育を自分事にできる可能性を紹介した。</p>		



<その他の実践その④>

対 象	海部地区養護教諭 19 名	実践日	2026年2月
実践教科	養護教諭研修会	時間数	30分
実践内容	<p>◇JICA 海外協力隊員（仲本さん）のエピソードをもとに、支援がすれ違った背景を因果関係図で整理し、国際支援や教育支援に必要な視点について考えた。</p> <p>◇参加型の手法を実際に体験し、保健教育に取り入れる具体的なイメージを共有した。</p>		

<周りへの波及活動>

- ◇ 本実践を円滑に行うため、事前から周囲の教職員の理解と協力を得ることを意識してきた。昨年度に開発教育指導者研修（実践編）を受講していたことを生かし、これまでの授業実践や報告フォーラムの経験を共有しながら、本実践のねらいや意義を伝えてきた。今年度は、職員向け通信を定期的に発行しているため、ネパールに関するコラムも掲載し、日常の中で関心を広げる工夫

を行った。

- ◇ 実践後には、ほけんだより特別号を作成し、授業内容や子どもたちの感想、学びの変化を保護者や教職員に伝えた。また、他校の養護教諭から声をかけていただき、養護教諭研修会で実践を紹介する機会を得た。養護教諭として教師海外研修に参加し、現地の経験に生かした実践であることや、参加型の手法が保健教育にも応用しやすい点を伝えることで、各校での取り組みのヒントとなることを意識した。

2 実践の総括

- ◇ 本実践を通して、子どもたちは私たちが想像している以上に、世界の多様な「当たり前」を知らず、日本を基準とした価値観の中で生活していることが見えてきた。子どもたちは素直で思いやりのある存在である一方、他の世界を知らないままでは、本人が気付かないうちに誰かを大切にできない関わり方に繋がってしまう可能性があると感じた。だからこそ、成長の途中にある今の段階で、様々な世界や立場に触れる機会を意図的に設けることの重要性を実感した。
- ◇ 一方で、限られた授業時数の中で多くのことを伝えようとすると、内容が広く浅くなってしまい、子どもたちの発言や思考を十分に拾い切れない難しさもあった。伝えたいことを確実に届けるためには、より段階的な構成を意識する必要があると感じている。そのため、養護教諭一人が完結して行う授業にとどめるのではなく、本実践で発信した内容を学年職員や保護者と共有し、日常の関わりや対話へとつなげていくことで、次の学びへとバトンを渡していきたい。


3 次の実践者へのエール

- ◇ 昨年度に開発教育指導者研修（実践編）を受講していたことで、授業実践のイメージをもった状態で教師海外研修に参加することができた。現地を五感で感じ、その場で授業構想を組み立てることも可能であるが、あらかじめ視点やアイデアをもって参加すると、研修中の気付きや教材収集がより深まると感じた。事前にイメージをもつことで視野が狭まるのではないかという不安もあったが、それを上回る新たな発見や感動があり、準備して臨むことの大切さを実感した。
- ◇ 応募資格があり、「やってみたい」と感じた方には、ぜひ挑戦してほしい。養護教諭は授業を担当する機会が少なく、少数派であることから、当初は不安も多かった。しかし、思い切って応募して参加したことで、「私にしかできない実践がある」と強く感じるようになった。教員としての教育観や実践力が高まっただけでなく、自分自身を見つめ直し、教員として、また一人の人として成長することができた研修であった。

4 参考文献・資料

- 1) 毎日新聞 (2025.10.2) 『電車で急に心ない言葉 来日 25 年、ネパール人が震えた「初の恐怖」』
- 2) アムネスティ・インターナショナル日本 (2026) 『イラストから考える世界人権宣言』
- 3) NIED・国際理解教育センター (2018) 『よりよい未来をともに創る参加型アクティビティ集』
- 4) 開発教育研究会 (2022) 『SDGs 実践資料集 身近なことから世界と私を考える授業Ⅲ』
- 5) 財団法人 愛知県国際交流協会 (2010) 『私たちの地球と未来 ネパール連邦民主共和国』
- 6) World Vision (2026) 『ネパールの貧困原因は教育格差？ネパールの貧しい子どもを支援する方法』
- 7) World Vision (2026) 『ネパールの教育 制度や現状、裏に潜む社会問題まで詳しく解説！』
- 8) 朝日新聞 (2025.5.2) 『牢屋のようなカーペット工場で働いた少年 変わる社会と新たな課題』 以上

ネパールへ冒険！お宝ゲット大作戦！～つながる・考える・伝え合う～

所属	愛知県社会体験型研修員（刈谷市立亀城小学校）	実践者	橋本 幹子
対象	一般公募：小学1年生～中学生参加 （29名応募27名参加）	実践日	2025年11月
実践教科	刈谷市国際交流協会事業 小中学生のための国際理解講座 「世界をのぞこう」～ネパール編～	時間数	2時間
テーマ	異文化理解、自己の確立、コミュニケーション		
ねらい	1. 世界の多様性に触れ、新しい文化を知ることへの関心を高める。 2. ことばや文化の違いを乗り越え、伝えあう経験を通してコミュニケーション力を高める。 3. ネパールの暮らしや文化にふれ、自分とは異なる背景をもつ人への理解を広げる。		
実践内容	回	プログラム	備考
		<p>■なかよしミッションに挑戦だ！【アイスブレイク】</p> <p>① 自己紹介ミッション ☆異文化の言葉で伝える楽しさを味わい、自分から関わろうとする。 ・初対面の人とあいさつをし、ネパール語で自己紹介。 ・ネパール語シールを交換し、言葉のやりとりを楽しむ。</p> <p>② 4つのコーナー ☆ネパールに肯定的に出会い、「もっと知りたい」気持ちをもつ。 ・写真や体験談を通して、他国や異文化に親しむ。</p> <p>■もっと！！なかよくなろう♪ミッション&クイズでお宝シールゲットだぜ！ 【ブレンストーミング・フォトランゲージ・ジクソー法・対比表・ポップコーン方式】 ☆写真や体験談から問いをもち、考えることを楽しむ。 ☆仲間と協力し、多様な見方に気づく。 ・チームでミッションやクイズに挑戦し、ネパールコレクションシールを集める。</p> <p>■ネパールティーでブレイクタイム♪ ☆一息つきながら、感想を交流し、次の活動への意欲を高める。 ・ネパールティーを飲みながら自由に話す。</p> <p>■ネパールへ出国！お宝情報ゲットだぜ！ 【フィールドワーク・ジクソー法】 ☆興味関心をもとに情報を選び、主体的に学ぶ。 ・4つのブースから2つ担当をもち、気になるテーマを調べる。 ・学年に応じた「記者ミッション」に挑戦。</p> <p>■見てみて！みんなに伝えたい自分の記事！【ピアレスポンス・ギャラリー法】 ☆発見を伝える喜びを味わい、視点の相違に気づく。 ☆他国にも課題があることを知り、未来を考え始める。 ・グループ内で発表し、リアクションシールで反応。 ・ギャラリー法で他チームの記事を見てリアクションシール交流。</p> <p>■友達のお宝を確認しに行こう！【フィールドワーク】 ☆友達の学びから、自分の学びを広げる。 ・まだ見ていないブースを訪れ、新たな発見をする。</p> <p>■自分だけのタルチョづくり【ランキング・自己表現・ふりかえり】 ☆学びを整理し、自分の言葉で未来につなげる。 ・初めて知ったことや心に残ったランキングなど、自分の想いや未来への想いをタルチョに書き、オリジナル作品を完成させ、共有する。</p>	<p>ネパールあいさつシール ※一人一語担当 ◀オリジナルバスポート▶  ミッションシート 写真10枚セット ネパールコレクションシール ◀ネパール部屋▶  文化・町・食・衣情などの文章 ネパール情報や写真・シール 民族衣装、チュンギ 新聞・新聞和訳シール ネパール夢カード スパイス(嗅覚) 民族音楽演奏(聴覚) ネパールBOX タルチョカード 木彫りスタンプ リアクションシール 麻ひも など くすみボタンお土産セット </p>
成果	ネパール語での自己紹介やミッション活動を通して、異文化を「特別なもの」ではなく身近な存在として受け止める姿が見られた。時間が来ても活動を続けたがる子どもたちの姿からは、関心の高まりと主体性がうかがえた。また、年齢の異なる仲間と関わりながら、自分の考えを伝え、相手の話を聞く経験を重ねることで、自己を表現しようとする意識やコミュニケーション能力の向上が見られた。		
課題	参加者の発達段階の違いや、活動内容が豊富であったため、集めた情報を十分に整理・深掘りできない場面があった。特に記者ミッションやお宝記事づくりでは、考えを深めるための時間確保や視点の絞り方に工夫の余地がある。自分なりの課題を見つけて探究へとつなげる視点の提示や、まとめにかけられる時間配分、学年差に応じた支援の工夫が今後の課題である。		
備考	一回限りの講座のため、楽しさの中に学びが自然に組み込まれるように、体験・対話・表現を組み合わせた構成を意識した。学校現場に戻った際には、学年や発達段階に応じた形で再考し、探究的な学びとして実践したい。		

[授業実践の詳細]

1 「なかよしミッションに挑戦だ！」

この時限のねらい

- ・異文化の言語を使って伝える楽しさを味わい、初対面の人とも自分から関わろうとする。
- ・ネパールと肯定的に出会い、「もっと知りたい」気持ちをもつ。

1 子どもの活動の流れ

● 自己紹介ミッションだ！何個ネパール語シールを集められるかな？

- ・パスポート手帳を受け取り、ネパール語のあいさつの仕方と自分が担当するネパール語シールを確認する。
- ・まずは、グループ内でネパール語を使って初めて会う仲間と自己紹介を行う。自分が担当するネパール語（例：こんにちはは、ナマステです）も相手に伝え、ネパール語とシール交換を楽しむ。
- ・グループ内での交流後、教室全体へ交流範囲を広げ、より多くの友達や来場している大人とも交流を広げる。

【挨拶とシール交換を楽しむ子ども】



【みんなちがう ネパール語シール例】



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 活動開始直後は、知らない相手に声をかけることに戸惑い、近くの友達同士でのやり取りに留まる姿も見られた。しかし、シール交換という明確な目的があることで、「言ってみよう」「伝えてみよう」と少しずつ行動する子が増えていった。言葉が伝わると自然に笑顔が生まれ、次第に自分から相手を探して歩き回る姿へと変化していった。活動後半には、初対面同士でも自然に会話が生まれ、関係ができていく様子が見られたことは大きな成果であった。
- ◇ 小学校一年生から中学生まで幅広い年齢層の参加者がいたが、年齢差を意識することなく自然な交流が生まれていた点も印象的であった。年上の子が優しく教えたり、年下の子が勇気を出して声をかけたりする姿も見られ、言葉をきっかけにした関係づくりが自然に行われていた。また、大人の参加者にも積極的に話しかける子どもが増え、相手の立場や年齢に関係なく交流を楽しもうとする姿が広がった。活動を通して、異文化交流だけでなく、人と関わる楽しさそのものを感じ取っている様子が見られた。
- ◇ 活動終了後も、手帳を手に持ったまま交流を続ける子どもたちの姿が休み時間にも見られたことは特に印象に残っている。子どもたち自身が「もっと集めたい」「もっと話したい」と自発的に動き続けていたことから、活動が一時的なイベントではなく、子どもたちの内発的な意欲につながったと感じられた。

【パスポートの中：メモ帳・ネパール語シール】



3 使用した教材（全てオリジナル）

<教材1>ネパール行きパスポート手帳

<教材2>ネパール語の簡単なあいさつや単語シール

2 「もっと知ろう♪ 好き！から始まる異文化理解 4つのコーナー」

この時限のねらい

- ・参加者同士互いの好みや関心を共有し、その後の交流活動を円滑に進めるための関係づくりを行う。
- ・ネパールの文化や生活、人々の様子に触れ、異文化に対する親しみと興味関心を高める。
- ・写真や実体験談を通して、世界の魅力と同時に課題にも目を向け、多角的に物事を考える視点を育てる。

1 子どもの活動の流れ

● 自分の好き！を見つけて、部屋の4つの角に分かれる！

- ・ネパールの写真や動画を見て、国の様子や文化について知る。
- ・「食べてみたい料理」「私が出会ったすてきな人」「びっくりしたこと」「行ってみたい場所」などのお題ごとに4つの選択肢の中から自分がよいと思うものを選び、そのコーナーへ移動する。
- ・インタビューを通して、いろいろな好みや価値観があることを知る。
- ・ネパールの魅力だけでなく課題についても知り、国や文化について多面的に考える。

【お題の例:え！すてき人！】



【課題提示の例】



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 部屋の四隅への移動という身体を使った活動を取り入れたことで、子どもたちは楽しみながら自分の考えを表現していた。同じ場所に集まった子ども同士で自然に会話が生まれ、「どうしてそれにしたの？」と理由を聞き合う場面も見られた。自分の好みや関心を共有することが交流のきっかけになることを体験できた点が成果である。
- ◇ ネパールの料理や文化、人々の暮らしを紹介する中で、「こんな食べ物があるんだ」「この町に行ってみよう」といった声が多く聞かれ、遠い国の出来事としてではなく、自分の関心と結びつけながら理解する姿が見られた。また、日本との違いに驚きながらも否定的な反応ではなく、「面白い」「すごい」と肯定的に受け止める様子が多く、異文化への心理的な壁を低くするきっかけとなったと感じられた。
- ◇ エベレストの環境変化などの話題を紹介した際には、「世界一の山にも課題があるんだ」「温暖化にならないようにしないといけない」といった反応も見られ、楽しいだけでなく考えるきっかけにもなっていた。世界のどこにでも課題が存在することを知り、世界をより多面的に見る視点が生まれていた点も成果である。楽しさを入口にしながら、世界の現状にも関心を向けるきっかけづくりにつながった活動であった。

【4つのコーナーインタビュー時の様子】



3 使用した教材

<教材3>ネパール紹介写真および動画 PowerPoint

3 「もっと！！なかよくなろう♪ ミッション&クイズでお宝シールゲットだぜ！」

この時限のねらい

- ・写真やクイズ、体験談を通してネパールの文化や生活に興味をもち、問いをもったり、自分から考える学びを楽しんだりする。
- ・仲間と協力して課題に取り組み、対話を通して自分とは異なる考えや見方に気づき、多様な意見を認め合う態度を育てる。

1 子どもの活動の流れ 【フレンストーミング・フォトランゲージ・ジグソー法・対比表・ポップコーン方式】

- チームでミッションやクイズに挑戦し、ネパールコレクションシールを集めよう！

【ミッション1:ネパール語の数字に挑戦】

【ミッション2:ネパールの年は何年？クイズ】

- ・日本との違いや、国によって数字の表し方が異なることを知る。

【ミッション3:ジェスチャーの意味を考えよう】

- ・ネパールのジェスチャーの意味について、思いつく答えをチームでたくさん出し合う。
- ・仲間の意見を聞きながら、さまざまな考え方に触れる。

【ミッション4:交通の様子を比べよう】

- ・ネパールの交通写真を見て、日本との同じ点や違う点を見ただけ多く見つける。
- ・気づいたことをチームで伝え合い、意見をまとめる。

【ミッション5:正しいジェスチャーを考えろ！】

【ミッション6:どこの国の写真か推理せよ！】

- ・写真を見て、日本かネパールかをチームで話し合いながら考える。理由を説明し合い、写真から分かることを共有する。

【子どもたちが欲しくなるようなコレクションシール全100種類】



【ミッション&クイズ シートの一例】



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ チームで協力して問題を解く活動を通して、「こうじゃない?」「それもありだね」と互いの考えを認め合う場面が増え、仲間の意見を受け止めながら活動を進める姿が見られた。自分の意見を安心して言える雰囲気生まれ、笑顔で話し合う姿が印象的であった。
- ◇ 写真やクイズを通して、日本とネパールの共通点や違いに気づき、「同じところもあるんだ」「全然違うね」と驚きや発見の声が多く聞かれた。遠い国の出来事としてではなく、自分たちの生活と比べながら理解する姿が見られ、異文化への興味や関心が自然に高まっていた。
- ◇ ミッション形式で活動を進めたことで、子どもたちはゲーム感覚で意欲的に取り組み、友達と協力して楽しむこと自体を楽しんでいた。正解だけを求めるのではなく、「たくさん考える」「違いを楽しむ」といった活動の目的が共有され、考えることそのものを楽しむ姿勢が育っていた。

【楽しみながら学ぶ子どもたち】



【チームで協力する様子】



3 使用した教材（全てオリジナル）

＜教材4＞ミッション&クイズ シート(全6問)

＜教材5＞現地と日本で撮影した写真 10 枚セット

＜教材6＞ネパールコレクションシール

4 「ネパールへ出国！お宝情報ゲットだぜ！」

この時限のねらい

- ・ネパールの文化や生活に関する展示の中から、自分の興味や関心に応じて情報を選び、主体的に学ぶ姿勢を育てる。
- ・調べて分かったことや感じたことを記事としてまとめ、友達に伝えることで、学びを共有する楽しさを味わう。
- ・友達の発見や考えに触れることで、多様な視点に気づき、自分の学びをさらに広げる。

1 子どもの活動の流れ

① 出国してネパールを探検しよう！

【フィールドワーク】

- ・ネパールの部屋にある4つのブースの中から、自分が調べたいブースを2か所選び、班で分かれて探索する。
- ・展示された衣装、楽器、動画、スパイス・町や学校の様子、新聞記事・チュンギーなど五感を使って情報を集める。
- ・学年に応じた「記者ミッション」に挑戦し、興味をもった展示について、対応するシールを画用紙に貼り、分かったことや感じたことを記事としてまとめる。

- 1・2年生 : シール集め（パスポートにコレクションシールを貼ることも可）
- 3・4年生 : 事象に対し、コメントを記す。
- 5・6・中学生 : 事象と事象をかけ合わせて考えたり、新たな課題を見つけたりする。

【ネパール部屋の様子】



【真剣にお宝を探す子ども】



② 見てみて！みんなに伝えたい自分の記事

【ピアレスポンス・ギャラリー法】

- ・自分が担当したブースで作成した記事を班の仲間を紹介する。

- ・友達の記事を聞き、「いいね」「すごい」「なんで？」などのリアクションシールを貼り合い、互いの発見を共有後、他の班の記事も見て回り、気づいたことや感想をシールで伝える。

③ 友達のお宝を確認しに行こう！

- ・友達の紹介を聞いて興味をもった展示や、まだ見ていないブースを見に行く。
- ・さらに気づいたことや発見したことを新しい記事としてまとめ、お宝カードを増やしていく。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 子どもたちは展示物を自由に見たり触れたりしながら、「これ面白い」「もっと知りたい」と自分の興味をもとに見学を進めていた。
- ◇ 自分の記事を友達に紹介する場面では、「それ知らなかった」「そこ見てなかった」といった反応が多く見られ、伝えることの楽しさとともに、友達の発見から新しい気づきを得る様子が見られた。リアクションシールを通して、さまざまな感じ方や考え方があることにも気づいていた。
- ◇ 友達の発表を聞いた後に再び展示を見に行く子どもも多く、他者の学びが自分の新たな探究へとつながっていた。ネパールの文化の魅力だけでなく、洪水や児童労働などの課題にも目を向け、「楽しさ」と「考えること」の両方を含んだ学びへと広がっていった。

3 使用した教材

<教材7>ネパール紹介写真および動画

<教材8>JICA 中部 ネパール BOX

<教材9>現地で収集した教材(物品・動画・写真・資料など)と教材シール

<教材10>タルチョに見立てたカラフルな画用紙とひも(記事づくりに活用)

<教材11>リアクションシール(オリジナル)

【リアクションシール交流】



5 「自分だけのタルチョづくり — 学びを未来へつなぐふりかえり」

この時限のねらい

- ・これまでの活動で得た気づきや発見を整理し、自分の言葉で学びを表現する。
- ・自分の考えや感じたことを友達と共有し、互いの学びの違いやよさに気づく。
- ・ネパールとの出会いを通して得た学びを、自分のこれからの行動や未来への思いへとつなげる。

1 子どもの活動の流れ

① 学びを整理し、学びランキングとふりかえりをする

- ・これまでの活動をふりかえり、心に残ったことや初めて知ったことなどをランキング形式で整理する。
- ・ネパールについて感じたことや未来への思いを考える。

② 思いを未来へ！自分だけのタルチョづくり

- ・タルチョ型の画用紙に、自分の気づきや思いを書き込む。
- ・これまで作成したお宝記事とふりかえりをひもでつなぎ、オリジナルのタルチョ作品を完成させる。

【完成したお宝情報タルチョ】



③ 友達と学びを共有しよう

- ・完成した作品を友達と見せ合い、互いの発見や感じたことを伝え合う。
- ・友達の作品を見て、新たな気づきや学びを共有する。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 子どもたちは、自分が心に残った出来事や学びを思い出しながら、「これが一番楽しかった」「これがびっくりした」など、自分なりの視点で学びを整理していた。活動を振り返ることで、自分がどんなことに興味をもったのかを再確認する姿が見られた。
- ◇ 完成したタルチョを見せ合う中で、「そんなこと考えたんだ」「そこ気づかなかった」といった声も聞かれ、同じ活動でも感じ方や学び方が違うことに気づく様子が見られた。互いの作品を認め合いながら、対話を通して学びを深める姿が印象的であった。
- ◇ 活動終了後も、ネパールの展示を見続けたり、友達同士で情報交換やネパール語シール交換を続けたりする姿が見られ、イベントが終わっても学びや交流が自然に続いていた。今回の体験が、一時的な活動ではなく、子どもたちの興味や関心の広がりへとつながっている様子が感じられた。

3 使用した教材

<教材12>お土産:最後に手作りチュンギーとくるみボタン(現地で購入した布を利用)をプレゼント

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践>

対 象	岐阜県小学校 3 年生 48 名 4 年生 50 名、5 年生 51 名	実践日	2025 年 11 月
実践教科	多様性・共生理解プログラム	時間数	各学年 1 時間ずつ
実践内容	<p>【タイトル】 「いろいろあるから世界はおもしろい」</p> <p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近にある具体的なもの・ことから、多様性の存在とその豊かさに気づく。 ・多様性の受容を通じて、互いに尊重する意識を育む。 <p>【実践内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇各国の料理・国旗・住居・祭りなどを用いたアイスブレイクで興味関心を引き出す。 ◇ジグソー法によるクイズ活動で、「おなじ」と「ちがい」を楽しみながら理解する。 ◇ジェスチャーや言語、ユニバーサルデザインなど多様なテーマを扱う。 ◇絵本『せかいのひとびと』の読み聞かせで学びを整理する。 ◇授業の最後に、多様性や共生について振り返りをする。 		

【成果】

◇子どもの振り返りからは、多様性を自分事として受け止め、これからの行動につなげようとする姿が確認できた。また、違いを単に理解するだけでなく、その存在自体を価値あるものとして受け止め始めている様子がうかがえた。これらの振り返りから、子どもたちが「違い」を否定ではなく豊かさとして捉え、他者理解や共生への意識を深める学びにつながったことが分かる。

【子どもたちのふりかえりより】

田ごよ くうみ
心ごよ よこん
いれろ にかん
までこ かん
すすび たか
。てそ そそつ
きん しれ考
だらかぞえ
とはなれでこ
ぼん なしこ
くそ しめご
はれ

これからは「みんなちが、てみ
んないい」ということをい
して、自分とちがえも同
じでも木時と分かり合える
ようになりたい。「JICA」
は、世界のこまている人び
とを助けるボランティアだ
としてわたしもやってみたい
かな助けてあげたいなと思
いた。

<地域への波及活動>

- ◇ 所属校で、ネパール出身の大学留学生との交流活動（3・4・6年生）を行った。三年生は、来校する留学生を歓迎するため一人一枚ずつネパールの国旗を描いて歓迎し、ネパールで好きな季節を聞いて、それに合う日本の俳句を紹介した。さらに、伝統的な遊び「チュンギー」を教えてもらい、体験を通して文化の違いと楽しさを共有した。四年生は、日本の伝統文化紹介として「いろはかるた」対戦を行い、言葉遊びを通して交流を深めた。六年生は探究発表会（地域の人も参加）に留学生を招待し、日本や世界についての学びや未来への思いを伝えるとともに、私がネパール訪問時に届けた歌を生演奏で披露し、歓迎と感謝の気持ちを伝えた。
- これらの交流を通して、子どもたちは世界をより身近に感じ、自分たちの文化を見つめ直しながら、互いの違いを尊重する姿勢を育むことができた。また、学年を越えて学びが共有され、学校全体へ国際理解が広がる波及効果が見られた。

2 次の実践者へのエール

◇現地では多くの教材となる資料や実物、体験を得ることができたが、実際に帰国後、授業づくりや展示、パネル作成を進める中で、「もっと知りたかった」「記録しておけばよかった」と感じる場面も多くあった。訪問前の段階で、どの学年でどのように活用するのか、どんな場면을教材にしたいのかをより具体的にイメージして準備しておくことの大切さを実感した。特に、写真だけでなく、町の様子や学校生活、人々の動き、音や空気感が伝わる動画は、子どもたちの理解や関心を高める教材として非常に有効であると感じた。今回は動画の記録が十分でなかったことを悔やんでいるため、これから現地に向かう方には、日常のささいな場面も含め、積極的に動画として残しておくことを勧めたい。現地で出会う人々や出来事は、帰国後の授業で何度も生き返り、子どもたちの学びへとつながっていく。ぜひ、自分自身も楽しみながら、多くの「未来の教材」を持ち帰ってきてほしいと願う。

3 参考文献・資料

- 1) 絵本『せかいのひとびと』ピーター・スピーアー作 評論社

咲かそう！わたし・あなた・みんなの笑顔

所属	静岡県菊川市立六郷小学校	実践者	松本 双葉
対象	小学校5年生 (34名)	実践日	2025年 9月～11月
実践教科	総合的な学習の時間・学級活動	時間数	9時間
テーマ	多文化共生 国際理解		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と外国では、衣・食・住などの文化の違いがあることに気付く。 ・異文化の環境で生活する外国籍児童の困り感を理解し、適切に配慮して接する姿勢を育てる。 ・一人ひとり考え方が違うことに気付き、相手を理解し受け入れようとする気持ちを育てる。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	◆日本とは異なる国には、どんな文化があるのかな。 ・ネパールの民族衣装や、楽器を実際に着たり触ったりする。 ・日本と外国との違いを肌で感じる。 【4つのコーナー】	・ネパールボックス ・はい/いいえカード 
	2	◆ネパールの食べ物と日本の食べ物にはどんな違いがあるのかな。 ・外国のクイズ ・ネパールの食べ物の写真を食べてみたい順に並べる。 【フォトランゲージ・ダイヤモンドランキング】	
	3	◆「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」ってなんだろう。 ・ネパールの写真から、日本との生活の違いを比べる ・あっていい違いと、あってはいけない違いに分ける。 【フォトランゲージ、対比表】	・子供が考えた あっていいちがい 例 
	4	◆ネパールの人って幸せじゃないのかな。幸せってなんだろう。 ・自分にとっての幸せと、友達にとっての幸せを比べる 【二次元軸】	
	5	◆ラクスマンさんから学ぼう。外国の人と繋がってみよう。 ・ネパール人のラクスマンさんからネパールについて教えてもらう。 【オンライン交流】	
	6	◆文化が違って、みんな笑顔になるにはどうしたらいいのかな。 ・ネパールから来た転校生からのお願いについて考える。 【ロールプレイ・二次元軸】	・転校生からのお願いの例 
	7	◆外国で授業を受けるってどんな気持ちかな。 ・ブラジル人の先生によるポルトガル語の授業を体験する。 ・「外国のクラスに自分一人だけだったら」と考える。 【派生図】	・本校のポルトガル語通訳を担当する方に協力してもらう 
	8・9	◆みんなが笑顔になれる学級はどんな学級かな。 ・事例をもとに、みんなが笑顔になるためにはどうしたらいいのか考える。 ・みんながより笑顔で過ごせる学級にする為にできることを考える。	
成果	授業を受けた子どもは、日本と外国では文化の違いがあることに気付いた。日本の当たり前は外国の当たり前ではないことにも気付いた。文化の違いによって、困ることがあると知り、その解決方法を考えることができた。一人ひとり考え方が違うことに気付き、相手を理解し受け入れ、積極的に他者と話し合いができるようになった。 指導者としては、様々な参加型の話し合いの仕方を知り、他の授業でも使えるようになった。		
課題	今回のプログラムを通して、子供は、他国の文化や相手を受け入れることの大切さについてよく理解することができた。しかし、全てを受け入れることが互いの笑顔を広げ続けることに繋がるのかどうかについて考えることが難しかった。子供の様子をや発達段階に合わせて授業をしていく必要がある。		
備考	外国籍児童も在籍する学級なので、その子供達と授業を繋げた。使用する言葉は実情に応じて考慮する必要がある。(例:外国の学校に日本人一人だけだったら⇒外国籍児童はどう思う？考えさせたい?)		

[授業実践の詳細]

1～2 時限目 「ネパールってどんな国？日本と同じや違いはあるのかな。」

この時限のねらい

- ・ネパールの衣装を身にまってみたり、楽器を弾いてみたりするなどの体験を通して、ネパールと肯定的に出会う。
- ・クイズや写真を通して、外国と日本の違いや友達との考えの違いに気付く。

1 子どもの活動の流れ

【1 時間目】

① ネパールの文化を体験する。〈全体〉

- ・各グループにネパールボックスに入っていた物を渡す。
- ・数を確認し、グループごとに中身を出し、机の上に並べる。
- ・教師は1グループずつ呼び、衣装を着せる。

他のグループは各テーブルにおいてある物を見に行く。

※1つ1つネパールから持ち帰ったものであり、大事に扱うことを伝える。

【2 時間目】

① ネパールクイズに答える。〈全体〉・国旗、イエティ、エベレスト、人口、など

② 担任がネパールで食べてきた食べ物の写真を見る。〈グループ〉

- ・モモ、ダルバート、ネパールのホームステイ先や飲食店で食べた物など

③ 食べたい順に写真を並べる。〈グループ〉

- ・【ダイヤモンドランキング】

④ グループごとに交流をする。〈全体〉

- ・食べてみたい順番だけでなく、理由も伝える。
- ・伝える担当と、聞きに行く担当に分かれて活動した後、グループに戻って、他の班の考えを伝える。

⑤ 食べ物ごとのエピソードを伝える。〈全体〉



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「ネパールには、日本にないご飯があるんだ！」と、日本との違いに驚いていた。
- ◇「日本にあるものが、ネパールにもあるのかな？」と、日本で当たり前にあるものが、ネパールにもあるのかどうか不思議に思っていた。
- ◇「日本と同じ所や違うところを探してみたい！」と、食べ物以外にも興味をもった。

3 使用した教材

〈教材1〉ネパールBOX(JICA より)

〈教材2〉ネパールで購入したヘナタトゥーやシンギングボール

〈教材3〉ネパールクイズ(Canva)

〈教材4〉ネパールで撮影した写真や動画

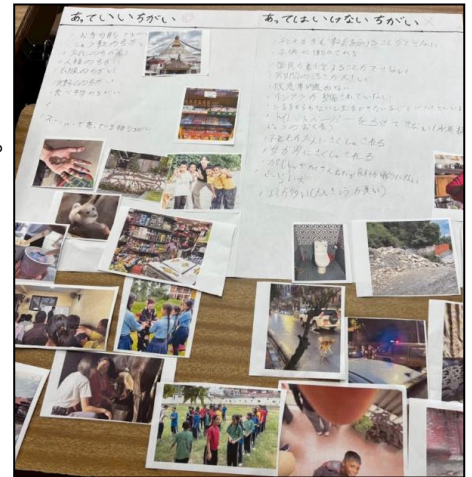
3 時限目「あつていいちがいと、あつちいけないうちがいて何だろう。」

この時限のねらい

・ネパールの写真から、日本との生活の違いを比べる活動を通して、文化として受け入れられる違いと、国や文化が異なっても受け入れてはいけない違いについて気付く。

1 子どもの活動の流れ

- ① ネパールと日本の同じと違いを予想する。〈全体〉
 - ・国名、言語、食べ物、宗教などの違いはでてきたが、同じが出てこない。
- ② ネパールの写真を見て、日本と同じだと感じる写真と、違うと感じる写真に分ける。〈グループ〉
 - ・【フォトランゲージ】
 - ・特に基準は設けず、子供の感覚で分類する。
- ③ 写真のバックグラウンドを伝える。〈全体〉
 - ・ヘナタトゥーの意味や、笑顔の子供は物乞いをしていることなどを教師の言葉で説明する。
- ④ あつていいちがいと、あつてはいけないうちがいにわける。〈グループ〉
 - ・【対比表】理由を書き込む子供もいる。
- ④ グループの半分の人が他のグループの考えを聞きに行き、半分の人が残って説明をする。〈全体〉



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「日本での当たり前は、外国では違うんだ。」と、文化の違いに気付くだけでなく、「外国の文化でも日本と同じ所がある。」と、国が違っていても似ているところや同じところもあることに気付いた。
- ◇「自分たちが安心して暮らしていることも当たり前のことではないんだ。」
- ◇日本と外国との違いを楽しく分類していたが、自分達よりも小さい子供が学校に行けず、物乞いをしていると後から知ると、これまでに見たことのないくらい教室が静まりかえった。それほど、子供にとっては衝撃的だった。
- ◇自分達は幸せで、ネパールは不幸せであると認識する子供が多かったため、第4時限目で「幸せとは何か」について考えることとした。

3 使用した教材

〈教材5〉ネパールの写真

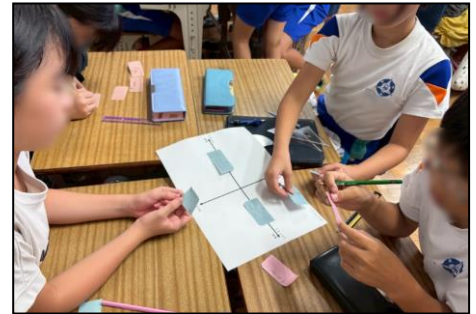
4 時限目「ネパールの人って幸せじゃないの？ 幸せってなんだろう。」

この時限のねらい

・自分にとっての幸せと、友達にとっての幸せを比べる活動を通して、幸せは国によっても人によっても異なるのだということに気付く。

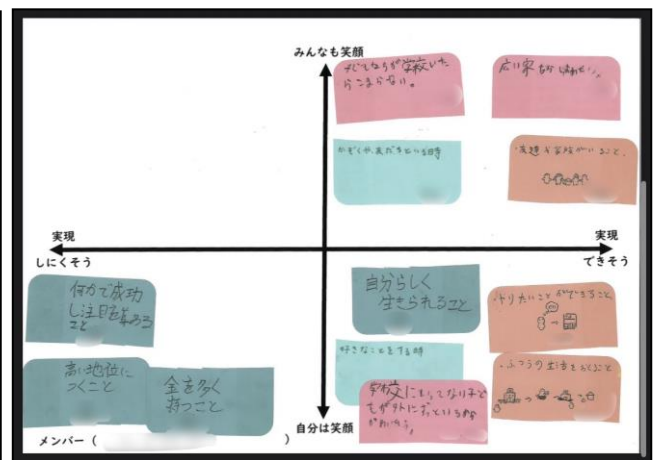
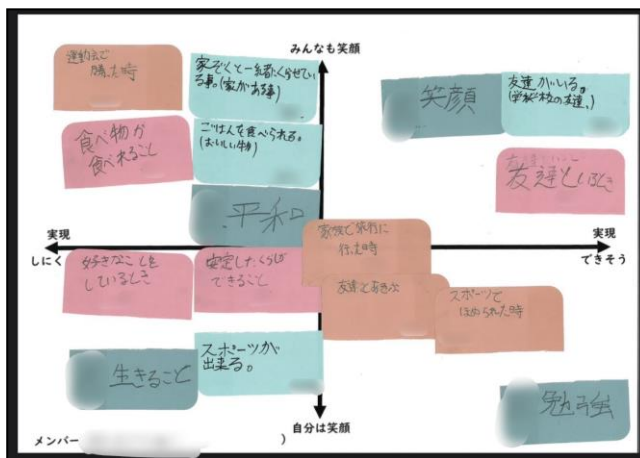
1 子どもの活動の流れ

- ① 自分にとって「幸せだと思うこと」を付箋に書く。
 <全体> ・4人グループで付箋を一人一色使う。
- ② 2次元軸に自分の付箋を貼る。<グループ>
 ・【2次元軸】(みんなも笑顔⇔自分は笑顔、
 実現できそう⇔実現しにくそう)
 ・グループに考えを言いながら自分が思う位置に付箋を貼る。
 ・グループで話し合っている中で、付箋の位置を変える子供もいた。
- ③ 他のグループの用紙を見に行く。<全体>
 ・【ギャラリー方式】
 ・自分のグループと他のグループとの考え方の違いを感じている子供もいた。



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「人によってそれぞれ色々な考えや幸せがあるから、みんなが笑顔になれる方法をもっと考えた
い。」と、人によって幸せだと感じるものが違うのだと気付いた。
- ◇「ネパールの人を笑顔にするためには、寄付とか施設を建てることだと思っていたけど、人によっ
て幸せは違うし、自分には何ができるかなと思った。」と、相手にとっての「幸せ」に必要なもの
は何か考えることができた。
- ◇「ネパールの人の幸せを知りたいと思った。」と、相手が喜ぶことは何だろうと考えるきっかけにな
った。次回は実際にネパール人のラクスマンさんから話をきいてみることにした。



3 使用した教材<教材6>2次元軸の表

5 時限目「ラクスマンさんから学ぼう。外国の人と繋がろう。」

この時限のねらい

・ネパール人のラクスマンさんとのオンライン交流を通して、ネパールのことをより深く知り、親しみをもつて感じられるようになる。

1 子どもの活動の流れ

- ① ラクスマンさんからネパールクイズを通してネパールのことを学ぶ。
 - ・ラクスマンさんは、クイズの間で、ネパールの文化について子どもたちに教えてくれた。
- ② ラクスマンさんに質問
 - ・多くの子供が手を挙げ、質問しようとした。



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「日本で当たり前のことも、ネパールではびっくりされることがあるんだ。」と、驚いていた。
 - ◇「自分も大切だし、みんなも大切にしたい。」「自分の事や、自分の国を誇りに思い、夢をあきらめないことが大切。」「自分の生まれた国を大切にしたい。」実際に外国の方とつながり、日本の魅力を教えてもらったり、自分の国の文化の大切さを教えてもらったりすることで、自分や自国を大切にしたいと感じていた。
- また、ラクスマンさんの人柄から、外国とつながることの楽しさや、実際に話してみることの面白さを感じているようだった。ラクスマンさんの言葉が子供の心に届いているように感じられた。
- ◇「ネパールのことをもっと知って、広めていきたい。」「ネパールに行ってみたい」と、ネパールを身近に感じるようになってきている様子が見られた。



3 使用した教材

<教材7>ワークシート

6 時限目「文化が違って、みんな笑顔になるにはどうしたらいいのかな。」

この時限のねらい

・異なる文化をもつ人と共に生活する上で、相手の文化を受け入れるだけでは十分でないことに気づき、多文化共生の在り方について考えを深める。

1 子どもの活動の流れ

① 日本の中にも文化の違いがあるのかな。〈全体〉

・【4つのコーナー】①目玉焼きには醤油！②朝はお米 など
(はい、どちらかといえばはい、どちらかといえばいいえ、いいえ)

② 外国からの転校生、保護者からの願いは。。。？

・①お祈りの部屋が欲しい。②お守りとしてティカをつけていきたい。
③宗教的に肉が食べられないので、給食でお肉を提供するのをやめてほしい。など、様々な願いがくる。その願いを2次元軸（受け入れられる⇔受け入れられない、みんな笑顔⇔自分は笑顔）で分類する。

③ グループの半分がのこり、半分が他のグループの考えを聞きに行く。

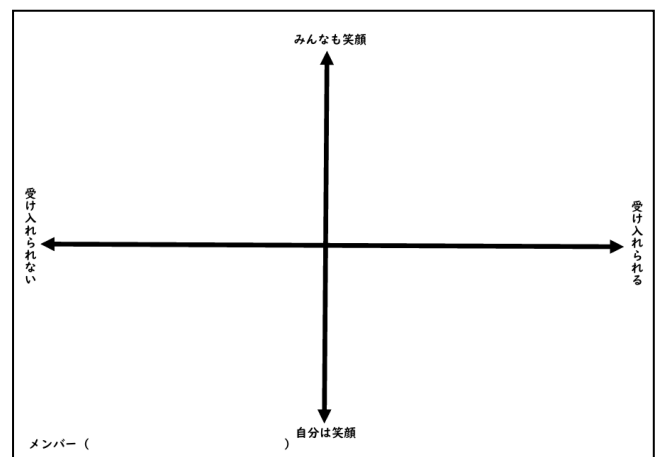
・1班は2班に、2班は3班に見に行く、など指定して集中して話を聞かせるようにする。

はい	はい はい はい
いいえ	どちらかと いえば いいえ

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇「人によって受け入れられることもあれば、受け入れられないこともあるから、まずは相手の意見をちゃんと聞かなきゃいけないな。」と、これまで異文化は受け入れればよかった子供は、全て受け入れるだけが解決策にはならないことに気づき、より現実的な解決策について考えた。
- ◇「自分と違う人も笑顔になれるにはどうしたらいいのかな。」
- ◇「最初は知らないから受け入れられると言ってたけど詳しく知ると受け入れられないことが多くて驚いた。文化が違うとルールも違う。でも少しでも受け入れてあげたら嬉しいんじゃないかな。」

服装  ふだんから着ている服 「学校にサリーを着ていてもいいですか？」	くつ (うわくつ)  ネットの学校の室内もくつ 「くつのまま、教室に入ってもいいですか？」	食べ物  宗教的に肉を食べられない 「子供に悪えいさよう。給食のお肉をなくしてほしい。」	お祈り  お祈りの時間 「お祈りをするための部屋を用意できますか？」
幸運を祈る  おでこに悪い点 (ティカ) 「ティカは毎日かさず付けています。学校にも付けてください。」	行事  個人のかを伸ばす 「みんなが頑張る行事は必要ですか？なくしましょう。」	言語  日本語がむずかしい 「漢字が読めません。全てひらがなにして、そちらならじの手も読めます。」	手食文化  おはしを使った事がない 「おはしをまだ使えません。手を洗って食べてもいいですか？」



3 使用した教材

＜教材8＞はい、いいえカード

＜教材9＞2次元軸

＜教材10＞お願いカード

[全体を通して]

1 実践の総括

◇ 自校の特徴として、外国籍児童が多く在籍していることが挙げられる。日本人児童にとって、外国籍児童が授業で感じている困り感や、保護者が日本語を理解することの難しさに気付くことは容易ではない。また、給食の日本食が口に合わないことや、持ち物が十分にそろわないことなどについても、その背景にある事情を知らないために、配慮に欠けた発言が見られることがある。

そこで、子ども同士であってもそれぞれに違いがあることを理解し、お互いの違いをどのように受け入れていけるのかを、どのように子供たちに伝えていけばよいのか試行錯誤する中で、この教師海外研修に出会った。

教師海外研修を通して、教師自身がマイノリティの立場を体験し、日本に働きに来ている外国人のルーツをたどりながら、文化や考え方、経済状況の違いを肌で感じる事ができた。

研修では多くのことを経験した。多くの方々に支えられていることを実感する一方で、どのような実践ができるのか、自分に何ができるのかと不安になることもあった。しかし、1年間研修を共にした仲間と不安や思いを共有し、JICA や NIED の皆様の手厚い支援を受けたことで、子供に伝えたい思いを実践という形にすることができた。

今後は、この経験を自分の学級だけにとどめず、学校や所属地区へと広げ、より多くの人のためになるよう、さらに学びを深め、実践を重ねながら発信していきたい。

2 次の実践者へのエール

◇ 教員として勤務する中で、外国籍児童に対してどのような支援ができるのかを考えてきたが、個人の配慮だけでは、外国籍児童を支えることは難しいという課題を感じていた。

そのような思いから、外国籍児童だけでなく誰もが安心して生活できる環境づくりを目指し、本教師海外研修および開発教育指導者研修（実践編）に参加した。本研修では、多様性理解を促すさまざまな実践を体験するとともに、実践の構想から実施までの流れを丁寧に学ぶことができた。そのため、安心して授業実践に取り組むことができた。

1年間、関係機関や研修参加者に支えられながら実践を重ねたことは、自身の成長につながったと感じている。また、その学びや実践が、自分の関わる子供や周囲の教職員へと広がっていくのではないかなと思う。



3 参考文献・資料

- 1) 『よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編』2018年、NIED・国際理解教育センター

以上

Personal is Political ～共生社会に向けた私たちの選択～

所属	静岡県沼津市立長井崎小中一貫学校	実践者	真野 直亮
対象	中学校1年生（14名）	実践日	2025年9月～12月
実践教科	総合的な学習の時間・英語	時間数	21時間
テーマ	共生、貧困、ソーシャル・アクション		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・外国の文化、人物を知り、いいかも、遠い存在でないと思ったり、気づいたりする。 ・貧困の輪を断ち切るためにできることを考え、活動をしている人の思いについても理解する。 ・自分たちにできるソーシャル・アクションを起こし、その経験から行動宣言をまとめる。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	ネパール食べ物ランキング【ジグソー法】【ランキング】	講師： エベレストダイニング 店長ライマジさん
	2	ネパールと日本のいいね！【ジグソー法】【対比表】	
	3	ネパールのライマジさんとモモを作ろう	
	4	幸せに生きるために生まれた私たち【派生図】【フォトランゲージ】	
	5	日本の紹介文を英語にしよう	
	6	NEXT GENERATION RESIDENTIAL ACADEMY とのオンライン交流会	相手校： ネパール(カトマンズ)の学校
	7	みらいカレッジ三島キャンパスとの交流会	
	8	幸せ ～貧困をなくす一歩を踏み出そう～【対比表】【因果関係図】	相手校： みらいカレッジ三島キャンパス
	9	シャプラニールの支援って？(講演会)	
	10	幸せ ～自分たちにできる一歩を踏み出そう～【ブレインストーミング】	講師： 認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会 高階さん
	11～13	カフェに向けて、準備をしよう	
	14	東部特別支援学校との交流会	
	15	みかん収穫体験	相手校： 静岡県立東部特別支援学校
	16～20	広め、伝え、知ってもらおう 私たちの Action エベレストカフェ	
	21	共生社会を担う私たち ～Personal is Political～【対比表】	
成果	ネパールのことを知り、興味を持った子供たちは、ネパールの児童労働等の課題を学び、カフェ運営を通じた啓発と募金活動を成功させた。初対面の人との交流への緊張が減り、外国文化への関心や社会貢献への意欲・効力感が高まり、自分たちも課題解決に貢献できるという自信を得る成果があった。		
課題	多くの方に来場してもらえよう、駅前の商業施設でカフェを開催した一方、学校と施設間の距離があるため、移動に時間がかかってしまった。本実践では外部との連携が多くなるため、日程調整や連絡が多くなっていた。次年度以降も中学1年生の「総合的な学習の時間」として継続していけるようにしていきたい。		
備考			

[授業実践の詳細]

1 時限目「ネパールの食べ物ランキング」

この時限のねらい

- ・ネパールの食事について興味を持つ。
- ・チームで話し合い、食べてみたい食事をランキングでまとめる。

1 子どもの活動の流れ

- ① ネパールの食べ物ランキング（個人）
 - ・9つの写真を見て、どの料理を食べてみたいかロイロノートにランキングでまとめる。
- ② その料理は、どんな料理？（グループ）
 - ・カード（写真とその料理についての説明）を1つずつ読み込み、メンバーに30秒で説明する。
 - ・9つのカードすべて説明し合えるように、2周から3周行う。【ジグソー法】
- ③ もし、チームでネパールへ旅行に行くなら（グループ）
 - ・説明を聞いた上で、どの料理を食べたいか、話し合い、ランキングにまとめる。
 - ・グループのランキングを回し読み方式で共有し、同じ意見や「なるほど」と思った意見に印を付ける。
- ④ 振り返り



【カードの内容をグループに説明する様子】



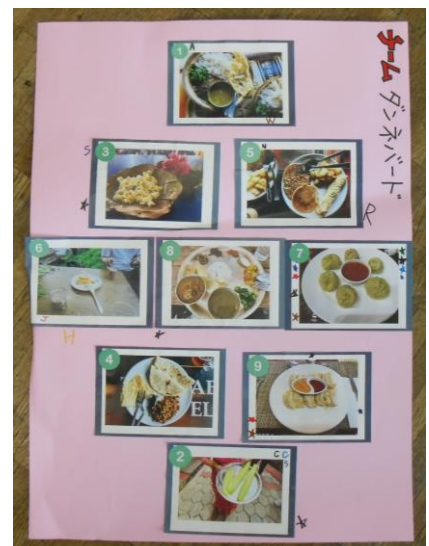
【グループでランキングにまとめる様子】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇食べたことのなかったネパールの料理であったが、多くの生徒が食べてみたい、行ってみたいと考えていた。
- ◇写真だけを見た印象と説明を聞いた後の印象では、違いのあった料理があり、より興味を持って学んでいた。

3 使用した教材

- <教材1>ネパールで撮影した料理の写真
- <教材2>料理の写真と料理の説明が書かれたカード



【食べ物ランキング】

2 時限目「ネパールと日本のいいね！」

この時限のねらい

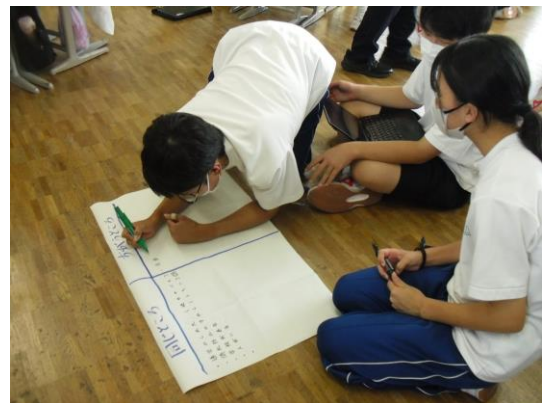
- ・ネパールの生活・文化・衣食住に興味を持つ。
- ・ネパールのいいところや日本のいいところに気付く。

1 子どもの活動の流れ

- ① ネパールの親善大使になって、説明しよう
(7人グループ)
 - ・カード(ネパールの衣食住など1テーマ)を1つずつ読み込む。
 - ・親善大使になったつもりでメンバーに30秒で説明する。【ジグソー法】
- ② 日本の紹介文を作ろう(2人グループ)
 - ・同じテーマを選んだメンバーで集まり、日本について紹介するカードをCanvaで共同作成する。
 - ・作成したカードをクラスのメンバーに発表する。
- ③ 日本とネパールの同じと違い(グループ)
 - ・日本とネパールの同じところ、違うところを表にまとめる。【対比表】
- ④ 振り返り



【カードの内容をグループに説明する様子】



【対比表にまとめる様子】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇学校での生活やお金などネパールへの理解をより深めていた。また、町並みや景観など写真を見ることが楽しかったという反応もあった。
- ◇日本とネパールの同じところを多く気付いていた。
- ◇スーパーでは少額のおつりの代わりに飴玉がもらえるというネパールでのエピソードがとても新鮮だったようで、振り返りには肯定的な言葉が多く書かれていた。

3 使用した教材

- <教材3>写真と説明が書かれたネパールの紹介カード
(お金・住まい・衣装・自然・学校・町並み・国民性)

5 日本の学校

日本の学校															
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
小 学 校						中 学 校			高 等 学 校			大 学 部 校			
授業時間表															

特徴
 ・昼食を軽食ですませますネパールとは違い、日本には学校給食というものがあります。日本全体の給食について、小学校の普及率はほぼ100%です！
 ・ネパールの学校と同じように、学校には徒歩やバスで通う。
 ・授業中は日本語のみ。多国語は、英語の授業でしか使いません。
 ・四季に合わせた休みがありますが、秋休みだけありません。
 ・日本は1~6が小学生、7~9が中学生、10~12が高校生、13~16が大学生になっています。
 ・ネパールでは祝日が30日ほどありますが、日本の祝日は16日しかありませんので、お休みの日が少ないと感じるかもしれません。

【生徒が作成した日本を紹介するカード】

6 時限目「NEXT GENERATION RESIDENTIAL ACADEMY とのオンライン交流会」

この時限のねらい

- ・ネパールの同級生と英語で交流する。
- ・それぞれの踊りを披露し合い、互いの文化を知る。

1 子どもの活動の流れ

① 学校紹介と自己紹介

- ・代表の生徒がそれぞれの学校について英語で紹介する。
- ・生徒一人ずつ、自分の名前と好きなことを英語で発表する。

② アイスブレイク クイズ

- ・事前に考えていた日本についてのクイズを出題し、ネパールの生徒に解答してもらう。
- ・ネパールの生徒が考えていたクイズを出題してもらい、日本の生徒が答える。

③ 文化交流

- ・学校祭で披露した「ソーラン節」をネパールの生徒に向けて披露する。
- ・ネパールの踊りを披露してもらい、鑑賞する。

④ 振り返り

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇緊張した様子であったが、事前に英語で文章を考えていたために、お互いに英語で交流ができた。
- ◇交流会後のアンケートでは、90%以上の生徒が「授業前より、ネパールのことが身近になった」と回答した。
- ◇ネパールの生徒が描いた「日本のアニメキャラクター」のイラストを披露してくれた。生徒は、その上手さと自分たちの好きなキャラクターを描いていることに強く驚いていた。親近感がぐっと増した様子であった。

3 使用した教材

<教材4>生徒の作成したクイズのスライド



【代表の生徒が学校紹介をする様子】



【ソーラン節を披露する様子】



【ネパールの生徒の踊りを鑑賞する様子】

8 時限目「幸せ ～貧困をなくす一歩を踏み出そう～」

この時限のねらい

- ・ネパールの抱える課題の現状を知り、その背景や原因に気付く。
- ・現在行われている支援について知り、課題に対して自分たちができることを考える。

1 子どもの活動の流れ

① いけない違いと良い違い（グループ）

- ・9枚のカードを「あってはいけない」・「あっても良い」・「どちらでもない」の3種類に分類する。
- ・グループでその理由や基準を話し合い、分け方を全体で発表する。【対比表】

② CWIN でのエピソードを聞く

- ・教員が教師海外研修で学んできた話を聞く。

③ ネパールの児童労働って？（グループ）

- ・児童労働に関する事例カードを1枚ずつ読み込む。
- ・カードの内容を要約して、メンバーに30秒で説明する。【ジグソー法】

④ 貧困の輪（グループ）

- ・貧困をスタートとする8枚のカードを使って、「貧困の輪」がどのようにつながっていくのか考える。
- ・貧困の輪を断ち切るための支援は、どこに関連しているのか話し合い、カードを貼る。
- ・貧困解決のために、自分ができることを付箋に書いて貼る。【因果関係図】【マッチング】

⑤ 振り返り

2 子どもの活動の成果・反応

◇違いに注目し、その中でも「児童労働」はあってはいけないこと、自分たちにできることをしたいという思いが高まっていた。

3 使用した教材

<教材5>日本とネパールに関する9枚の違いカード

<教材6>写真とネパールの児童労働の実態が書かれた7枚の事例カード

<教材7>貧困の輪のカード・支援の事例カード



【9枚のカードを分類する様子】



【自分たちできる支援を話し合う様子】



【生徒が作成した貧困の輪とその支援】

10 時限目「幸せ ～自分たちができる一步を踏み出そう～」

この時限のねらい

- ・課題解決のために自分たちでも取り組めることがあることに気付く。
- ・カフェを通して伝えたいことを共有し、実現のための手立てを考える。

1 子どもの活動の流れ

① 自分の振り返りを共有する（グループ）

- ・自分の書いた前時、講演会の振り返りを読み返す。
- ・2つの視点（知ったこと気付いたこと・考えたこと 行動したいこと）でメンバーと伝え合う。

② 「貧困の輪」にシャプラニールの支援カードを貼る

- ・シャプラニールの講演会で学んだ支援を思い出し、その支援は、貧困の輪のどこを断ち切る支援になるのかチームで話し合う。【マッチング】

③ カフェを通して、どうなってほしい？（グループ）

- ・紙の左側「知る・気付く」・右側「考える・行動する」で書いていく
- ・特に大事にしたい項目を1～2ずつ選んで、シールを貼る。ギャラリー方式で共有する（「いいね・なるほど」思ったものに★印を付けていく）【対比表】

④ カフェでどんなことをする？（グループ）

- ・「カフェ」を中央に思い浮かべるものを書き込む。
- ・各自がマジックを持ち、寄せ書き風に四方八方に広げ、回し読み方式で共有する（「いいね・なるほど」と思ったものに★印を付けていく・「自分もやりたい」と思ったものにイニシャルを付けていく）

【ブレインストーミング】

2 子どもの活動の成果・反応

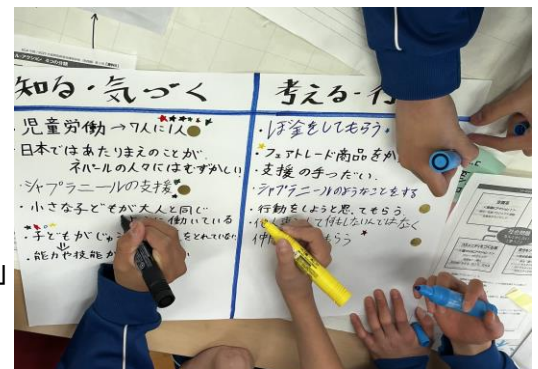
- ◇これまでの学びをもとに、カフェがどのような場になるといいのか、自分ごととして真剣に考えていた。
- ◇支援の輪を広げていく一人としてアイデアが広がっていた。

3 使用した教材

- <教材8> NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会の支援事例カード
- <教材9> 『Social Action Handbook』（開発教育協会（DEAR））



【支援カードがどこに当てはまるか考える様子】



【カフェに向けて考えを広げる様子】



【カフェのアイデアを話し合様子】

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<周りへの波及活動>

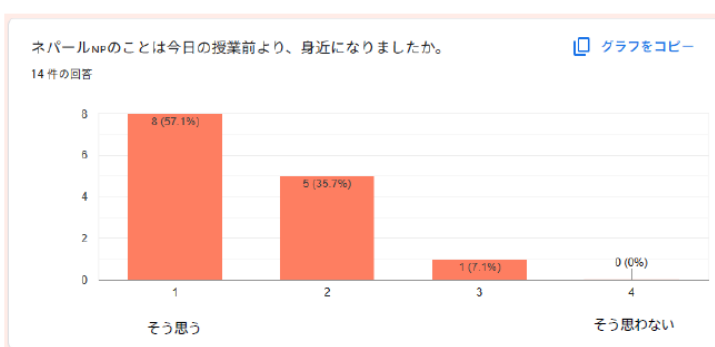
- ◇ 本校の小学校4年生、5年生、中学校2年生、3年生に向けて、ネパールでの体験の話をした。食事や文化の違い、訪問して感じたことについて、クイズを交えながら紹介した。
- ◇ 本校2階廊下にネパールに関する授業の成果物を掲示した。また、ネパールの商品や楽器などを触ったり、衣装を身につけたりできるブースを設置した。
- ◇ JICAの「開発教育・国際理解教育指導者研修（初級編）in 静岡」の中で、参加した受講者を対象にネパールに行って感じたこと、訪問前後で変化した印象を紹介した。

2 実践の総括

◇ 教師海外研修の事前研修等で学んできた3つのステップを意識して単元を進めてきた。その単元構成が、子どもたちにとって自分事として考えていく気持ちの醸成につながったように考える。

(1) ネパールと肯定的に出会う

子どもたちが興味を持ちやすい「食事」から単元を展開していった。第1時では、ネパールで食べてきた食事を写真で紹介した。また、その食事のエピソードを交えながら学んでいくと、授業の最初と最後で食べてみたいという料理が変わる生徒もいた。次の授業では、ネパールの景色や訪問して感じた特徴を学び、より興味や関心が高まっていった。ネパールの理解が深まってきたところで、沼津市内にあるネパール料理店の店長さんを学校にお招きし、ネパール料理の「モモ」作りを一緒に行った。ネパールの方と交流したことがない生徒ばかりのため、始めは緊張している様子であった。それでも、皮で包む職人の手つきを見ると、その技に魅了されている様子であった。その後、自分たちで包んだモモは、スパイスを感じ、とても美味しかったようである。ネパール出身のライマジさんと一緒にモモを作る経験は、生徒にとって学んできたネパールのことを更に学ぶ時間になっていた。授業後のアンケートでも、この体験を通してネパールとの距離がより縮まったようである。



第6時では、教員がネパールのカトマンズで訪問した学校とオンライン交流会を行った。事前に英語で文章を考えていたものの、ネパールの同級生の流暢な英語に圧倒されていた。交流会では、ソーラン節を紹介し、ネパールの踊りも紹介してもらった。考えていたクイズを答え合うなど、オンラインによるやり取りをすることもできた。この交流会は、子どもたちにとって新しい挑戦になった。

(2) 日本とネパールの同一性に気づく、つながりを理解する

本校の児童生徒による学校創り目標は「幸せミッケのプロ」である。その「幸せ」について、考えを深める授業を行った。日本やネパールで見つけた良さや課題からカードを作成し、幸せに生きるために必要なことを考えた。グループでの考えを全体で共有し、誰もが幸せになるために必要なものを考えていく時間を設定すると、国が違っていても、誰もが幸せを求めて生きてる共通性に多くの生徒が気づき、考えている様子であった。ネパールのことを知り、肯定的に出会った生徒が、つながりを理解する時間になった。

(3) 共通の課題について共に考え・共に越える

単元の後半では、「幸せ」を求めて生きている一方で、「貧困」という課題があることを学んでいった。貧困の輪がつながってしまう状況を知ったうえで、その貧困の輪を断ち切るための支援をしている「認定 NPO 法人シャプラニール 市民による海外協力の会」の活動について本校で講演をしていただいた。ネパールの課題に対して、日本で活動されている話を聞く経験は、その課題に対して自分たちには何ができるのか、という考えを持つきっかけになった。自分たちにできることをしたいという気持ちが湧いてきている生徒にどんな「ソーシャル・アクション」を取ることができるか投げかけ、カフェを開くことを通して、どんなことを知ってもらいたいのか自分たちで考えていった。カフェでは、ネパールのフェアトレードコーヒーを知ってもらいたい、ネパールの児童労働の現状を知ってもらいたい、そのために、どんなことができるか深めていった。

12月に駅前の商業施設で開いた「エベレストカフェ」では、100人を超える方に来場いただき、ネパールの手芸品の販売も行った。市民のみなさんから多くの募金も預けていただき、NPOへ寄付をした。生徒にとって社会課題解決のために行動を起こす経験は、外国文化への関心や社会貢献への意欲・効力感が高まり、自分たちも課題解決に貢献できるという自信を得る成果があった。



3 次の実践者へのエール

◇ 教師海外研修の経験は、日本の学校教育に対する理解を深めるとともに、自分の「当たり前」が「当たり前」ではないことを実感する機会となる。現場に戻った今では、その経験が子どもたちへの理解を深める視点となっている。開発教育・国際理解教育と一緒に進めていきましょう。

4 参考文献・資料

- 1) 『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』JICA 中部、2021 年
- 2) 『地球の歩き方 ネパールとヒマラヤトレッキング 2025～2026』地球の歩き方編集室、2025 年
- 3) 『Social Action Handbook』(開発教育協会(DEAR))

以上

VI. 研修全体のふりかえり・評価

● 研修受講者アンケート結果から

1. 研修の満足度について

研修受講者 9 人のうち 8 人が、5 段階評価の最上である「とても満足できた」に回答し、残り 1 人も「満足できた」としており、満足度の高い研修であったことがわかる。【設問 1】

設問 1；教師海外研修は、あなたのあなたの期待または目標達成の支援を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	8	89%
2	満足できた	1	11%
3	ある程度満足できた	0	0%
4	あまり満足できなかった + 満足できなかった	0	0%
	全体	9	100%

2. 開発教育・国際理解教育の実践について

(1) 実践時間及び前年度からの変化

研修受講者の一人平均実践時間は 9.3 時間であった。2～4 時間の短めの実践から 12～21 時間の 10 時間以上の実践まで、多様な実践が行われた。【設問 2】

実践時間の前年度からの変化では、研修受講者のうち全員が「過年度よりも増加した」としている。【設問 3】その理由の主なものは以下のとおりであり、「研修による意識変化（価値の理解）」、「実践できる方法・教材の獲得（手法の具体化）」、「学校内で実践できる機会（環境）」、つまり、「理念の理解」+「方法の習得」+「実践機会」の 3 要素が揃ったときに、実践時間が増えたと受講者は感じていることがわかる。

設問 2；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	3	25%
2	5～9時間	3	43%
3	10時間以上	3	43%
	合計実践時間数	84.0	時間
	1人当たり平均実践時間	9.3	時間/人

設問 3；過年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	増えた	9	100%
2	変わらない	0	0%
3	減った	0	0%
	全体	9	100%

※実践時間には、実践報告シートの授業時間数のほか「その他の実践」の時間を含む。

<実践時間が増えた理由の分析結果>

- ① 学びによる「気づき・意識の変化」（開発教育の価値を実感し、もっと実践したいと感じた）
- ② 魅力的な体験・教材を得た（授業で使いたいと思える素材や体験を得た）
- ③ 参加型手法の効果を実感（子どもの学びが深まることを実感した）
- ④ 教科・単元とのつながりが見えた（授業の中で取り入れるイメージが持てた）
- ⑤ 学校内の機会・環境があった（実践できる場や支援があった）

(2) 実践内容の深まりについて

研修受講者のうち7人が「とても深まった」、残り2人も「深まった」としている。【設問4】

その理由の主なものは以下のとおりであり、体験（現地経験・リアリティ）、概念理解（人権・セルフエスティームなどの視点）、学習方法（参加型・主体的学習）が深まった背景にあると考えられる。つまり、これらの3つの要素の組み合わせ、学びが「知る → 自分事として考える → 行動・発信する」という段階へ発展することによって、学習者の学びが深まると受講者は感じていることがわかる。

設問4；前年度に比べて本年度の実践内容はどのようになったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	7	78%
2	深まった	2	22%
3	ある程度深まった	0	0%
4	あまり深まらなかった+深まらなかった	0	0%
	全体	9	100%

<実践内容が深まった理由の分析結果>

- ① 現地体験・実体験に基づく学び（実際に見たこと・経験したことが授業の深まりにつながった）
- ② 学習テーマ・概念理解の深化（開発教育の考え方やテーマ理解が深まった）
- ③ 参加型・主体的な学びの方法を活用（子どもが主体的に考える授業づくり）
- ④ 学習内容を自分の生活や既習と関連づけた（世界の問題を身近な問題として考える）
- ⑤ 学びが行動や社会への発信につながった（学校や地域へ広がる学び）

3. 学習者のより良い変化について

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、「とても変化があった」が4人、残りの5人も「変化があった」であり、研修受講者全員が、学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問5】。

設問5；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	4	44%
2	変化があった	5	56%
3	ある程度は変化があった	0	0%
4	あまり変化はなかった+変化はなかった	0	0%
	全体	9	100%

より良い変化の内容として半数以上の受講者が回答したのは、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」が全員、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」8人、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」7人、「話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった」5人、「学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った」5人であった【設問6】。

これらのことから、ネパールでの体験を基にした開発教育の実践は、学習者の関心や理解にとどまらず、他者への共感や世界とのつながりの認識、さらには主体的な学びや行動への意欲の高まりにつながっている。遠い国の出来事を自分たちの生活や社会と結び付けて捉える姿勢が育まれ、世界の課題を自分事として考える学びへと発展していることがうかがえる。

設問6；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	9	100%
2	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	8	89%
3	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	7	78%
4	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	5	56%
5	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	5	56%
6	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	4	44%
7	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にすることを意識が高まった	4	44%
8	自らの生き方や共生について考えるようになった	3	33%
	全体	9	100%

4. 研修内容への評価

(1) 現地研修

<よかったこと（継続してほしいところ）>

① 現地の人々との交流・生活体験

- ◇ホームステイにより家庭に入り、その国の生活や文化を体験できた。
- ◇現地の人と直接つながり、生の声を聞くことができた。
- ◇普段出会えない人々と関わり、人との縁ができたことが印象的だった。

② 多様な現場訪問による学び

- ◇日本語学校、児童労働保護施設、フェアトレード関係施設など様々な分野を訪問できた。
- ◇農村部・都市部の学校訪問や児童生徒との交流ができた。
- ◇JICA 海外協力隊員の活動現場の見学や話を聞く機会があった。

③ 現地での体験を通したリアルな理解

- ◇現地に足を運び、五感で社会の状況を感じることができた。
- ◇観光地や市場で教材につながる資料を収集できた。
- ◇日本とのつながりや世界の課題を、実感を伴って考えることができた。

④ 振り返り・共有による学びの深化

- ◇その日のうちに振り返りミーティングを行い、記憶が新鮮なうちに整理できた。
- ◇仲間と学びや気づきを共有することで、学びがより深まった。
- ◇「マナビノオト」を使い、気づきや思いを書き留めることができた。

⑤ 仲間との協働学習

- ◇仲間と共に学ぶことで、多様な視点からの気づきが得られた。
- ◇日々の対話や共有を通して、一人では得られない深い学びにつながった。

⑥ 研修運営・サポート体制

- ◇ファシリテーターが同行していたことで判断の支えになった。
- ◇宿泊地が固定されており、毎日十分に休息が取れた。
- ◇予算や行程が明確で、安心して研修に参加できた。

<より良くするための提案>

- ◇特になし

(2) 事前研修、出発前説明会、事後研修①

<よかったこと（継続してほしいところ）>

① 目的や視点を明確にする事前準備

- ◇事前研修があったことで、現地で収集する教材や見てくる内容が明確になった。
- ◇「見てきたいこと・知りたいこと」を事前に整理することで、現地での学びがより主体的になった。
- ◇前年度の資料などを読み込むことで、事前理解を深められた。

② チームでの協働と役割分担

- ◇経験収集や教材収集をチームで分担したことで安心して準備できた。
- ◇事前に活動チームが決まっていたため、分担して準備を進めることができた。
- ◇「チームで行く研修」という意識が生まれ、不安の軽減や安心感につながった。

③ 実践づくりにつながる事後研修

- ◇模造紙を使いながら実践内容を考え、仲間から意見をもらえたことが有意義だった。
- ◇収集した教材をもとにチームで授業やアクティビティを考える時間が学びを深めた。
- ◇単元構想を作ることで、実際の授業実践に結び付けることができた。

④ 参加者同士の学び合い

- ◇仲間と一緒に考えたり相談したりすることで、多様な視点から学ぶことができた。
- ◇個別に実践相談をしたことで授業構想がよりよくなった。
- ◇参加者同士の交流を通してチームとしての関係が深まった。

⑤ 研修運営・サポート体制

- ◇安全面やマナーなどを含め、丁寧な説明があり安心して研修に臨むことができた。
- ◇事前研修や出発前説明会により、研修全体の見通しを持つことができた。
- ◇行く前・帰国後のサポートが充実していた。

<より良くするための提案>

- ◆事後研修をもう少し増やし、実践の共有や相談の時間を充実させる。

(3) 全体を通して ※お礼を除き、原文そのまま掲載。

◇私的旅行では行けない場所に行き、学びを深めることができ自分の中でとても大きな経験になりました。集団行動を大切にしながらも、個人の時間も確保してもらえたのがよかったです。

◇本当に世界が広がりました。人との繋がりや教育の広がりを感じました。わたしの人生のターニングポイントになった気がします。

◇念願の研修に参加できて本当に良かったです。学びを途切れさせないよう今後も精一杯努力します。

◇同じ体験をしてきても、その体験の活かし方は様々だし、一緒に行ってきた人達のすごさを改めて感じた。これは悔しいことだけど、自分にしかできないことがあると同時に新たに、自分の可能性を見つけたということでもある。自分をもっと好きになって、そして誰かのためになって、その誰かも多くの人のためになれるような、そんなスパイラルを皆で回していけるようなそんな人になりたいです！素晴らしい方々との出会いに感謝です。

◇一生ものの学びの機会となりました。

◇生の声、生のものは子どもたちにとってもより深く学べる教材となりました。本当の仲間ができました。みんなと学べたことが本当に宝物です。ネパールが身近になりました。大切な存在になりました。

◇「子どもたちに還元するための研修」と思い参加しましたが、「自分の心も成長させてもらった研修」にもなりました。2年の実践編の受講を通して、模造紙で自分を表現しながら自己開示をし、多くの方と対話をすることができました。最終日にはもうこうやって全員で自然に会える機会がないのは寂しい！と感じていました。過去の実践者がよく口にする「繋がり」の心強さ、暖かさを感じるすることができました。仲間がそれぞれ頑張っていると思うと心強いです。これからも細く長く学んできたことを基に開発教育、国際理解教育を続けていきます。

◇現地での体験を通して、自分の「あたりまえ」を問い直す貴重な機会となり、物事を多面的に見る意識が一層高まった。子どもたちに伝えたい具体的なエピソードや教材の種を数多く得ることができ、授業への活用意欲が高まっている。事前準備や現地での記録（特に動画や多様な場面の記録）の重要性を実感し、今後の研修参加者にも共有したいと感じた。国内外の多様な実践者との出会いが大きな刺激となり、今後も学び続けたいという意欲が一層高まった。本研修で得た学びを、自校の実践だけでなく、研修や発信を通して広く還元していきたいと考えている。

◇海外研修に参加してみて、JICA、NIEDの同行者をはじめ、ネパール事務所のスタッフ、日本国内で支えてくださったJICA、NIEDのスタッフなど、改めて多くの方のサポートがあってこの研修が成り立っていることを実感しました。体調が悪く不安が大きかったのですが、とても安心したことを今でも覚えています。だからこそ、今回の貴重な学びをすることができたことをとても幸せに感じています。今年度の実践に終わることなく、この経験はこれからも子どもたちや職員に還元していきたいと思います。そして、教師海外研修の魅力を伝え続けていきます。

5. 教師海外研修と開発教育指導者研修(実践編)の両方を受講することの効果

本年度は教師海外研修の受講者全員が、開発教育指導者研修(実践編)も受講した。両方の研修を受講することの効果として感じたことは以下のとおり。

① 現地体験を授業実践へつなげられる

- ◇教師海外研修で学んだことを、どのように授業に落とし込むか具体的に考えることができる。
- ◇現地で得た学びを様々な手法を使って子どもに還元できる。
- ◇見てきたこと・学んだことを多くの人に伝えられるようになる。

② 参加型の授業づくりができるようになる

- ◇実践編で参加型の手法やファシリテーションを学ぶことで、素材の良さを活かした授業ができる。
- ◇海外での学びを一方向的に伝えるのではなく、子どもが世界を自分事として考える授業にできる。
- ◇「知って終わり」ではなく、参加型授業へと実践を一段深めることができる。

③ 教材収集や学習活動の目的が明確になる

- ◇どのような教材を集めたいか、どんなアクティビティを行うかを考えながら現地研修に臨める。
- ◇授業実践のイメージを持ちながら教材収集ができる。
- ◇体験した手法と現地で得た学びを結びつけて授業を構想できる。

④ 学びの整理と実践の深化

- ◇振り返りミーティングを通して、現地で得た情報を整理しアウトプットすることができる。
- ◇理論と実践が結びつき、学びを具体的な授業づくりまで発展させることができる。
- ◇多様な立場や背景を踏まえて考える視点が深まり、「誰一人取り残さない教育」への理解が深まる。

⑤ 仲間との学び合い・支え合い

- ◇研修を通して仲間が増え、互いの実践について学び合える。
- ◇仲間やファシリテーターとの対話により、自分の実践を客観的に見直すことができる。
- ◇応援してくれる人の存在を感じながら学び続けることができる。

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った場面』解説

伊藤袖季「言葉を越えたつながり」

音楽に合わせて踊っているうちにだんだん心の距離が縮まっていくのを感じた。言葉が通じなくても同じ空間で同じ経験をすることで得られる心のつながりを知った。

垣内望花「涙がこみ上げた歌」

子どもたちの歌や姿に心打たれ、教育は子どもがいきいきと生活できる環境こそ大切だと実感した。子どもらしい姿に感謝があふれ、涙がこぼれた。

橋本幹子「子どもたちが教えてくれたこと」

防災を英語で語る子、物怖じせず笑顔で関わろうとする子、学びに目を輝かせる子。ネパールで出会った子どもたちは心の底から生き生きと輝いていた。これからこのような外国の子どもと共に未来を担っていく日本の子どもたちに、私は何を伝え教えればよいのだろうか。

松本双葉「言葉がなくても踊りてつながる」

初めてネパールの小学校で授業をさせてもらった。まだ表情がこわばっていた子ども達も、一緒に踊ると笑顔を見せてくれた。踊り方も音楽も言葉も衣装も異なるけれど、共に心を通わせることができるんだ。

真野直亮「私が一員になったとき」

トラックから降ろされる重い袋。中身は藁である。ホームステイ先の女性達の家事の一つで、多い時には10袋以上運ぶらしい。たった15段の階段を下りるのも過酷だったが、手伝うことができて嬉しかった。

杉下絵里華「みんなの夢が叶いますように！」

お世話になったホストファミリーに夢を聞いた時の一枚。迷いなく折り紙にペンを走らせる姿に強い意思を感じた。夢を語る生き生きとした表情も忘れられない。大好きな人たちの大切な夢。心から応援したくなった。

澤田晃一「原点」

祭りを題材に日本文化を紹介する模擬授業を行った。社会科教員の自分が英語で授業をする日が来るとは思わなかったが、拙い表現でも伝わった時や子どもたちが楽しんでいる姿を見た時、原点に立ち返ったような気持ちになった。

丹羽真琴「しあわせ」

パパもママもお互いのことが大好きで、家族が大好き。家族という時や、この村の人と過ごす時間、そして、私たちと会えたことが幸せと言っていた。パパとママみたいに側にある幸せを大切にできる人でありたい。

野田琴乃「未来へ続く一歩」

機能していない信号機、ルールを守る意識が薄れている人々。その中で、丁寧に声をかけ、みんなのために尽力していた。明日、効果を実感できない中でも、未来のために取り組む協力隊員の姿は、今も胸に焼き付いている。





